

# 南仏・カタロニア・ドライブ旅行記

## pdf版

平成12年10月30日

平成14年11月10日(改)

平成15年1月30日(pdf化)

阿部敏雄(敏翁)

この旅行記は、平成8年(1996)4月23日から5月13日まで南仏とスペインのカタロニア地方ををレンタカーによるドライブ旅行したときのものです、本テキストの原文は、パソコン通信ネットNifty-SERVEのSIG FEUR 0の「フランス」会議室に掲載したのですが、それを主体としてそれに画像を加えて纏めてみました。尚、「敏翁」とは、小生のニックネームです。

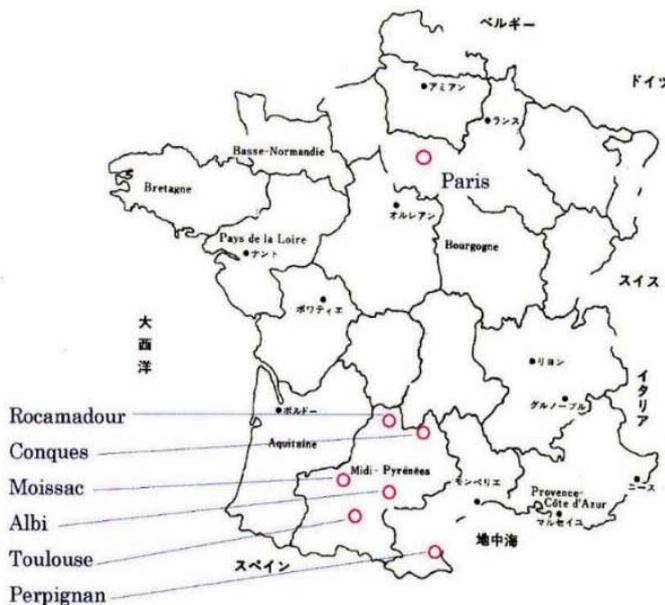
### 目次 (見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

|   |    |
|---|----|
| ・ 概要  | 2  |
| 1.1 ドライブ旅行概略図                               | 2  |
| 1.3 概略行程表                                   | 2  |
| 1.4 レンタカー                                   | 3  |
| 1.5 持参した主な物                                 | 3  |
| 1.6 異端カタリ派 (仏: les cathares 英: the Cathar ) | 4  |
| ・ トゥルーズ、モントウバン (初めから大波瀾)                    | 6  |
| ・ フォワ、バル、モワサック (レンタカーで移動開始)                 | 10 |
| ・ カオール、ボナギール、ロカマドール、パディラック、フィジェック           | 15 |
| ・ コルク、コルデス・シュル・シール、アルビ                      | 18 |
| ・ リュウ・ミネルボア、カルカソンヌ                          | 23 |
| ・ フォンフロアッド、ピルベルテュス、ペルピニアン                   | 26 |
| ・ ルシヨン (Roussillon) のロマネスク                  | 30 |
| ・ モンセギュール、モンタイユ、アクス・レ・テルム                   | 39 |
| X ・ アンドラ、セオ・デ・ウルヘル                          | 43 |
| X ・ カタルーニヤ・ロマネスク (1)                        | 47 |
| 11.1 ノゲラ・パリャレサ溪谷上流、アラン谷                     | 47 |
| 11.2 ボソス、ボイ谷(タウル)、ノゲラ・パリャレサ河中流              | 52 |
| タウル   | 53 |
| 11.3 ノゲラ・パリャレサ河下流、レリダ、ルート3                  | 57 |
| X ・ カタルーニヤ・ロマネスク (2)                        | 58 |
| ポブレ修道院                                      | 59 |
| バルボナ女子修道院                                   | 60 |
| タナゴナ  | 61 |
| サンタス・クレウス修道院                                | 63 |
| X ・ バルセロナ、帰国                                | 65 |
| カタルーニヤ美術館                                   | 65 |

## I. 概要

### 1.1 ドライブ旅行概略図

今年廻った地域の主要ポイントをフランス及びスペインの地図上に赤丸で示すと左図となる。



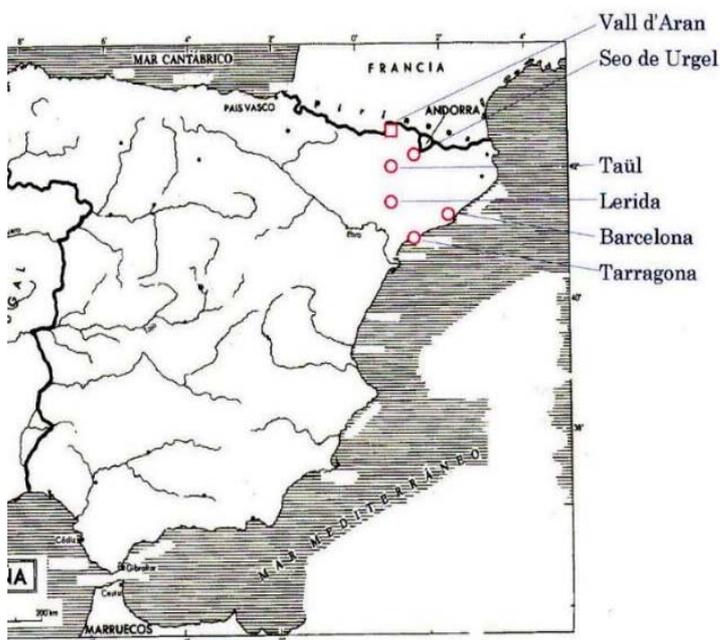
### 1.2 旅行の特徴

今年のテーマは、次の3つに分類する事が出来るであろう。

|                        | フランス | スペイン |
|------------------------|------|------|
| 1) 去年の続きのロマネスクの美の探訪    | ○    | ○    |
| 2) 同じく続きのサンチャゴ巡礼路の教会巡り | ○    | x    |
| 3) 南仏の異端「カタリ」派の跡の探訪    | ○    | x    |

今回、スペインは、カタルーニヤのロマネスクに重点を置いた。

スペイン内のサンチャゴ巡礼路は、昨年ほぼ全路を踏破済みである。



### 1.3 概略行程表

尚、本旅行記の中で用いるカナ表記法は、フランスではフランス読み、スペインでは、カスティーリャ語読みを用いることとする。

フランスもルシヨン地方は、交通標識の文字までカタラン語となり、発音も標準とは異なる。例えばCuxaは、フランス語ではキュクサであるが、カタラン語ではクシャとなり、Fenollarはそれぞれ、フノヤール、及びフェヌ

ヤとなる。

スペインのカタルーニャに入ると、Vall d'Aran は、カスティーリャ語ではバル・ダランであるが、現地では通ぜず、バリ・ダランで通ずる。Taul(u はウムラート)はそれぞれタウルとタウイとなる。

|    | 日  | 曜 | 主要訪問先                      | 泊               | 備考        |
|----|----|---|----------------------------|-----------------|-----------|
| 4月 | 23 | 火 | 成田--(air)-->               |                 |           |
|    | 24 | 水 | トゥルーズ                      | モントゥバン(*)       | *: 大問題    |
|    | 25 | 木 | モントゥバン、トゥルーズ               | モントゥバン(*)       |           |
|    | 26 | 金 | パミエ、フォワ                    | フォワ             | レンタカー 借りる |
|    | 27 | 土 | バル、ミルボア、モアサック              | モアサック           |           |
|    | 28 | 日 | カオール、ボナキール、ロカマトール          | ロカマトール          |           |
|    | 29 | 月 | パティイック、フィジエック、コンク          | コンク             |           |
|    | 30 | 火 | コルテス・シュル・シール、アルビ           | アルビ             |           |
| 5月 | 1  | 水 | リュウ・ミネルボア、カルカソヌ            | カルカソヌ           |           |
|    | 2  | 木 | フォンフロアット、ピルペルトユズ、ペルピニアン    | ペルピニアン          |           |
|    | 3  | 金 | エルネ、サン・アントレ、フノヤール          | ペルピニアン          |           |
|    | 4  | 土 | キュクサ、カニグ、セラボン              | モン・ルイ           |           |
|    | 5  | 日 | モンセギュール、モンタイユ              | アックス・レ・テルム      | ここまで フランス |
|    | 6  | 月 | アントレー、セオ・テ・ウルヘル            | セオ・テ・ウルヘル       | ここから スペイン |
|    | 7  | 火 | ノグエラ・パリャサ溪谷、バル・ダラン         | ビエラ             |           |
|    | 8  | 水 | タウル、ケリ・テ・ラ・サル、アベリャ・テ・ラ・コンカ | セリエルス           |           |
|    | 9  | 木 | レリダ、ポブレ、バルボナ               | タラゴナ            |           |
|    | 10 | 金 | タラゴナ、サントス・クレウス、カラフェル       | バルセロナ           |           |
|    | 11 | 土 | カタルーニャ美術館、マレス美術館           | バルセロナ           |           |
|    | 12 | 日 | サンタ・マリア・デル・ピ、カタルーニャ美術館     | バルセロナ--(air)--> |           |
|    | 13 | 月 | 成田着                        |                 |           |

#### 1.4 レンタカー

レンタカーは、AVIS、日本で予約していった。トゥルーズの市内で借り、バルセロナの空港で返すと言うものであった。ルノー clio 1400cc オートマチック で 全長3.71m  
空調及び防犯装置付きであった。小型だがなかなか良く走り、小回りは抜群だった。全走行距離 3010 km。

尚、カー・ステにポータブルCDを繋ぐジャックが付いていた。今回、ポータブルCDを持参しなかったのが残念だった。

#### 1.5 持参した主な物

##### 『1.5.1 地図』

ミシュラン フランス全国地図帳 20万部の1

ミシュラン スペイン・ポルトガル全国地図帳 40万分の1

##### 『1.5.2 書籍類』

- 1 ミシュラン・グリーンガイド ピレネー・ルシヨン (フランス語\*)
- 2 // ドルドーニュ (英語)
- 3 // スペイン (日本語)
- 4 地球の歩き方 スペイン ダイヤモンド社 本報の中では「歩き方」と略記する。

- 5 Discovering Romanesque art in Catalonia Generalitat de Catalunya

本報の中では「資料DRC」と略記する。

(去年、フィゲラスのツーリスト・オフィスでもらったもの。非常に役に立った)

- |    |                            |          |
|----|----------------------------|----------|
| 6  | 仏和辞典 Le Dico               | 白水社      |
| 7  | スペイン語ミニ辞典                  | 白水社      |
| 8  | コンサイス英和辞典                  | 三省堂      |
| 9  | フランス語会話手帳                  | 白水社      |
| 10 | ひとり歩きの「スペイン語自遊自在」          | J T B    |
| 11 | ZODIAC 叢書 Roussillon Roman | (フランス語*) |
| 12 | 〃 Pyrenees Roman           | (フランス語*) |
| 13 | 〃 Languedoc Roman          | (フランス語*) |

本報の中では、ソディアック（叢書）と表記する。

ZODIAC 叢書では、この他 L'art Cistercien (シトー派の美術) 全2巻から関係箇所 (Fontfroide, Poblet, Santes Creus) を日仏会館でコピーしたもの (\*) を持参。

- 14 フランス政府観光局で仕入れた資料類。 ホテル・リストと、交通標識の解説が大いに役立った。

\* : 小生フランス語は全くの初歩。翻訳ソフト<sup>(註)</sup> の支援の下に必要部分を英語に翻訳したものを同時に持参。使用した自動翻訳ソフトは Power Translator (仏・英版) Globalink, Inc. 尚、フランス語対応の良い OCR ソフトが無く、安物の日・英用 OCR ソフト e. Typist メディアドライブ社を使用し、アクセント付き文字 (é, è, ç 等) は、手入力で修正した。

追記 : 当時はそうだったが、翌年にはフランス語にも対応できる OCR ソフトが発売されている。

メディアドライブ(株)販売の Xerox 社のソフト 「TextBridge」である。

### 『1.5.3 カメラ類』

- 1 ニコン 24-50mm 35-75mm
- 2 オリンパス μ 35mm
- 3 シャープ・ビュウカム
- 4 三脚

書籍類と三脚で、荷物が35kg程度になり、大いに苦勞する事になる。その場合は、第2報に記します。

## 1.6 異端カタリ派 (仏 : les cathares 英 : the Cathar )

南仏の歴史を知るには、どうしても異端カタリ派についての若干の知識が必要になります。単に宗教の問題に止まらず、この問題が引き金になって南仏はフランス王国に吸収されてしまうことになるからです。

ここでは、以下の私の旅行記との関連を考えながら記します。

主に参考としたのは E・ル・ロワ・ラデュリ 「ラングドックの歴史」 クセジュ文庫 白水社、及びミシュラン・グリーンガイドである。

尚、以下の文で☆印は今回訪問したところ、アンダーライン は、本報で今後何回か登場する人物である。

(ラングドックとはオック語が話される地方を意味するが、ほぼ東西をローヌ河とガロンヌ河に挟まれ、北は中央大地、南はピレネー山脈で区切られる地域に相当する)

カタリ派とは、11世紀初頭から西欧に広まるキリスト教の異端思想である。その起源は、ブルガリアに興ったボギル派のようで、ラングドック地方に根付いたのは1160年頃らしい。

カタリ派の教義は、「神」、「悪魔」の二元論である。

先ずカタリ派は何よりも、峻烈な禁欲主義の戒律で知られた。現世を悪の世界、つまり地獄と見て、神の世界たる霊界と対置したからである。天使（靈魂）が牢獄（肉体）に繋がれたまま現世を彷徨（輪廻転生）している状態が人間だと説いた。

救済（霊界復帰）の要諦は当然、真のキリストの教会（異端教団）に入信して現世の絆を断切ることにある。現実世界の創造者を神とする旧約聖書は、到底彼らの容認できるところではない。福音書だけが、しかも独特の解釈による福音書だけが、彼らのよりどころであった。

カタリ派の戒律は、とりわけ肉欲と肉食と殺生を嫌った。「交尾によって成れるもの」はことごとく不浄だとして、乳製品さえも口にしなかった。（魚は水より生えるものとして例外だった）

救慰礼（洗礼）を受けて入信し戒律を守る者、つまり本物の異端を「完徳者」と呼んだ。厳格な戒律に耐えることは至難のわざだから、本物の異端はごく少数である。彼らの説教に共感した者のほとんどは受礼をできるだけ先に、つまり死ぬ直前まで伸ばすのが普通だった。このような、異端の周辺にいて臨終受礼を希望する大衆が帰依者である。後述の「モンタイユ」の村人が異端のかどで迫及されたと言っても、基本的には帰依者だったにすぎない。

このような二元論が、普及した理由は簡単に説明できる。「社会が飢饉や流行病に見舞われ、しばしば絶望に陥った状況では、宇宙が善良な神によって創造されたと認めるのは、逆説ではないか。悪魔を本当に恐れながら生きている人々には、悪魔が自然の創造者であるとする方が、ずっと簡単ではないだろうか」と言うことである。

なぜラングドッグなのか？ おそらく、此の地方では徹底的な修道院改革が欠如していた事が、精神的な空白を生み出していたのであろう。

「吠え方すら知らない唾の犬」（インノケンティウス3世）といわれたラングドッグの修道士たちは、カタリ派の「完徳者」たちが証明して見せた熱烈な宗教心や完全な解脱に対抗出来るような価値あるものを何も持っていなかった。この完徳者たちは、菜食主義者で、自らに断食、手仕事、絶対的な貞潔を課して、模範的な生活を送り、民衆に感銘を与えた。

カタリ派は、領主を筆頭に、あらゆる社会階層から加入者を獲得した。特に織物業を営む地方の商人、職人、無産階級は特に受容しやすかった。又特に初期においては、教会の財産を渴望する世俗的封建制と結びついた。

ベジエとカルカソンヌ（☆）の子爵であつたロジェ・トランカヴェル、

フォワ（☆）の伯爵であつたレイモンド・ロジェがいる。ロジェの妻は完徳者の家を運営した。

カトリック側の対策は初めは精神的なものだった。1147年シトー派の聖ベルナルがトゥルーズ（☆）で説教した。しかしたいした効果は無かった。

13世紀初めからは、ドミニク派が活躍したが、説教だけでは旨く行かなかった。

1204年教皇インノケンティウス3世の使節であるピエール・ド・カステルノがラングドッグの司教団を肅正しようとした。カステルノはシトー派の高僧で、フォンフロアド（☆）に住んでいた。1207年に3世自身手加減を一切放棄し、トゥルーズ（☆）伯レイモン6世を破門した。そして、1208年1月15日トゥルーズ伯の侍臣のひとりがカステルノを殺害した。

これが歴史の歯車を大きく回転させた。

教皇の訴えによって十字軍が結成された。参加者はすべての罪が許される事になっていた。フランス王は断ったが、ブルゴーニュ、イル・ド・フランス、ノルマンジーの騎士たちは参加した。レイモンド6世も拒みきれず、彼らの先頭に立った。彼にとって強く成りすぎたトランカヴェルを叩く良い機会でもあった。実際ベジエでは1209年7月22日一つの教会内だけでも数千人の人びとが虐殺された。

カルカソンヌで、ロジェ・トランカヴェルは捕虜になり、ベジエ、カルカソンヌは十字軍中最も良心に欠けた者と言われるシモン・ド・モンフォールの手に落ちた。モンフォールは次にトゥルーズを狙い、それを落とす。

1216年、新しい压制者モンフォールに対する南フランスの不満が頂点に達し、レイモン6世と息子の7世がトゥルーズを奪い返した。その後の攻防戦の中で、モンフォールは城壁の下で両眼の間に石を受けて殺された。（1218年）

しかし、1225年にブルジュ公会議はレイモン7世を破門した。又シモンの後継者は父親から相続した権利をフランス王に譲った。この期に及んでフランス王ルイ8世は、カタリ派を懲らしめると同時に、フランス王国拡張のチャンス到来と見て、ラングドッグの占領を決心した。

レイモン7世はモーで降伏し（1229年）、カタリ派を国から一掃し、娘をサン・ルイの弟と結婚させることを約束した。1271年、娘は子孫を残さずに没し、ラングドッグはフランス王国に帰属することになった。

その間、カタリ派撲滅の戦いが続けられた。完徳者たちの最後の要塞で聖地でもあったモンセギュール（☆）は、フランス軍の弩の砲弾にも抵抗し、十カ月持ちこたえた（1243-44年）。逃げ延びた者も居たようだが、改宗を拒否した200人余の完徳者は山の麓で火刑に処せられた。

その後も、小規模の組織的抵抗はあったが、徐々に征服された。しかし地下に潜って密かに続けられた活動の最後の息の根を止めたのは「異端審問」であった。異端審問官といえば、ウンベルト・エーコの「薔薇の名前」にも出てくるベルナルド・ギーが名高いが、カタリ派の最終期に活躍したもう一人の人物がいる。

ジャック・フルニエ（後の教皇ベネディクトゥス 12世<在位 1334-42年>）である。

彼は、フオンフロアットの修道院長を経て、パミエ（☆）の司教に成ったとき、モンセギュールから直線距離では12kmほどしか離れていない寒村モンタイユー（☆）を中心に精力的に異端審問を行い、その詳細な記録を残した。我々はE・ル・ロワ・ラデュリの名著「モンタイユー ピレネーの村々 1294-1324」上・下 刀水書房 で当時の人々の生活を細部まで知ることが出来る。

「モンタイユー」については、そこの訪問記の後で、又詳細に述べる予定である。

南仏・カタロニア紀行（第2報）

敏翁

## II. トゥルーズ、モントウバン（初めから大波瀾）

4月23日（火） 成田発 21:55 エール・フランス 271

4月24日（水） パリ・シャル・ド・ゴール着 4:25

500US\$（TC）をフランに交換、2355fr

シャルル・ド・ゴール発 7:50 IT6027 トゥルーズ着 9:05

ここまでは全く順調。今回はトゥルーズ市内のホテルにタクシーで乗り付け2泊し、その間に市内観光とともに交通事情にも慣れてから、レンタカーを借り走り回ると言う計画を立てていた。（計画としては良いと思っている）

空港の案内所で、市内地図を貰い、次にホテルのアドレス、名前を言って場所を尋ねると、何と！ そんなストリートはトゥルーズには無いという。電話番号を見せると、それはモントウバンだと言う。それはトゥルーズから北に50km離れた市であり、車で行きなさいという。汽車の駅には、バスでGare routiereに行きなさい。そばに汽車の駅があると言う。Gareが駅ぐらいは知っていたので、ルウティエ駅というのがあるのかなと思い荷物を引きずりながらバスでそこに行く。そこはバス・ターミナルでおかしいなと思いつつ、汽車の駅を尋ね、200mばかり離れたマタビュウ駅に着く。後で解った事だが、Gare routiereとは、バス・ターミナルの事なのだ。

マタビュウ駅は、運河（Canal du Midi）沿いにあるトゥルーズで一番大きい国鉄（SNCF）の駅で、フランス新幹線（TGV）でパリにも繋がっている。

モントウバンまでキップ（45fr）を買い、初めて“compostage”なるもので、パンチをいれる。これを忘れると検察係りに罰金を取られるそうである。駅には階段が多く、重い荷物の上げ下ろしで大苦勞する。

トゥルーズから、モントウバンまではノン・ストップで、汽車は運河（Canal lateral a la Garonne）沿いに北上する。運河の景色は、子供の頃「家なき子」か何かの絵本で見たものにそっくりで初めてなのに懐かしい気がするの不思議だった。ただ舟は殆ど無く、これから結局3往復する事になるのだが、モーターボートを一回と停まったままの運送船を一隻見ただけだった。

30分ほどでモントウバン (Montauban) の駅に着く。ここでまた階段で一苦勞。やっと駅前で、タクシーを捕まえて、ホテルの名前を見せると、そこだという。それでも、かまわず行って貰うとホテルは200mほどの所にあった。

### Hotel Ingres (3星)

タクシー料金13frのところ細かいのが無いので20fr渡したら大喜びで荷物をホテルの中まで運んでくれた。

疲れ、頭が混乱していた。旅行業社の不始末に憤りを感じ、又自分のチェックが甘かった事も悔やまれた。しかし、シャワーを浴び、ミニバーのビール2本を一気に呑むなどして気を取り直し、ベッドにひっくり返り、計画を再構築する。

レンタカーは、明後日の朝、マタビュ駅で借りることになっている。私の語学力などを勘案して、それはそのままにして置いて、ここからトゥルーズに「通勤」するのが無難と判断した。又せっかく「縁」があったのだからモントウバンも見てみようかと言うことにした。

ホテルの名前は、新古典派の絵画の巨匠**アングル (Ingres)** に由来する。彼は、モントウバンに1780年に生まれた人である。今もモントウバンにはアングル美術館がある。この事が、ミシュランで解った。詳細は、今晚ゆっくり読むことにして(フランス語なので、恥ずかしながら辞書を引き引き読むのはえらく時間がかかるのだ)とありえずトゥルーズに引き返す事にした。

午後ニコンとミシュランとその英訳文だけを持って、1時半頃ホテルを出、国鉄モントウバン駅からマタビュ駅に引き返す。

ここから町の中心までは歩くには距離が有りすぎる。地下鉄を試してみることにした。しかしキップの買い方も解らない。改札のところであらうららしていると、係員らしい人が親切に自動販売機の使い方を教えてくれる。初めに「V」マークのボタンを押す。するとディスプレイにメニューが沢山出てくる。もちろんフランス語である。彼は、そこで⑦ボタンの説明を指し示す。そこには、**english** と書いてあった。⑦ボタンを押すと、ディスプレイ画面が全部英語表示になる親切なシステムになっているのだ。あとは何とかなりそうである。一区間(かなり遠くまで一区間らしい事が後の研究で解った)、片道7.5frである。

Capitole (3つ目の駅)まで乗る。**Capitole** は今は市役所になっているが、18世紀に立てられた実に綺麗な建物でそばには昔の天守閣 (donjon) もあり、名所に成っている。

又そばには、旅行案内所 (information touristique 以下 <i> と略記する) もある。Capitole 前の広場は相当ひろいがテント張りの市で一杯になりまわりは相当な人ばかりであった。

まず<i>に行く。ここも相当混雑している。地下鉄の系統図を貰い、又近くの本屋を教えて貰う。広場に面した本屋で、地図を探す。これから行く所の詳細地図(2.5万分の1)を探したが、抜けが多く、又細かすぎる感じもしたのでこれは止める。これとは別のシリーズでピレネーに沿った5万分の1の地図があり、これは良さそうなので、ペルピニアン、カニグー、モンセギュール、バル・ダランなどを購入する。5枚で315frと意外に高いが、これは結構役立った。

驚いたのは、書架の可成りの部分が異端**カタリ派**関係の本で占められていた事であった。殆どがフランス語である。写真主体に解説がついているスタイルの本(観光客が対象と思われる)も2, 3種類出ていたが、これは各国語版があった。その中の1冊(もちろん英語)を購入。128頁で75fr。

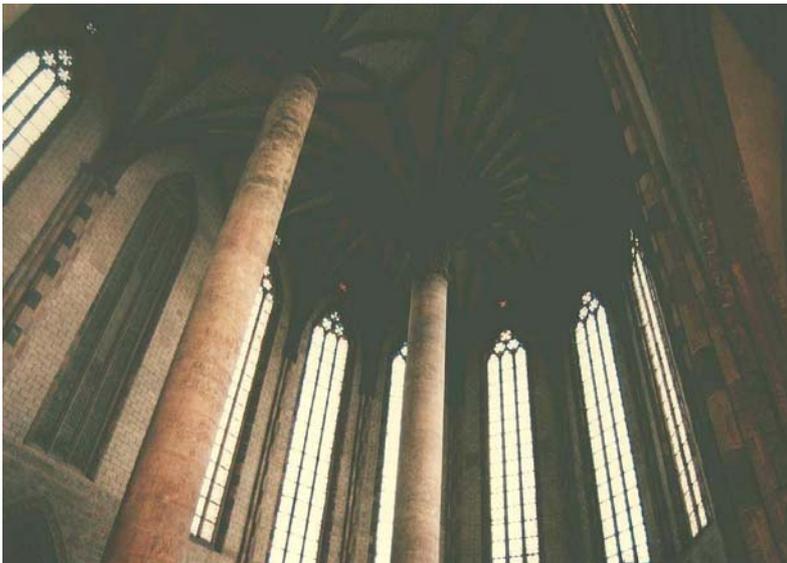
後で読んでみると、中身は結構しっかりしているようである。私の第一報のカタリ派の紹介の約20倍程度の内容が記されている。もっともこれは此処だけではなく、これから行くところほどこの本屋にも置いてあったのでここであわてて買う必要は無かったのであったのだが。



ここから、サン・セルナン教会（上左図）までは歩いてすぐである。

この町の建造物の特色となっている煉瓦と石の併用による見事な鐘楼は市の象徴となっている。この聖堂は3世紀前半に活躍し、この地で殉教した聖セルナンに捧げられたものである。そしてここは、サンチャゴ・デ・コンポステーラへの4つの巡礼路のうち、最も南を通る路の要の地である。聖堂は巡礼路の諸教会の建築構成の共通要素をよく備えていると言われている。建造には長い歴史があるが、始められたのは1075年だとされている。

中（挿）は、暗いし、非常に落ち着いた感じがする。南扉口（ミュジュヴィル門（上右図））の彫刻は有名な物だが、意外に小さな物である。



少し歩いて、ジャコバン教会に入る。これは異端カタリ派退治に最も力を入れたドミニコ派の教団によって、聖ヤコブ（St. Jacques）に捧げられた事に由来する。この赤煉瓦作りの聖堂は南フランス・ゴシック建築の傑作と言われる。内部の印象は異様である。非常に高いアーチ形天井（要石まで2.8mにも達する）を7本の柱が支えているのだが、上の方は椰子の枝にも似た広がりを見せている。その形といい、赤を基調とした色調といい、極めて独創的である。

（左図）

回廊（Cloître）も見たが、ここのは平凡な印象しか受けなかった。

ガロンヌ河の川岸を散歩しポン・ヌフ（Pont Neuf 新しい橋）を眺めたりした。大分疲れてきたので、本日はここで打ち切り、地下鉄、国鉄を乗り継いでモントウバンに帰った。

夜、ホテルの紹介で、駅前のレストラン（La Cuisine d'Alain）に入る。結構本格的なフランス料理店だった。

ホテルで休むが、早朝目が覚める。ミシュラン・グリーンのモントウバンの項を辞書を引き引き読む。

#### 4月25日（木）

午前中は、モントウバンの町の散歩と、アングル美術館の見学に当てることにする。



タルン河にかかる古い橋 (Pont Vieux) を渡る。橋からの眺めは、美術館 (昔の司教の館) やサン・ジャック教会の塔、古い町並みなどが並びなかなか趣がある (前頁図)。

ナショナル広場の散歩とサンジャック教会で美術館開館 (10時) までの時を過ごす。広場はスペインや南仏 (他もそうかも知れないが) の古い町にはどこにでもあるものだが、ここのは規模は小さい。

美術館は、地下室も入れて4階あり可成り大きい。

いろいろな物 (昔の城の遺物など) もあったが、見物はアングルのものとやはり、モントウバンの生まれである彫刻家のブールデルの作品である。

アングル (1780-1867) のデッサンなどは膨大な展示であるが、油絵の良い物は他にある為かあまり強い印象を受けなかった。帰ってから図書館で調べると、彼の位置づけは極めて大きいことが解った。良いものの大半はルーブルにあるようであり、それらは画集で見ても素晴らしいものである。

ブールデル (1861-1929) の有名な「弓を引くヘラクレス」の緑青をつけた石膏像もある。これはなかなか見ごたえがある。

尚、ブールデルによる、アングルのブロンズ胸像がある。それを見るとアングル (中年のアングルを表現しているのだが、何を元にして作ったのかはわからない) は、あまり知的な感じはせず、むしろエネルギー溢れる職人と言った感じがするのだが、アングル自身の自画像の表情とは大分違う。本当のところはどうだったのだろうか？

大分気温が上がっているようなので、午後スポーツシャツだけで8mmビデオ機と例のミシュラン (+英訳文) をもってトゥルーズに向かう。トゥルーズに着いてみると曇ってきて寒くなってきた。地下鉄で乗客を見ると殆どがジャンパーを着ている。地下鉄 Equinol 駅で降り、まずオウギュスタン美術館に入る。

これは昔のオウギュスタン修道院の中に収められている。その回廊も見事である。美術館の各部屋は空調していて暖かく助かった。ここではトゥルーズとラングドッグのロマネスク彫刻 (12世紀) と15-17世紀の宗教絵画が見物である。不思議なことに、それらの説明文がどうやら読めている自分に気づく。ミシュランとゾデアックのフランス語で悪戦苦闘した成果 (?) が出ているのだろうか。もっとも限られた単語 (殉教、十字架降下、ピエタ、受胎告知など) が殆どのせいもある。

次にサン・エティエンヌ教会へ行く。これは、複雑な歴史の流れの中で、奇妙な形 (身廊と内陣の軸が合っていない) をし、又その身廊が巨大 (19mもの柱の無い横幅を実現している) である事で有名である。

又、その身廊の壁には16-17世紀の素晴らしいつづれ織り (タペストリー) が沢山架かっている。

大分疲れてきたので、広場にある軽食堂 (brasserie) なるものでランチを取りながら休むことにする。フランス風の屋外のテーブルである。見回すと結構お客は居るのだが、コーヒー (エスプレッソ) 一杯でおしゃべりをしている者ばかりで、何か食べて居る者などは見あたらない。何か食べる物は無いかと聞くと、ピザなら出来るという。ビールとピザを頼む。ビールを飲み終わる頃大きなピザパイが一枚どんと出てきたのには驚いた。トマトしか入っていないやつで、もう一本のビールで流し込む。外は風が吹き寒い。

次にポン・ヌフ近くのアセザ邸を見る。これは16世紀に建てられた大金持ちの屋敷である。建築様式、や当時の調度品など見るべき物が有るとのことだが、あまり強い印象は受けなかった。

夕食は簡単にしようと思い、フランス風サンドイッチ (長いフランスパンに切れ目を入れて具をはさんだもの) を一本 (15.5fr) 買う。商店街らしいところをブラブラ歩いてみたが、とにかくフランスの町には、自動販売機はほとんどない。やっと、地下鉄の駅で見つけたが、コーラ類ぐらいで、ビールなどは全く無いのである。(今回の旅で缶ビールの自動販売機は一回も見ること出来なかった。) 仕方なくコーラを求め、又国鉄でモントウバンに帰る。

ホテルで以上と、部屋のミニバーのビールで夕食とする。

### Ⅲ. フォワ、バル、モワサック（レンタカーで移動開始）

#### 4月26日（金）

9時過ぎホテルをチェック・アウト、荷物をフロントに預けて、又国鉄でトゥルーズ・マタビュウ駅に向かう。その駅の構内にある AVIS の窓口でレンタカーを借りる。

ルノー クリオ 1400 cc オートマチック 防犯装置付きで車の全長は、3.71m と短い。「取説」は、車については、フランス語しかなく、防犯システムに関連するリモート・コントロール・キーについてだけ、簡単な英文が付いている。

尚、フィリップスのカー・オーディオ・システムが付いているが、この取説は、各国語で出来ている。

先ず、ホテルに戻って荷物を受け取らなければならない。高速 A62 に入るのに2, 3回失敗したが、やっと入れる。

ここで、一寸話が逸れるが、外国で車の運転をするとき大切なことは、その国の言葉が「話せる事」よりは、ある程度文字の意味が解る事の方が重要である。

フランスで、それは autre directions（他の方向）、toutes directions（全方向）、centre ville（中心街）、i マーク等である。

尚、これがフランスでも、ペルピニアン（ルシヨンの首都）に近づく、突然カタラン語に変わって戸惑う。今でも解らない言葉があるが、例えば中心街は centre ciutat となる。これは、スペイン語（カスティーリア語）の centro ciudad から容易に推定できるが。

フランスもスペインもロータリーが多く、そこには行き先が指示されているが、そこに自分の思っている方向の地名が無いと混乱してしまう。その時は殆どどこかの行き先に、autre direction があるので、不安でもその方向に行けば大体間違いはない。そこを暫く行くと、またロータリーがあり、そこで自分の行き先が現れる。この感じを掴むのには、やはり何回かのトライ&エラーが必要だ。

高速は、日本より全然空いていて、快調である。私の車は小型だけれど、150 km/h 程度まで出る。120 km/h 程度迄で走ったが、どんどん抜いて行く車も多い。

A62 を約40 km 北上し、モントウバンに近づけば、今度は centre ville を目印に中心街に近づく。私のホテルは駅のそばにあったので、次は gare SNCF（国鉄駅）を目標にして、ホテルに到着した。



荷物を積んで、パミエ経由フォワに向かうことにした。適当なところで旅行案内所 (information touristique 以下 <i> と略記) を見つけ、ホテルを紹介して貰う計画である。

地図上では、フォワの先アンドーラとの国境まで延びている国道 N20 を使うことにした。しかしこれは、しょっちゅうロータリーが出てきて、前述の件の良い勉強になったが、能率は悪かった。

トゥルーズを通り抜け、さらに70 km ほど南下すると、パミエ (Pamiers) の町に到着する。この町はアリエージュ (Ariege) 最大の町で、1295 年司教が置かれた。ジャック・フルニエが司教として、異端審問の辣腕を振るったのは、1317-1326 年である。（第一報参照）

<i> らしいものは見あたらない。適当に車を走らせ、サン・アントニ教会 (Cathedrale St-Antonin) に到着する。見事で巨大な鐘楼（大修理中）を持ち、砦のような教会である。ここで、異端審問が行われたらしい。教会は閉まっていた中は見られなかったが、そばに居るだけで威圧感を感じるような建物だった（左図）。

パミエの町には、ミシュランによると他にも見るべきものがあるの



から貰ったホテル・リストを参考に部屋の電話から予約した。電話に出た女性はたどたどしい英語だったが、何とか通じる。

夕食は、ホテルにはなく、町に出かけ小さなレストランに入る。料理は、トゥルーズからルシヨンにかけての名物料理カッスーレ (Cassoulet) に挑戦する事にする。カッスーレとは、煮込み鍋の一種で、隠元豆と豚肉、鶏肉などの煮込みである。

赤ワインが合うとの事で、Fronton (トゥルーズとモントウバンの間にある町) 産の AOC (Appellation d'Origin Controlee 原産地統制名称) の小瓶にした。

ラベルには、上記 Origin のところに地名 (この例では Fronton) が入った形で表記されている。これから当分の間は、訪問先付近の地方の AOC を主体にするつもりである。

カッスーレは、日本でよくビーフ・シチュー等に使う陶器の鍋に入って出てきた。驚いたのは同時にボールに山盛りのグリーン・サラダが出てきたことである。しかしその意味は、すぐに解った。カッスーレは、実にこってりした味で、そのしつこさは赤ワインを呑のんだ位では消えない。その為カッスーレを2口食べては緑葉と言うことに成らざるを得ないのである。あまりのしつこさに、この後2度と試みる意欲は湧かなかった。

## 南仏・カタロニア紀行 (第3報)

敏翁

### 5月27日 (土)

起きると外は雨。チェック・アウトし、駐車した車のエンジンをかけようと何度試みてもかからない。ホテルのフロントに戻り、おばさんに窮状を訴える。ルノーのサービス・マンを呼んでくれる。約10分に現れた男がシフトをカチャ・カチャやっていたらそのうちエンジンがかかった。男は英語が全然出来ないので、言っていたことがはっきりしないが、接触到問題が有るような事を言っていたような気がする。



今日は、バル、ミルポアからモワサックまで行く計画である。

国道 N20 を戻り、パミエの近くで D119 を東に進む。7 km あまり行ったところで、田舎道 (D6) に入ると 2 km ほどで、バル (Vals) の村に到着する。雨は止んでいた。この教会は、半分は岩の中作った様な異様な外観と、12世紀の壁画で有名である。(上左図は外観と入り口)

入り口の所に行くと、朝一番で錠がかかっている。小さな紙に、鍵はマダム・アンドリュウの家にある。村の入り口の栗色のドアの家である。と書いてある (辞書と首っぴきで読む)。それから探す、栗色に見えるドアを持つ家は多く解らない。村の入り口付近の農家に飛びこんで聞く。親切に略図を書いてくれる。ずっと教会に近い所にあるようだ。やっと探し当てて、ブザーを押すと、上品なおばあさんが鍵を手になにこやかに現れた。

その鍵で錠を開ける。入り口は岩の割れ目の様なところから入っている。中は暗い。照明のスイッチがなか中々見あたらない。壁画は後陣の天井いっぱい描かれている。保存状態は、それほど良いとはいえない。(上右図)

受胎告知、キリストの誕生、使徒たちに囲まれた栄光のキリストが描かれている。フラッシュ・撮影後帰りかけてスイッチ発見。ランプ照明の中で再び鑑賞する。ソディアック叢書によれば、絵の中の字の固有の綴り、や絵の雰囲気からカタルーニャの北西部で活躍した親方 (maitre) の影響があるとの事である。

そのころ数人の客が見えて、アンドリュウさんからことずかったようなので、鍵を預けて、出発する。

D6 を 10 km 東に行くと、ミルポア (Mirepoix) の町に入る。この町も古い町で、司教が置かれ、あのジャック・フルニエもパミエの次にここの司教に成っている。此処の方が格が上だった様である。次に彼は教皇になる。



有名な広場 (Place General-Leclerc) の片隅に何とか駐車出来た。ここは広場を木製の張り出しを持つアーケード (couverts とする) が囲っている(上左図)。ここの一隅に <i> </i> がある。教会と、よく本の挿し絵などになっているミルポアの象徴とも言うべき軒飾りのある場所を尋ねる。教会は隣接してすぐそばにあったが、閉まっている (理由不明)。軒飾りは、木彫りの人面や、モンスターの面などであり、実に表情豊かにたくさん残っている (領域は限定されている: 上右図参照) が、本に出ているそっくりのものは発見出来なかった。

ここで昼食にする。

さて、ここから一気にモワサックに行くことにする。ミルポアから D119, D4 を東進 (28 km) し、高速に入る。130 km ばかり一気に走る。途中 150 km/h 位でも飛ばしてみたが、ガソリンの減りが異常に早そうなので、今後は 100~120 km/h 止まりにすることにした。

高速を降りてすぐ、ガソリンスタンド (station-service) に寄る。フランス語は鉛無し (sans plomb) とだけ言えば通じる。男が手を下から上に揚げて「満タン」かと聞くから、こっちも同じ動作をしてうなずけば良い。30リットルで 195 fr (6.5 fr / l > 130円 / l) と日本よりだいぶ高い。

ここからモワサック (Moissac) 迄は、6 km ほどである。サン・ピエール教会 (Eglise St-Pierre) の駐車場に車を止める。すぐそば (回廊の入り口も兼ねている) に <i> </i> がある。そこで詳細地図を貰い、今晚泊まるホテルの位置を確認する。

この教会も、サンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路の重要拠点の一つである。このルートは、ル・ピュイに発し、コンク、カオールを経てモワサックに至り、さらに南西に進んで、やがてヴェズレーを發する道、ついでパリを發する道と合流、イバニェタ峠を越えてスペインのパンプローナに至るのである。

トゥルーズのところで言い忘れたが、トゥルーズを通る路はアルルに発し、トゥルーズからオロロン・サント・マリーを経てこの道だけが、ソンポール峠を越えてスペインのハカに至る。

このスペインに入った2本の道は、更にプエンテ・ラ・レイナで合流し、サンチャゴへ至るのである。

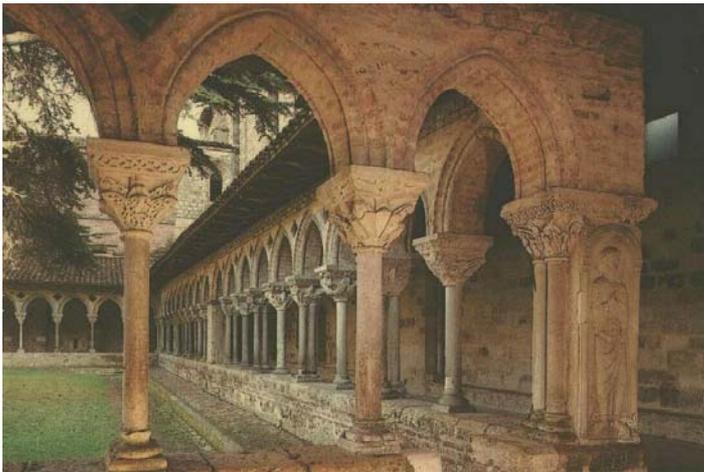


先ず有名な南扉口の彫刻群を見る。1110-30年の作だという。タンパン（仏：tympan 英：tympanum）（上左図）には、ヨハネの黙示録による幻視に満ちた再臨のキリストの姿が広げられている。中世における黙示録の影響は極めて大きい。壁画や、写本の絵などに優れた物が多いが、このタンパンほど強烈な印象を与える物は無いとまで言われている。

中央柱側面のエレミア像はロマネスク彫刻の傑作と言われていて保存状態も良い。その憂いを含んだような表情は、中世人々に何を訴えていたのだろうか？

これに反して、側壁の彫刻（上右図）はだいぶ傷んでいる。解説書を見ながら鑑賞する。

教会内に入る。意外に小さい。側廊も周歩廊もない。ただ普通翼廊が有る部分に礼拝堂が設けられており、本日午後7時半からミサがあるとの掲示が出ていた。参列してみることにする。



回廊（上図）に入る。この回廊は素晴らしい。丁度教会の鐘が鳴り始める。回廊の柱は、交互に一本と2本単位の柱があり、一本柱の上の柱頭（図）は、植物文様が主体で、2本柱の上の大きな柱頭は旧約、新訳聖書に基づいたテーマの図像で飾られている。

そのリズムと変化が、石の色合いの変化を含めて独特の雰囲気醸し出している。中庭の教会よりも植えられた大きなヒマラヤ杉も自然に枝を拡げている。

数人の見学者が居たが、若者1人はスケッチ・ブックに柱頭を描くのに余念がなく（上右図）、中年の夫婦者は、ゾデアック叢書と見比べながら回っていたが、目当ての物が見つかったのかそのうち三脚と100mm位のレンズ付きのカメラで、柱頭を狙い始めた。私は専ら鐘の音を含めたこの雰囲気をVTRに収めた。

ホテルはそこから歩いて5分程度のレコリエット広場（Place des Recollets）に面した **Hotel le Chapon Fin**（2星）である。部屋を見て宿泊を決定し（いつもこの手順となる。今後はいちいち記すのは省略）、車を広場に移動する。

先ず、明日の夜のホテルを又前日も利用したホテル・リストを参考にロカマドールに予約する。電話に出たのは英語の上手な女性だった。

ホテルのレストランを予約してから、ミサに赴く。

参列者は続々と来て、最終的には60名あまり、小さな礼拝堂はほぼ満席になる。入り口に本日特別に歌う歌詞が印刷されている「紙」が置いてある。牧師の一寸した話の後、その歌で始まる。牧師の歌うのに続いて全員が歌う。「紙」の内容を自信は無いが訳してみると、題は「生者の日」、第一節は

我らの大地のための生者の日 ハレルヤ ハレルヤ

神の祝福した果実は輝く太陽が夜を引き裂くことによって実る ハレルヤ ハレルヤ

と言ったもの。5節までである。E. Daniel という人の作とある。

その後、賛美歌と説教の繰り返し。説教は、全然解らないが、迫力有り。信者が歌う賛美歌はさておき、途中で長い「せりふ」も唱和する。よく覚えているものと感心する。

私の覚えている「せりふ」は？ とふと考える。昔は歌舞伎の「せりふ」（切られ与三郎とか弁天小僧とか）は覚えていたものだが。

聖体拝受の途中で、終わって退席する人がいたので、タイミングを合わせて退席する。8時15分。

ホテルで夕食。130frの定食とAOCの赤ワイン（小瓶で48fr）、メイン・ディッシュは子牛のステーキ。それもワインも非常に良かった。

## IV. カオール、ボナギル、ロカマドール、パディラック、フィジェック

### 4月28日（日）

朝曇り、ホテルの窓からは教会の鐘楼が見える。広場には紫の花を一杯につけた木（残念ながら名前を知らない）が沢山植えてあり、良い気分である。

先ず、ガロンヌ谷が一望できるというブドー（Boudou）村の展望台（ホテルから約7km西）に行ってみる。ガロンヌ河、タルン河の合流地点と広大な遊水池（？）が見下ろせるのだが、雨が激しく降ってきて眺望は余り利かなかった。

ここからカオールに向かう。これから明日の途中までは、ミシュラン・グリーンガイドのDordogne (Perigord-Quercy)の領域である。この本は英語版であり助かる。

カオールには、いったんモントウバンに戻り、国道N20で行くのが無難なのだが、田舎道を使ってショート・カットをねらう。それで何回も道に迷い、時間的にはかえって損をしたかも知れないが、田舎道を走る要領を少しづつ習得すると言う意味では有益だったと思う。

カオールも、酒どころで、道がカオールに近づくと、カオールのワインと言う看板が頻繁に出てくる。又この地は、ホアグラの大産地で、「ホアグラ有ります」と言った広告も良く見かけた。今晚当たりホアグラも  
トライしよう。



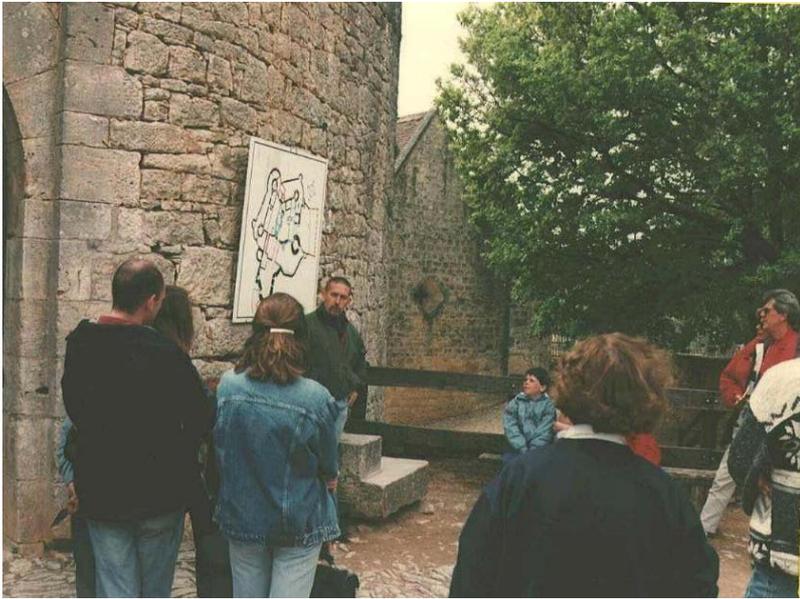
カオール (Cahors) では、市の象徴となっている バレントレ橋 (Ponte Valentre) (左図) だけ見ることにした。この橋は、フランス中世軍事建築の代表例の一つである。三つの高い塔を持ち、ロット河にかかるこの橋は、誠に威風堂々としている。この橋は百年戦争の間、英国軍を押さえ、攻略されたことが無いのだそうである。

小雨の中、橋を渡ったりして見物した後、ロット峡谷沿いにD911を35km西進しD56を5.5kmばかり入った所にある小さな城塞都市 (bastide) である Montcabrier を訪れた後、

そこから6 kmばかりの所にあるボナギル城 (Chateau Bonaguil)を訪ねる事とした。  
このロット河沿いには、他にも良いところが多いのだが時間の関係で訪問を省略する。

Montcabrier は小さな村 (人口 403 人) で、城塞の跡は残っている事は解るのだが、素人目では、それだけから往事を推定する事は難しい。村のゴシック・フランボワイヤン様式の扉口を持つ小さな教会に入ってみた。

道を急いで、ボナギルに1時半頃着く。すると城はミシュランの記述 (10:30~14:30 オープン) と異なり、休みになっていて午後は14時半から開くとある。仕方なく麓のレストランで昼食とする。



14時半にキップは売り出したが、城のゲートから入れてくれない。暫くしてだいぶ客がたまった頃 (約20人)、40歳位の坊主頭の男が現れて約30分にわたる長演説をうつ (左図)。ちっとも解らなかったが、子供を含めた殆どの人はここにこして聞いている。たしかにミシュランには、ガイド付きツアー1時間半と書いてあった。やっと城に入ったが、ガイドの説明は詳細をきわめる。それで、勝手に1人で回りだした。もう一組も勝手に回りだした。その会話が聞こえてきたが英語だった。彼らもさっきは我慢して聞いていたのだろう。

雨も降ってきたので、20分ほどで早周りで見て出発する事にした。

ロカマドールまでは、先ず D911 に出てカオールに戻り、N20, D677, N140, D36 と総計110 kmあまり走ると、ロカマドール (Rocamadour)の町を一望できる町の対岸に出る。ロカマドールは、アルズー (Alzou) 峡谷の片岸の垂直に近い崖の面に、高さ150mに亘って、城、教会、住居が重なるように建っている。いまその対岸にいるのだ。見事な景観である。(次頁左図)

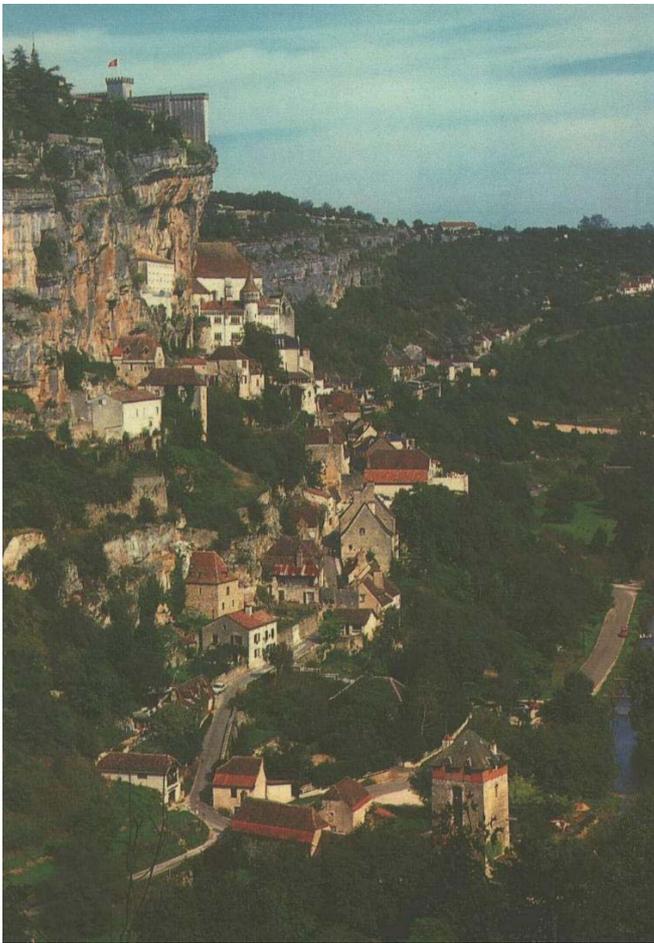
そこから橋を渡って町の中に入るのだが、何しろ道は狭いし人混みである。ホテルの駐車場を探し当てるのに一苦労した。Hotel Rest. Saint-Marie (2星) 教会の目の前にある。

ホテルで一休みの後、先ずノートル・ダム教会 (Chapelle Notre-Dame)に有名な「黒いマリア」(次頁右図)を拝観に出かける。可成り暗い半分は洞窟に成っているような余り大きくない教会内の一段高いところに子供のキリストを膝に乗せて鎮座していた。

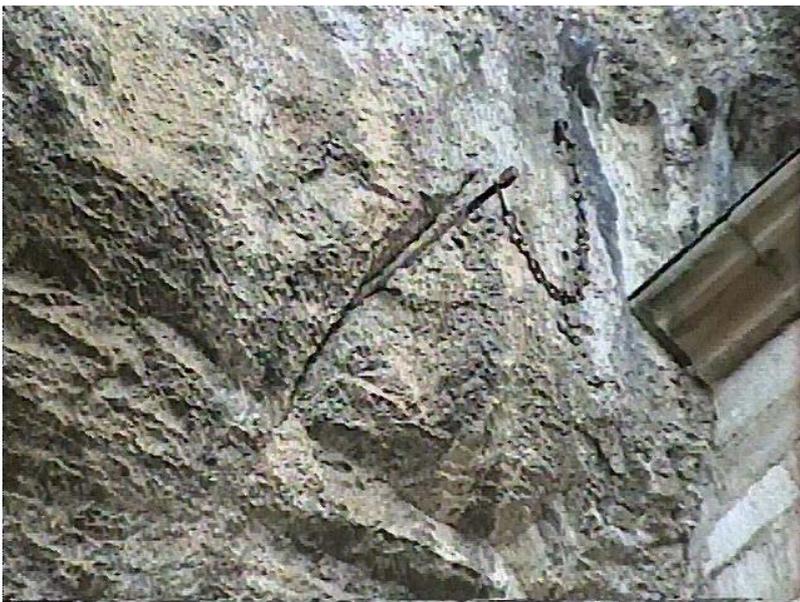
田中仁彦「黒マリアの謎」岩波書店 (昨年「クリス」さん\*から頂いた本) によると、

『この黒マリアもまた谷川を見下ろす断崖の中腹に開いた洞窟の中に祀られており、まるでこの洞窟の精でもあるかのようにローソクの光の輪の中から浮かび上がってくるその漆黒の姿は実に印象的である。こうしてこの黒マリアの前に立っていると、かつてこの黒マリアの前に手を合わせた巡礼達の心が伝わってくるような気がする。彼らはきっとこの世の生が終わった時、「あの世」に無事に導いてくれるようこの黒マリアに祈願していたのではないだろうか』とある。

\* : 「クリス」さんは、PC-VAN の SIG、NTRAVEL のアクティブ・メンバー。



又、田沼武能写真集「ロマネスク古寺巡礼」岩波書店 の中で、矢野純一氏は、『私の意識のなかでは奈良の法隆寺にある飛鳥仏の百済観音のイメージとダブってくる』と云っている。そう言えばそんな風にも見えるマリア様である。



この教会の入り口左手の崖の上に錆びた鉄の剣が突き刺さっている。ローランの剣(左図)と言われる物である。伝説によると、英雄ローランがロンスポーの戦いでサラセン軍に囲まれ、最後の時に剣が敵に渡るのを防ぐために、大天使ミカエルに祈り、剣を投げたところ、剣はロカマドールまで飛んできて、ここに突き刺さったのだとされている。実際は、ローランはバスク人に殺されたのであるが。

次に、すぐ横にある聖救世主教会（これが一番大きい教会）に入ってみる。何か雑然とした感じしか受けなかった。他にもいくつか見所はあるのだが、日曜の為、休みが多かった。

夜、ホテルのレストランで夕食。「美食家の散歩道」という小冊子にも載っている所を見ると、一応名は通っているのだろう。

前菜にホアグラが入っている定食（180fr）とカオールのAOC赤ワインを頼む。ホアグラは8cm直径、厚

さ2.5cm。周辺にチーズ、トマト、ハーブなどが盛りつけられている。後は薄切りカリカリパンとカップに一杯の甘い白ワインが付いている。それほど上等のものでは無いのだろうが、実に美味であった。

メインは鴨の肉ときのこを薄皮のパンに挟んで焼いた物一皿に、トマトとほうれん草を炒めたものの別皿がついている。これもなかなかのものだった。赤ワインも良し。

## 4月29日(月)

朝、ホテルをチェック・アウト後、教会やホテルがあるレベルより数十米高いレベルにある城に行ってみる。その城壁の先端から見下ろすパノラマは素晴らしい。私の泊まったホテルも真下に見えた。

ロカマドールからパディラックの深い穴 (Gouffre de Padirac) は近い。

これは、カルスト台地に開いた巨大(周囲99m)で深い穴であるが、その下は「鍾乳洞」に成っている。深い穴について、人々は19世紀まで悪魔と関係があると考えていたようである。

リフトを乗り継ぎ75mほど降り、そこから階段で地下の川のレベル(地表から103m)に到達する。ここから2kmほど奥に行けるが、特筆すべきはその内700mほどがボートの旅である事である。

15人ほどを乗せた鉄製のボートを若い船頭が櫂で巧みに操りながら、説明もする。洞窟は狭く、凸凹していて、客の頭が岩にぶつかるのでは無いかとひやりとする事もあったが、彼の手さばきに狂いは無かった。

私は、山口県の秋吉台や高知県の龍河洞なども見たことがあるが、ここは規模は遥かに大きく、ボート乗りの楽しみもあり、案内のシステムも良くできていた。外に出た所にあるカフェで昼食を取る。

ここからは、コンクを目指すのであるが、途中フィジエック (Figeac) の町に寄ってみることにした。

お目当ては、シャンポリオン (Champollion) 博物館である。<i>の近くの広場に駐車するが、<i>は休み。何回か道を尋ねながらやっとなって行ってみると、月曜は休みとある。もっともこの事は、ミシュランにも書いてあったのだが。

シャンポリオンは、当地に1790年に生まれた。ロゼッタ・ストーンの文字の解読で有名である。

博物館のそばの広場 (Place des Ecritures) の床が、14m x 7m大のロゼッタ・ストーンの拡大レプリカで覆われているのを記念にVTRに撮り、町を去る事にした。このレプリカは、アメリカの芸術家 Joseph Kossuth により、ジンバブエの黒花崗岩に彫られたもので、1991年に発表されたものである。

町を出たところで2回目のガソリン補給。

ここで、丁度 Dordogne の領域は終わり、目指すコンクはミシュランの Gorges du Tarn (フランス語しか無い) に入っている。それで、コンクだけのためにミシュラン1冊を買うのも癪なので、日仏会館で関係部分だけコピーを取り、仏・英自動翻訳ソフトの支援の下で英訳したものと併せて持ってきたのである。

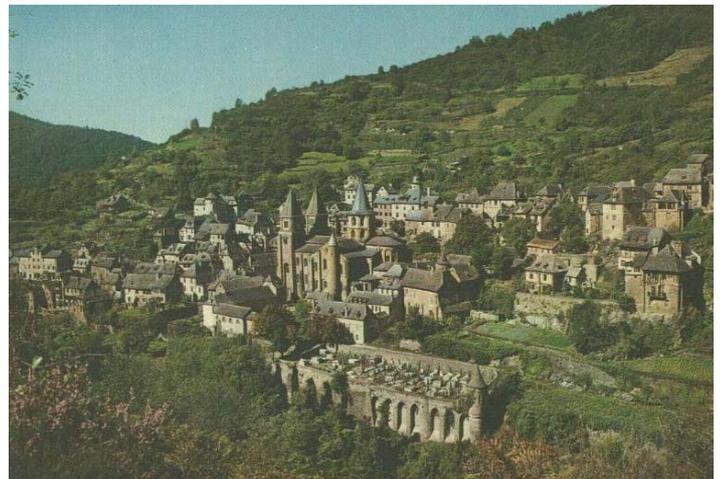
## 南仏・カタロニア紀行 (第4報)

敏翁

### V. コンク、コルデス・シュル・シール、

#### アルビ

コンクは小さな村(人口362人)だが、有名であり、道路には可成り早くからその標示が現れる。道路はフィジエックから N140, D22 を経て D901 に入り Dourdou 河に沿って北上する当たりから右手に古い教会が現れたり、左手に溪流が見えたりする楽しいドライブが10kmばかり続いた後、コンク (Conques) の村 (右図) に入る。先ず、ホテルにチェック・イン、車もガレージに収める。

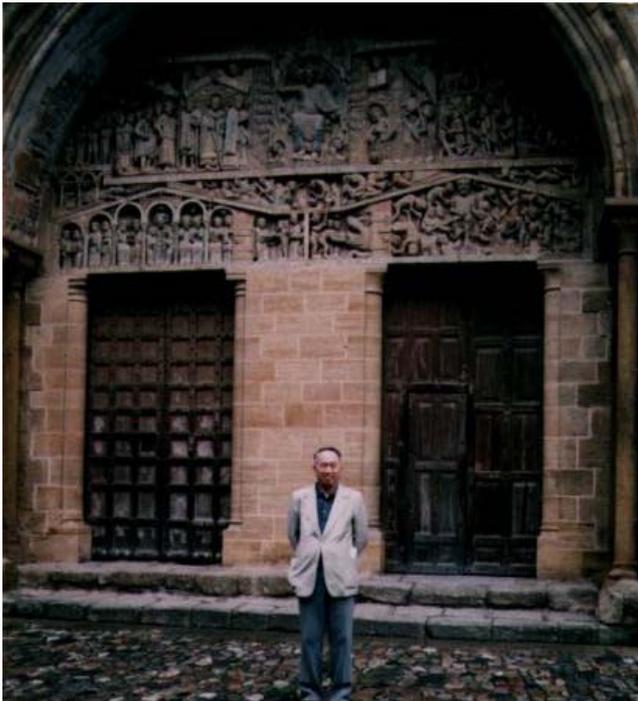


**Hotel Sainte Foy** (4星) 今回の旅行でフランスでは一番ハイクラスである。このホテルは日本で予約して行った。饗庭孝男「ヨーロッパ古寺巡礼」を読むと、饗庭さんもここに泊まっているらしいし、前述の田村武能さん一行も何度も泊まっているらしい。

**サント・フォワ教会**は目の先である。雨が激しく降って来た。

伝承によれば、サント・フォワ(=聖女フォワ)は西暦303年、コンクから西に百数十kmのアジャンで殉教する。そこにいったん葬られたが、866年ひとりの修道士によってひそかに聖遺骨が掘り出されコンクに持ちきたったという。当時は、聖遺骨などの盗みは罪にならなかつたというのも面白い。

その後コンクではしばしば奇蹟が起り、サント・フォワの名はヨーロッパ各地にひろがった。11, 12世紀、聖遺物崇拜の気運にのって、奇蹟を求める巡礼の数は急増、コンクに大いなる繁栄をもたらしたという。



しかし14, 15世紀, 他の巡礼路聖堂と同様に巡礼の数は激減, 衰退の一途をたどることになり, コンクも修道院と回廊のほとんどを失ってしまった。

これを復興させたのは, 1837年コンクの修道院聖堂を再発見した『カルメン』の作者プロスペル・メリメの働きであった。コンクの聖堂でメリメが絶賛したのは, 正面入口の**タンパン(上図)**の『最後の審判』の浮彫り(1130年頃の作)である。

中央のアーモンド形の輪のマンデルラに座し審判を下すキリスト。左に天国, 右下に地獄が描かれている。左下の三角形の手狭な所にサント・フォワが平伏して, 神(右手だけで表している)に祈っている。彼女の後ろには, 彼女の取りなしによって救われた人々が奉納した足枷や鎖がアーケードに掛けてある。

全体で124人の人物が彫られるという大作である。

この神を右手によって示すという表現は, カタルーニアの奥地タウルのサン・クレメンテ教会にあった(現在はバルセロナのカタルーニア美術館にある)壁画が有名である。(今回タウル, 美術館いずれも行く予定)

旧約の「出エジプト記」にある「汝はわが顔を見るあたわず」とした思考の名残である。

この考えは, 4世紀, 8世紀の偶像破壊運動になった。シトー派・聖ベルナルの考えの根元にもこの考えがあったと思う。

尚、本報表紙の図版の最上部に「神の右手」を見ることが出来る。



このタンパンをしばらく眺めたり、写真を撮ったりした後、教会に入る。教会内は、夕方でもあり、激しい雨もあり、本当に暗い。サント・フォワ殉教を描いたフレスコ画や彼女に助けられた四人の足枷から作られたと云われる柵等を見る。

一回りした後、宝物館に赴く。何と云ってもお目当ては、聖女フォワの黄金像(左図)、実際は聖女の頭蓋骨を収めた聖遺物箱)である。10世紀に作られたが、改造、付加は19世紀まで続いたらしい。我々の目には、あまりにもグロテスクに見えるこの像が、中世に数多くの奇跡を起こしたのだ。

中世における聖遺物信仰の異常さは、近代人の感覚では想像出来ない物がある。あまりにも「まがまがしい」ので、普通の本には書いてないが、キリストの膺の緒、キリストが割礼によって切り取られた包皮とか、マリアの貞操帯までであった(今でもしまっているのか?)らしい(ゾディアック叢書による)。

ガラス・ケースに入っているこの黄金像を前後左右から暫く拝観していたが、中世の人々の感覚は想像する事も難しい。しかしこの異常な感覚の下で、奇跡が起こったのだ。人間というものの全体を理解する上で非常に興味有る問題であり、現代の心理学を中心にした科学的アプローチで説明出来るような気はするが、具体的な論文は見たことがない。

夜、ホテルで夕食。前菜に115frのファグラのテリーヌを気張る。白ワインを呑むかと聞かれたので頼む。ソーテルヌの高そうな瓶を持ってきてこれで良いかと聞く。私の貧弱な知識では、良いと云うしかない。コップになみなみと注いでくれる。その素晴らしい味と香りに感心したが、その時はいい気分だったがこれは別勘定。55fr取られる事になる。ファグラ(10cm角、厚さ約2cm)も口中で融けた時のさわやかさ等、確かに昨晚の物とは格が違うようである。

メインは子羊の肩肉のステーキ、赤ワインはカオールのAOC1992年もの(小瓶で75fr)であった。一流ホテルは何でも高い。(ミネラル・ウォーターも他のホテルで15frのものが25fr。尚駐車代も75fr。)



#### 4月30日(火)

朝から小雨。9時頃町の中を散歩して写真、VTRの撮影を行うが、暗い。

バンカレル(Bancarel)からコンクの町の眺めが良いとあるので、行こうとするが、10m先も見えないくらい霧が深くなり、道に迷う。私の小型車には、フォッグ・ランプが付いてない事が解り、それも不安の種となる。40分ほどロスをしたが、バンカレルに到着できた。霧はどうやらかなり薄れて、どうやら写真は撮れた。帰国後プリントした写真では、霧の中に霞む教会が私にしてはうまく撮れていた。(左図)

今日は、これからコルデス・シュル・シールを回って、アルビに行く事にする。

D901 を南下（35 km）、Rodez の町に入る。ここで N88 で入って一気にアルビ迄行けるのだが、今回は、コルデス・シュル・シールに寄り道をする事にした。それには、炭坑で有名なカルモー（Carmaux Rodez から 62km）で D91 に入れれば良い。しかし N88 に コルデスと云う表示が現れない。行き過ぎて戻ったがやはり発見できなかった。

これは、N88, D91 とカルモウの町の関係が複雑なためと考えた。それでカルモウの町の中心（Centre Ville）に行ってみる事にした。中心とおぼしき広場に車を留めたが、さっぱり解らない。すると郵便配達夫（？そんな感じの制服を着ていた）らしい男（50歳は越えている、人の良さそうな男だった）がバイクで通りかかった。コルデスへの行き方を尋ねると、一寸考えていたが、私について来なさいと私の車を彼のバイクで先導してくれる。しばらく行くとコルデスの表示が現れた。彼の親切に感謝。



コルデス・シュル・シール (Cordes-sur-Ciel  
天上のコルデスとでも訳せるか) は、アルビ十字軍の頃、岡の上に作られた城塞都市である。(左図)

一時は異端者の巣窟に成ったり、異端審問的になるなどしたが、カタリ騒動の終了後は、革や布の商工業で栄えた。この名もスペインのコルドバ（コードバンの名前で知られるように革製品で昔から有名だった）に由来するようだ。

現在は、昔の景観を生かした観光と職人達（機織り、彫刻、版画、絵画等彼らは作った

者をここで販売もしている）の町として栄えている。

岡の頂上近くの有料駐車場に車を留める。（料金の支払い方がわからず、結局払わずに立ち去る事になる）

町の中を散歩した後、ランチをとる。クレープを頼んだが、まずい。そのうち <i> が開く。見るべき所を尋ねる。いろいろあるのだが、休みの所が多い。開いていた「砂糖美術館」に入ってみる。砂糖を使って人間、風景などを作ったものが並べられていたが、子供だましみたいなのが殆どである。

しかし観光ルートに入っているらしく、その内爺さん・婆さんの団体がどっと入ってきた。

ミシュランでも、3頁をさいているコルデスだが、将来が心配になってきた。



ここから、アルビ (Albi) は近い。（D600で25 km）

サント・セシル教会のそばに駐車。そばの <i> に寄る。市街地図を貰い、ホテルの位置等を確認する。ここで初めて日本語のパンフレットを貰う。

ホテルは、**Hotel Mercure Les Bastides**（3星）。1944年8月22日橋（第2次大戦でドイツから解放された日だが、それとの関係が？）のたもとにあり、川越しに教会などが見え誠に眺めの良いところである。(左図参照)

チェックイン時に、ロートレック美術館の

無料キップを貰う。

このホテルは、メルキュール・チェーン・ホテルの一つである。このチェーンはフランスを中心にヨーロッパに250のホテルをもっている。中は可成りアメリカナイズされている。(説明文には英語が入っている、受付嬢やレストランの人も英語が上手、又ビデが無い等)

ミニバーのコーラを飲んで、一休みの後、VTRだけもってホテルを出る。

教会などを眺めつつ川岸を進み、古い橋(Pont Vieux)を渡れば、すぐに教会の隣に建つベルビ宮殿(Palais de la Berbie)に着く。ここは今トゥルーズ・ロートレック美術館になっている。

画家ロートレックは、1864年この地にトゥルーズ・ロートレック伯爵の息子として生まれた。子供の時、事故で足を悪くした彼が、パリ遊興の巷に遊びながら、当時の風俗、特に巷に生きる女の姿を描いたことは有名なので、記述はこれにとどめる。ここには、彼の作品、絵画215点、彼の作成したすべてのポスター、デッサン多数、リトグラフの他、ユトリロ、ボナールなどの絵画も展示してある。

彼の絵は写真はまだスナップ・ショットには使えない時代のそれであると思った。ただ彼の目は辛辣である。スナップ・ショットの名手木村伊兵衛の目はもっと暖かい。土門拳がもしこの分野に入ったらどうだったろうか。

彼のポスターのデザインに対する感覚は、新分野を切り開いたものだと思う。今見ても、新鮮だ。

### サント・セシル教会 (Cathedral Ste-Cecile) に行く。

アルビが最初にカタリ派に避難場所を提供した事が、アルビ十字軍の名の由来らしい。

この教会は、アルビ十字軍の後、カソリック教会の権威を再構築すべく建てられた。教会は、もっと威厳と力を持たねばならない。力が異端カタリ派を潰したのだ。と言う事でこの教会は砦として建てられたのである。

確かに、鐘楼は初め天守閣らしく作られた面影を残している。(前頁図参照)



中に入る。内陣仕切り (Jubé) (上図、左は外側、右は内側)の豪華さは想像を超えて強烈な印象を与える。これは後期ゴシック・フランボワイアン装飾の到達を示すものと云われている。又これはレース編みとも比較されてきたと云う。確かに木と金によるレース編みである。Jubéの中に入るが内陣全体が同様な「レース」で囲まれている。確かに素晴らしいが、キリスト教の基本精神との関係、上述の創建の精神との関係など何かすっきりしない者が残った。

教会の前の土産物屋で、新しい発見をした。今年からミシュラン・グリーン・ガイドの英語版が大幅に拡張され、フランス全土の殆どの領域が英語版で読める事に成っている事である。私が今使っているのは、仏文のPyrenees, Roussillon版であるが、対応する英語版は、一冊でもっと広い領域、即ちPyrenees, Languedoc, Tarn Gorgesをカバーしている。これで今までの関連で云えば、コンクヤ、ベジエも含まれている。

これからは、フランス旅行に関し英語だけで相当詳細な情報を得る事が出来るように成ったわけである。

早速購入した。386頁 62frと値段も安い。(上記フランス語版は189頁)

もっともホテルに帰ってから調べてみると、英語版になるとき消えてしまっている部分が有ることが解った。27日に訪れたバルや明日訪れるリュウ・ミネルボア等がそうである。

一寸離れたところにあるサン・サルビ教会 (Eglise Saint-Salvy) を訪れる。中は非常に暗い。人影は全く無く、落ち着いた宗教的雰囲気にもまれていた。その回廊は、フランス革命で毀されて南回廊しか残っていないのだが、それは町の中に融け込み、人々の近道通路として使われており、芝では子犬がじゃれていた。こういう風景もなかなか趣があるものである。

ホテルで夕食。赤ワインは、ガイヤック (Gaillac) の AOC。ガイヤックはアルビの西 20 km ほどの所にある町で、やはりワインで有名らしい。

## 5月1日 (水)

朝チェック・アウト後、車をサント・セシル教会の前に留め、三脚とニコンを持って、再び教会内に入る。9時過ぎだが人影は無い。ゆっくり、Jube とこれも有名な「最後の審判」の大壁画の写真を撮る。

町には、スズランの花束売りが大勢出ている。今日は、メーデーで祝日である。祝日には、何時もこうした習わしがあるのだろうか？

(後記：これはメーデーのみの風習らしい)

これから、カルカソンヌへ田舎を少し回りながら行く事にする。

## VI. リュウ・ミネルボア、カルカソンヌ

アルビより N112 を約 60 km 南下 Mazamet の町で、D118 に入り更に約 40 km 南下、カルカソンヌの手前約 7 km の所を田舎道 D35 に左折するとすぐ Conques-sur-Orbiel の町である。ミシュラン・グリーン (英語版には出ていない) によると美しい城塞都市で、城塞形式の教会もあるとの事で訪れてみた。しかし町の中を走り回ったがさっぱり様子が解らない。やっとの事で多分そうだと思われる教会にたどり着く。しかし扉が巡らされていてその門は閉まっている。ミシュランに依ると、訪問者は司祭館を訪れることとあるが、その位置も解らない。私と同じように町を走り回っている多くの車を見た。

結局諦めて、D35 を更に東に 14 km ほど入ったところにある リュウ・ミネルボア (Rieux-Minervois) に向かうことにした。

道の回りは、殆ど葡萄畑である。いくつかの村を通ったが、その名前は、xxx-Minervois という名前が多い。Minervois の名前で、AOC グレードのワインを作っているようである。(i)の資料による)



小さな教会(上左図)のそばの広場に駐車する。教会の傍らに (i) がある。元気なお婆さん (75歳?で英語が少し出来る) と好々爺のお爺さん (>80歳で英語全く駄目) の二人でやっている。婆さんが爺さんを顎で使ってい

る。いろいろな資料を貰う。その中に Minervois やその南側にある Corbieres 地方（こちらは M. より遥かに広い）のワインの資料も入っていたのだ。

彼女が、教会の扉を開けてくれる。中に入ってそのすばらしさに驚く。

急いで車に戻って、三脚とニコンを持って来る。

この教会の歴史は、11世紀の終わり頃迄遡れ、建物自体の古い部分は12世紀後半のものらしい。7角形の内陣を14辺（だいたい不規則である）の周歩廊が取り囲むという珍しい構造を持っている。

14の柱頭があるが、その彫刻はすばらしい。特に「聖母被昇天」(上右図)を表す彫刻には一番惹かれた。いずれの彫刻も非常に彫りが深く、表現も今まで見てきたものとひと味違ったものを持っている。



ゾディアックによると、この彫刻群は、カベスタニイ (Cabestany) の親方の工房に依るもので、聖母被昇天像は親方自身の腕に依るものとしている。親方の名前は、ペルピニャンの東南5 kmの町カベスタニイの教会に発見されたタンパンの彫刻に由来する。この親方は旅職人で、イタリアのトスカーナからスペインのカタルーニヤ、ナバラに至る広い範囲で12世紀の後半に活躍したらしい。

私の訪れた所では、昨年訪れたカタルーニヤの東海岸にあるサン・ペレ・デ・ロード修道院の扉口がそうなのだそうです（その時はそんな事には無関心だったが）、又数日後に訪れる事になるボールー (Boulou) 教会扉口の

軒蛇腹の彫刻もこの親方によるものだそうです。

もう一つ、素晴らしい彩色彫刻 (キリストの埋葬) (上図)がある。15世紀のブルゴーニュ派によるものらしい。



ここからカルカソンヌまで、来たときと違う道を通って行ったが（心ならずもそうなってしまった）、周りはやっぱり葡萄畑ばかりだった。

カルカソンヌ (Carcassonne) の城壁に到着する。今晚のホテルはこの中にあるのだが、交通整理の男に車の進入を止められる。ホテルの名前を云うと、城壁の間に駐車しろ、荷物はあとでホテルの者が取ってくれると言う。この城は二重の城壁を持っているのだ。駐車して手ぶらで内側の城壁のナルボンヌ門(左図の①)に入る。すぐそばにある <i>は休み時間である。（夕方もう一度行って資料を貰う）  
細い石畳の道を通ってホテルに到着する。（左図の多分②あたり）

**Hotel du Donjon** (3星) (Donjon とは天守閣と言う意味)

この地には、紀元前から砦があつたのだが、時代とともに強化されていった。アルビ十字軍の時は、カルカソンヌの子爵レイモン・ロージャー・トランカベル（時にわずか24歳）は、一人敢然と北の諸公に立ち向かったが、

1209年8月15日、水の枯渇と裏切りのため町はシモン・ド・モンフォールの手に落ち、聖王ルイの支配下に置かれる事になった。ルイはこの城の国境（当時ルシヨンはルイの支配下には無い）防衛上の重要性から、城壁を二重にして、ほぼ現在の形になったのである。

ホテルのミニバスで荷物を取りに行く。若い運転手は狭い道を曲芸的に乗りこなす。夜は、この運転手が私の車を城内の安全な所に運んでくれるというのでキィを渡す。（私が駐車した場所は、夜の安全は保障されない）その駐車は有料だが、26frと安かった。

雨が激しく降って来た。ホテルの大きな傘を借りて散歩に出る。本日祝日で Chateau Comtal（伯爵の館と訳せば良いのか？）は休みで残念。

サン・ナゼール教会 (Basilique St-Nazaire) (上図の③)に入る。ステンドグラスが素晴らしい。13-14世紀のもので、南仏一とされているそうである。

教会の前に、本屋があり、真面目な店構えなので入ってみる。ゾディアック叢書がずらりと並んでいる。これから行く事になるカタルーニヤの巻 (Catalogne Romane) を求める。240fr（日本円で約5000円）、日本の丸善で買うと7000円はする。ミシュラン・グリーンも並んでいるので、英語版の事を聞いてみた。すると誠に不思議な返事が返って来た。「英語の本は売ってはいけない事になっている」と言うのである。

ここにも、規制の問題があるのである。多分フランスは、規制の非常に多い国なのだろう。時々政府の発言の中にある「アメリカ文化」に対する警戒感と子供じみた対策、自動販売機の極端な少なさなど、私の少ない経験でもそれを十分に感ずることが出来る。

土産物屋は、この規制の対象にはなっていないのか、この後も土産物屋だけで英語版を見かける事が出来た。



異端審問の塔、など見物して散歩を続けていると、「カタリの館」と言うのがあり、異端審問と拷問道具が展示されていると言うので、どんなものかと入ってみる。説明文は6ヶ国語で付いており、親切な展示になっていた。針だらけの椅子とか目をそむけたくなるような展示の他に、私の関心のジャック・フルニエ(上左図)と、異端審問官ベルナル・ギィ(上右図)の実物大の人形が飾ってあった。前者は聡明そうな顔つきで、又後者はいかにも近寄りたがたい表情で立っていたが、実際はどうだったのだろうか？

夕食は、ホテルの経営する別棟のレストランでとる。定食125frだがなかなか良い。サラダには小さなホアグラが入っている。メインは南仏の名物料理である鴨のコンフィット (Confit de Carnard)にする。コンフィットとは、鴨などの肉をそれ自身の脂で3時間ほど調理した後、陶器に貯蔵したもの。

微妙な味が全体にしみわたっていて、なかなか美味である。

赤ワインは、Fitouにする。前にも記したが、Corbieres 地方は酒どころである。この地方は、北と西はカルカソンヌを流れるオウド (Aude) 河、東は地中海で囲まれるかなり広い地域で、その殆どが AOC ワインの産地である。その中でも南の限られた地域で作られるものに Fitou と名付けていて、Corbieres, Minervois の AOC より10%位高く値付けされている。もちろんボルドー、ブルゴーニュものよりはずっと安い。

私も、ずっと毎日呑んできたので、少しは舌が利く様になったのか、Fitou と他との違い（ミシュランによると強

くてボディがある)がわかった様な気がした。

たまたま隣のテーブルに若い日本人夫妻が座り、久しぶりに日本語の会話を楽しんだ。ご主人は、日仏合弁会社のフランス駐在員とのことで流暢にフランス語で店員とやりとりをしていた。

帰りしなに、レストランの出口で、従業員にスズランの花束を貰う。メーデーの慣例なのだろう。

## Ⅶ. フォンフロアッド、ピルペルテュス、ペルピニアン

### 5月2日(木)

朝、チェック・アウトすると、昨日の運転手が私の車を持ってきてくれる。

朝は人も少ないので、私の運転でも簡単に城外に出られる。

今朝は、11時迄にフォンフロアッド修道院 (Abbaye de Fontfroide)に入る必要がある。N113をナルボンヌに向かって48kmばかり東進すると、この有名な修道院の表示が現れる。D611に入ると修道院は近い。Corbieresの小さな谷に、イトスギに囲まれて静かなただずまいである。

この修道院は、1093年ベネディクト派の修道院として創設されたが、1145年シトー派に移った。

今回の旅行では、ここの他、スペインで3つのシトー派の修道院を尋ねる計画なので、シトー派について、関連事項を中心に記してみたい。基本資料は、今野国雄「修道院」近藤出版社 1971である。

以下『』内は、上記書籍の文に負うところが多い。

『第一回十字軍が出発してから二年後の一〇九八年、その三月二十一日ブルゴーニュのディジョンに近い蘆の生い茂った荒地に21人の修道士によって小さな木造の修道院が建てられた。この修道院は、まもなく附近一帯に生えていた蘆のロマンス語Cistelsに因んでシトーと名付けられることになった。

修道士たちは全員新しい生活をもとめてここに移った者たちであったが、暫くは名もない小院に過ぎなかった。これらの修道士たちの念願したことは「聖ベネディクトゥス会則」を文字通り厳格に実践することであった。従ってこの会則に規定されていない衣服、美味な食品、私宅、荘園や領民などは一切拒否し、また十分の一税についても、自らの労働によって自活する修道士にとって、その徴収は他人の権利を不当に行使するものとして廃止した。しかし、彼らは自活のための労働力を外部に求めざるをえなかったので、助修士、さらには賃金労働者をも積極的に採用し、土地の耕作、葡萄園の栽培、牧草地、森林の管理、河川での漁労、家畜飼育、これら全部を助修士に委せた。また、聖堂内の祭式用具も極度に質素なものとし、十字架は木製、燭台は鉄製、香炉も鋼製か鉄製とし、帷衣、白衣祭服、肩衣にも金糸、銀糸を用いず亜麻織とした。

1112年に老若30人の信者が修道士になろうとしてシトーの修道院に入った。後にクレルヴォーの修道院長として全西欧にその名を馳せるベルナルの一行である。この頃からシトー派は急速に発展を開始する。以後八年間に12の修道院が新設される。そのうち、最初の四修道院(1118年のクレルヴォーが含まれる)が「父修道院」と呼ばれる特別の地位を後々まで占め、「母修道院」であるシトー修道院とともに、傘下の「娘修道院」を統轄する、修道会の要石となる。』

その後の発展も目覚ましく、ベルナルのなくなった1153年には343、12世紀末には694の大勢力になった。

この流れの中で、フォンフロアッドも1145年シトー派に移ったのである。そしてここも、1150年には12人の僧をカタルーニャのポブレに送り、その地に大修道院を開いている。(カタルーニャ東海岸はここを中心に訪問する計画である)

『修道士たちが一つには自活のために、一つにはともすれば陥り勝ちな怠情への戒めのために、労働に励むことは重要な徳目であった。しかし、こうした修道士の労働義務は修道院が大土地所有者として富裕化するにつれて、また修道士が祭式や祈りや写字に多くの時間を当てるようになるにつれて、薄れていった。ところが、シトー派修

道士たちは「聖ベネディクトゥス会則」に厳格に復帰することによって、修道士のこの労働義務をも再び強力に復興することになったのである。

シトー修道会に代表される修道士のこの労働倫理とそれに基づく自己抑制こそは、マックス・ウェーバーの言うように、合理的な生活態度の組織化された方式を発展させるものとして、後にピューリタニズムの実践生活にとっても決定的に重要な理想とされたものであるとすれば、西ヨーロッパにおける労働倫理や職業観の形成にとっても、彼ら修道士が果たした先駆的役割はまことに大きかったと言わなければならない。

又、フランスにおける盛んなぶどう栽培に対する修道院の貢献はシトー派に限らなかったけれども、サンスやランス地方のシトー派修道院はこの面で早くも注目を惹いていた。

シトー修道会禁欲的修行や使徒的伝道に精力的に専心しつつあった十二世紀前半が同時に異端の新たな激発期であった、というのは奇妙なパラドックスのように聞えるかも知れないがこれは「グレゴリウス改革」によって触発された西ヨーロッパの宗教的高揚という盾の両面にすぎない。』

マクロに見れば、そうなのだろうが、シトー派等が、カタリ派に対して敵対心を持って対抗したが、民衆の心を捉える事が出来なかった理由については、説は種々あるのだが、私になるほどと納得できるものは無い。

シトー派の活動は、純粹に宗教的なものであったが、その中に近代合理主義の萌芽のようなものを含んでいた。そしてその経済活動の結果として、殆どのシトー派修道院は裕福に成っていた。その新しいやり方や考え方は、民衆にとっては魔術の様に見え、何か「まがまがしい」ものを感じていたのではないか。それに比べて、カタリ派の完徳者は、民衆にとって理想とされる伝統的な宗教者のイメージそのものだったのだろう等と考えているのだが。

フォンフロアド修道院の話に戻って、カタリ派との関連を述べれば、前に記したことの繰り返しになるが、次の2点である。

- 1) アルビ十字軍の発端は、教皇特使ピエール・ド・カステルノの殺害であるが、彼は、この修道院の僧だった。
- 2) ジャック・フルニエもパミエの司教に成る前、この修道院長であった。彼の思想の根元には、シトー派の考えが流れていたのだと思う。

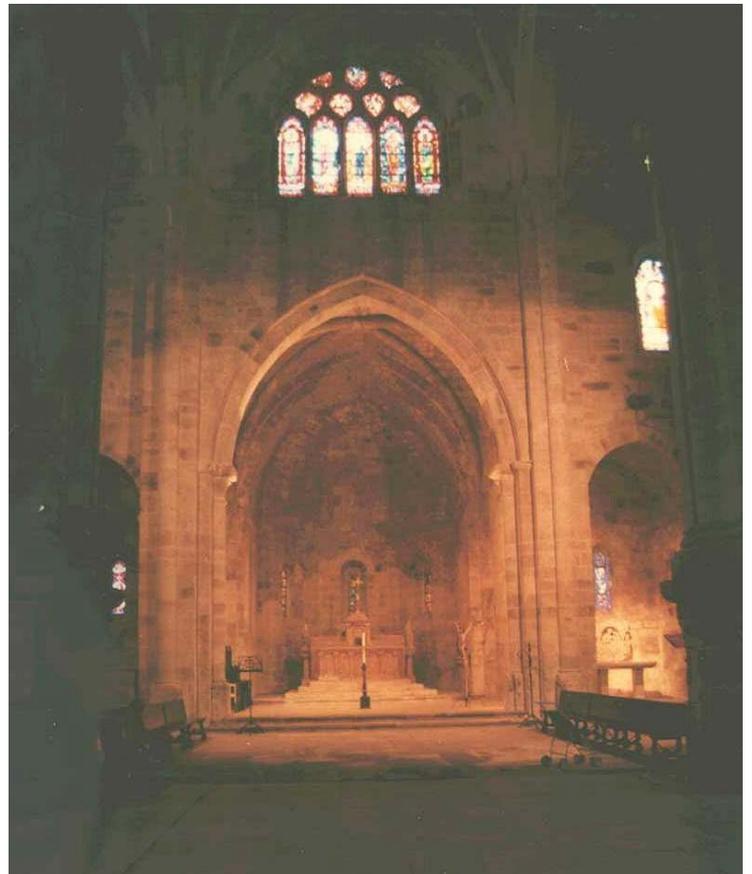
フォンフロアド修道院は、1791年に放棄され、芸術作品等は遠くに散ってしまったが、1908年個人の所有になり、見事に修復されたものである。

11時からのガイド付き訪問に間に合う。10人位の組に一人ガイド（私の組は30代の男性）がつく。フランス語が解らないのは私一人、英文のかなり詳しい説明資料を貸してくれる（終りに返す）。

非常に落ち着いた雰囲気修復されている。回廊はシトー派らしい。柱頭には、他のロマネスク教会の様に怪物は居ない（この件に関し、聖ベルナルがクリュニー派の芸術を激しく非難したのは有名）。そのかわり華やかな植物文様で飾ってある。又、ギャラリーは、アーケードになっていて、そのタンパンを3本の細い柱（各々に柱頭がある）が支えている。そのタンパンにも一つ又は三つの丸窓を開けるなどして、柱頭の単純さを補っているのだと思う。

教会内に入る。この時、誰でも違和感を持つのではないか？

ステンドグラス(左図)があまりにも美しすぎるである。

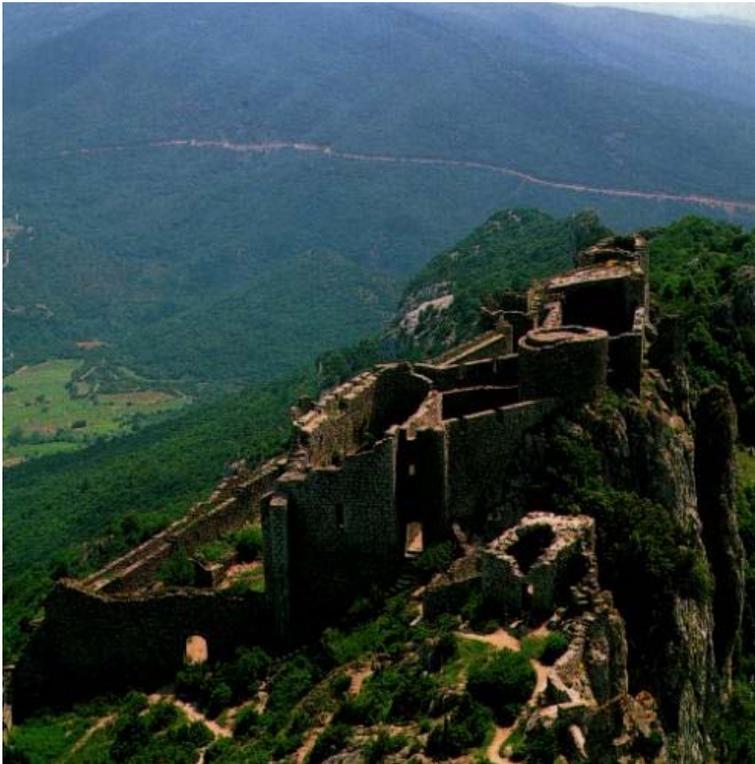


これは全く新しいものである。シトー派の精神と合わないこの様なものを持ち込む今の所有者(?)の考えが単純には理解出来ない。他の補修は、実に良くできていると思うからである。

しかしこの違和感は、スペインの3つの大きなシトー派修道院を回ったときも感じたのである。バルボナだけがかるうじて昔の精神を保っているように思えた。聖ベルナルルの説いた華美を廃する考えは、結局人間性に悖るところがあり、廃れていったのだろう。

ステンドグラスに拘りすぎたようだが、これを除くと、シトー派らしい質朴、頑健な構造である。又穹窿を支える太い組み合わせ柱が床面から2mも高いところにある台座の上から立ち上がっているのは、アンリ・フォション(ゾディアック叢書の孫引きだが)の言による「全体が宙に浮いた様に見える」不思議な効果を与えている。ステンドグラスが本来のものであったならば、この効果が更に強く現れていたであろう。

訪問(約30分)の最後の頃、雨が激しく降ってくる。それでももう少し周りを散歩したかったのだがあわてて、車に戻る。



ピルペルテュス (Peyrepertuse この仮名表記には自信がない) に向かう。(左図)

D613 (20 km) は見渡す限り葡萄畑、D611 に入ると段々山の中に入っていく。道には「カタリの国」(Pays Cathare) の表示が頻繁に現れる。ときどき「カタリの小径」(Sentier Cathare) の表示も見える。カルカソヌの <i> で貰った資料によると、この「小径」は、東海岸からフォワまで200 km以上続いていて、「小径」を徒歩又は馬で訪れ、カタリ派の哲学や生き方を考え、彼らが受けた迫害に思いをいたす事を勧めている。これらは、この地方の人々が今も、かつて祖先がカタリ派に情熱を傾けた事を懐かしがり、誇りにも思っていることを示すものだと思う。

ただ南仏は、その後プロテスタントが栄え(ユグノー派) これも虐殺や追放の目に合うのだが(16-17世紀)、これに関しては、そのような追憶の印を見ることが無い事も私に解りにくい事の一つである。

丘の上には、古城が見えたりする。D611 (38 km) から、さらに細い道(D14)に入る。やがて クリビュ(Queribus)の城が聳えているのが見えてくる。これは、カタリ派最後の組織的抵抗の拠点(1255年、モンセギュールの11年後)となった所である。D14 (16 km) から標示に従って本当の田舎道に入り、ピルペルテュス城の駐車場に到着する。

後から考えると、この頃から疲労のためか体調も下り坂で、頭の調子も少しおかしかったのだと思う。夕方までに2回失敗をしてしまう。

一回目は大したことはないが此処でのことである。ピルペルテュス城の訪問は、相当きつい凸凹坂道を登る事、山上の強風で足元がしっかりしていないと危険である事により、ミシュランでもしかるべき靴の着用を勧めている。私も、そのつもりで、エアロビクス用の靴を持参してきたのだ。(尚モンセギュールも山登りである) 話はそれるが、私は体力保持の為、数年前から年に似合わず若い女性に混じってエアロビクス・ダンスを楽しんだりしている。(良いものですよ)

駐車場から、坂道を相当登った所にあるキップ売場に到着して、周りの人々がが殆ど皆しかるべき靴をはいているのを見て、靴を車のトランクの中に忘れて来た事に気づく。坂を引き返す気分になれなかったので、キップ売場のおばさんに、靴(普通の紳士靴)を見せ、これで大丈夫か尋ねる。

「大丈夫 (Ca va) だが、くれぐれも足を踏み外さないよう、柵の外には出ないよう気をつけなさい」と言ってくれる (彼女の身振り、手振りを含めて多分こんな事を言ったのだろう)



ここから、城の城壁にたどり着くまで相当急な凸凹道を休み休み登る。靴の底を通して凸凹が解り、足の裏が痛い。

この城は、いわゆる「カルカソヌの5人の息子」の一つであり、その中でも大きさと姿を併せて最も素晴らしいものである。大きい (全長300m) のは、この名で呼ばれる城は、2つの隣接した、しかし分離された城から構成されている事による。東のピルペルテュスと西のサン・ジョルジュがそれである。東の城は、封建時代の砦であり、カルカソヌで、24歳のトランカベルが降伏した後、戦わずしてしてフランス王の軍隊に降伏した。西の城は、東よりさらに60mほど

高いところに有り、新しくフランス王の命によって作られた。

この西の城には、東の城の西側にある広場の様なところから「聖ルイの階段」と呼ばれる急で、強風の時の危険防止の為の鎖が手すりの代わりに付いている階段を登って到達する。私が登った時もかなり風は強かったが良く晴れており上からの眺めは抜群で東の城を見下ろした景色、ケリビュ城の遠景 (直線距離で約6km)、遥かに霞む地中海など、風景絶佳である。(上図)

「5人の息子」(ケリビュもその一人)は、1659年ルシオンがフランスに編入されるまで、フランス・スペイン国境最前線の監視と守りを務めていたのである。

ルシオン地方の首都ペルピニアン (Perpignan)に向かう。D14(16km), D611(15.5km), D117(32km) で市内に入る。<i>のマークは有るのだが、どうやっても<i>に行き着かない。夕方の大都会は、交通ラッシュも相当だ。考えてみると、今度のフランス旅行では、大都会の<i>もしくはホテルを車で探すのは初めてである。去年スペインで悪戦苦闘した悪い記憶がよみがえる。やむをえず、町中にどうやら車を留められる所を見つけ、古い煉瓦の塔(有名なCastilletの塔であった事は後でわかる)がそばに見える事で安心して、駐車した通りの名前も確認せず、歩いて<i>を探す。<i>は確かに大きな建物の中にあるのだが、知らない者が車でアクセスするには問題がある場所であった。

そこで、市街地図を貰い、ホテルの位置をチェックして貰う。

そして、駐車した車の所に戻ったつもりが車が見あたらない。一時間も探したろうか、又雨が降ってくる。丁度警察のパトロールと逢ったので、事情を話して協力を頼む。2人の内の一人は英語が相当出来た。見つかったらホテルに連絡して貰うことにして、ホテルにチェックインの為赴く。実は、留めたところが違法な所でレッカー車(時々見受けた)で持って行かれた可能性が有るかも知れないとの心配も有ったのだ。パトロールとのやり取りでその危険性は無いことが解った。位置関係を示すと次の様になる。

塔<---徒歩4, 5分--->ホテル<---徒歩4, 5分---><i>

**Hotel Mercure Perpignan** アルビで泊まったのと同じ Mercure 系列。

ここのサービスは、チェックインした客にその場でワインを一杯サービスする事である。受付嬢に勧められたが、ワインは好きだが今はそれどころではないのだと事情を話して断る。

部屋で、一息入れて、ミニバーのコーラを呑み、受付嬢に傘と地図に書き込む鉛筆まで借りて(風潰しに調べるため)又探しに行く。又徹底的に調べたが、見つからない。そこで、塔は見えるが、大通りを渡った向こうの通

りではないかと発想を変えてみる。(渡った記憶は無いのだが)するとちゃんと車があった。  
(約30分かかった)大分頭が疲れていたのだと思う。

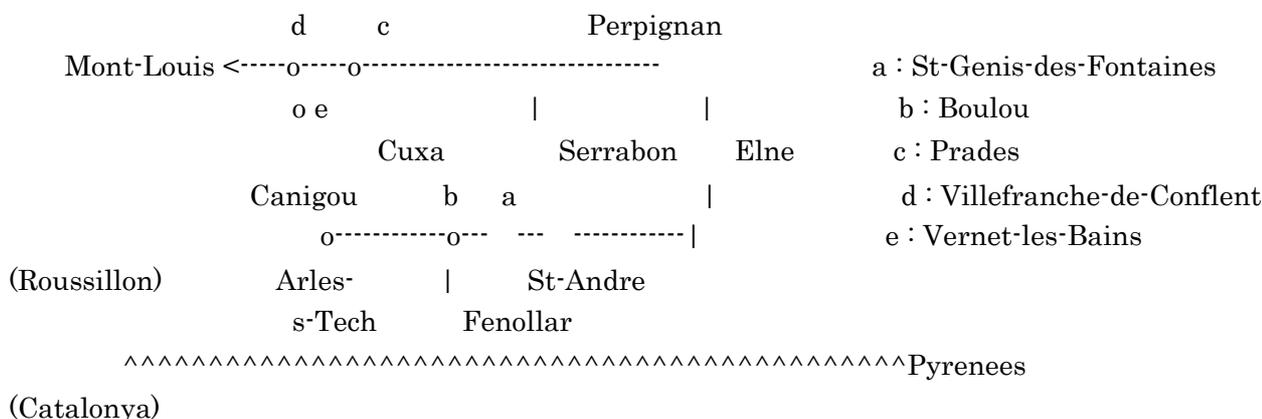
ホテルの駐車が厄介だった。ホテルで貰った磁気カードを使っていくつかのホテルが共同で運用している地下駐車場(私のホテルからは30m位の所に2つ入り口ある)を使うのだが、これが完全自動なのである。扉の横にある「入出力装置」にカードを入れるといろいろ表示が出てくるのだが、さっぱり解らない。結局先ほどの受付嬢にやって貰う。車を乗り入れ(感じは日本のエレベータ式駐車場と同じ)、外に出てボタンを押せばよい。ホテルで夕食をとる。赤ワインは、ルシヨンのAOCにする。

## VIII. ルシヨン (Roussillon) のロマネスク

### 5月3日 (金)

このホテルには2泊する事にしてある。それはここまで溜まった下着、靴下、スポーツ・シャツをランドリーに出す為である。

今日明日の訪問先の計画を次頁の略図で示す。ルシヨン地方に残るロマネスクの美を訪ねるのが目的である。



本日は、エルヌ (Elne) からテク (Tech) 河沿いに上流 (西 a→b の方向) に出来るだけ回ってペルピニアンに戻り、明日はテ (Tet) 河沿いに進んで、モンルイ (Mont-Louis) 方向に抜けると言う基本計画なのである。

効率的に回ろうと思うと、頭が痛い。サン・タンドレが、9~11時しか開いてない事と、フノヤールが10時半~12時と15時以降が開いている点が問題だ。ただどこかの <i> でルシヨン関係の資料も集めたい。直感的に、エルヌの <i> が沢山資料が有りそうな気がしたので、それとフノヤールに11時半迄に着く事を前提に次の計画を作った。

エルヌ (<i> だけ) --> サン・タンドレ --> フノヤール --> アルレ・シュル・テク --> ボールー --> サン・ジェニ・デ・フォンテーヌ --> エルヌ教会 --> ペルピニアン (マジョルカ宮殿等) --> ホテル

駐車場から車を出すのが、難しい。昨日と違う本体(これが2つの駐車場の中央制御と現金処理をしている)にカードを入れて、表示に従ってコインで支払い、そのカードを昨日の「入出力装置」に入れると車が出てくる仕組みなのである。今回も途中で解らなくなり、受付嬢(昨日とは違う小柄のフランス美人)の世話になる。彼女は先ず、50frの小銭が必要だとして、100frのお札を小銭にしてくれる。それを持って全部やってくれた。駐車料は40fr位だった。他の宿泊客も彼女の世話になっているようだった。

次に、ペルピニアンの市街からエルヌ方面に出ようとするが出来ない。何回やっても明日行くプラド方向には簡単に行けそうなのだが、エルヌ方向が出てこない。その内カネット(東へ11km)へ行く道(D617)に入っ

まう。ミシュランの地図を見直すと、カネットからエルヌに直結する道（D11 で13 km）があるのでそれで、エルヌに行く事にした。

道路の標示が、カタラン語になっている事も不安の種である。何とかスペイン語との類推で処理するのだが、解らないのも多い。

若干話はそれるが、日本には、良いカタラン語の辞書も無いのである。国会図書館に一冊（たしか非売品だったと思う）あるが、簡単な単語帳の様なものであった。こころシヨン、スペインのカタルーニャを車で旅行するのに必要な言葉の辞書があれば、助かるのだが。

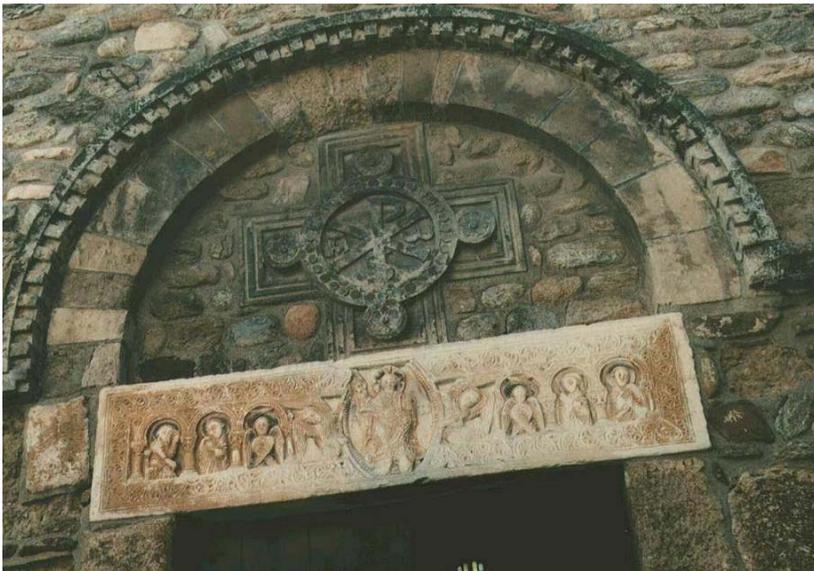
エルヌの町は、朝市が開かれていて雑踏していた。やっと市場の中に車を留める。<i>はそのそばにあった。窓口は中年の婦人だったが、想像通り沢山の資料を貰った。こう云う時、資料を沢山貰う要諦は、こちらの計画がしっかりしていて、「この男はなかなかのものだ」と思わせることにあるようである。

これは、去年のスペイン旅行中に体得した技術である。今回も本日、明日の計画を書いたノートを見せると出てきたのである。

それ以外、親切な彼女からカタラン語の発音も教わった。Cuxa は、クシャであり、Fenollar はフェヌヤッ（これは発音を若干誇張した表記かもしれないが）であった。

## 南仏・カタロニア紀行（第6報）

敏翁



エルヌより N114 を6 kmほど南下して、D618 入るとすぐ（2.5 km）サン・タンドレ (St-Andre) の小さな町である。教会はすぐに解り、その側に駐車する。教会は開いていて誰もいない。例の三脚とニコンを持って入る。

建物は、12世紀のもの。内部の祭壇、柱に残るフレスコ壁画などを撮影して外に出る。有名なのは、扉口上部大理石の「まぐさ石」の彫刻である。（左図）

中央の「栄光のキリスト」を囲む天使と使徒の構図は、サン・ジェニ・デ・フォンテーヌのものに良く似ているが、素性は後者がしっかりしている。

彫刻の詳細は、ゾディアック叢書に良い写真図版が沢山入って居るので、そちらにまかせ、全体を撮影する。扉口タンパンのだいぶ上にガラス窓があり、この回りにも良い彫刻がある。その表情を撮るには、200mmクラスのレンズが必要だが、重量の関係で持ってこなかった。

ここから、一気にフノヤールに向かう。進行左（南）には、ピレネーの山々が白く輝き、道路は空いているし快適なドライブである。

D618 を15 kmばかり進むと、ボールルー (Boulou) の町である。道はテク河の左側を走っているのだが、中心街は橋を渡って北側すぐにある。車は N9 に入り反対南に2 kmばかり進み、表示に従って細い田舎道をちょっと行くと教会に着く。こう書くと簡単だが、実際は道に迷ったりして、11時半頃着いた。小さな一見普通の農家と見間違えるような建物であった。

教会は、閉まっていて、午後2時半から開くと書いてある。これはミシュランにある条件（10-12時）と違うし、不

安になってくる。これはボールーの <i> で確認した方が良いと判断して、上述の橋を渡って町の中心のあたりを走ってみるが、なかなか <i> が見あたらない。<i> は普通12時から休みに入ってしまうと思うと気が気でない。

車を留めて、通りかかった70がらみの男に尋ねる。男は、腕時計を見て「もうすぐ休みに成るぞ。俺の車で行こう」（もちろんカタラン語？で解る筈もないが雰囲気はそう言った感じ）とそこから一寸離れた路地裏に駐車してあった彼の車に乗せてくれる。何十年前の車だろうか？ 右サイド（私が座っている側）のドアの内側の取手なども取れて無くなって穴になっており、彼が穴の中に指を入れてごそごそやって開けてくれるという状態である。それで<i> に到着したのが12時丁度。窓口嬢が、店じまいをしようとしていたところであった。彼女は、5月のルシヨン地方のイベントがまとめてある20頁ほどの資料を持ち出し、2時半には間違いなく開くと云い、その資料を私にくれた。

男は、入り口で待っていてくれ、又彼の車で、私の駐車しているところまで行きと違う道を通って送ってくれた。これで町の感じはほぼ掴めた。感謝して握手で別れる。

2時半まで時間が出来てしまった。それでとりあえずボールーの教会を訪ねる事にした。そばまでは車で行けるのだが、解らない。又80がらみの男に尋ねる。このお爺さんも親切で、路地裏にひっそりと立っている教会のそばまでつれて行ってくれる。さらに男は、「ここも良いが、こう行って、ああ行って、こう行くと（手振り、身振りが入るがさっぱり解らない）、小さいけれど素晴らしいマリア様があるんだ」と云うような事を教えてくれる。

とにかく、この地方の人の親切さ、人の良さ、表情の明るさは素晴らしい。私は、すっかりルシヨンの田舎が好きになった。尚、ミシュランには、「小さなマリア様」の教会は出ていないようである。



この**教会 (Eglise Notre-Dame d'El Volo)** にも、三脚とニコソを持って入る。中央にマリア像があるバロツクの祭壇飾り (retable)、洗礼者ヨハネと使徒ヨハネを並立して描いた15世紀のパネルなどがあって、小さいが内部も良く整えられている。この町（温泉がある）は裕福なのだろう。

しかしここで、最も有名なのは、カベスタニイの親方による扉口の彫刻である。その中でもはるかに見上げる高いところにある軒蛇腹のキリストの幼年時代の情景を彫ったものが名高いのだが、距離が有りすぎて肉眼では解りにくい(上左図)。(ゾディアック叢書には写真が出ている(上右図))

そばのレストランでランチとする。カタラン風サラダ、カタラン風ポークカツにテーブル・ワイン（ハーフ）である。サラダは去年スペインで食べたオリーブ油たっぷりなもの、カツもソースがたっぷりかかって日本のものにそっくり、コーヒーこみで97frと手頃で私には大満足だった。

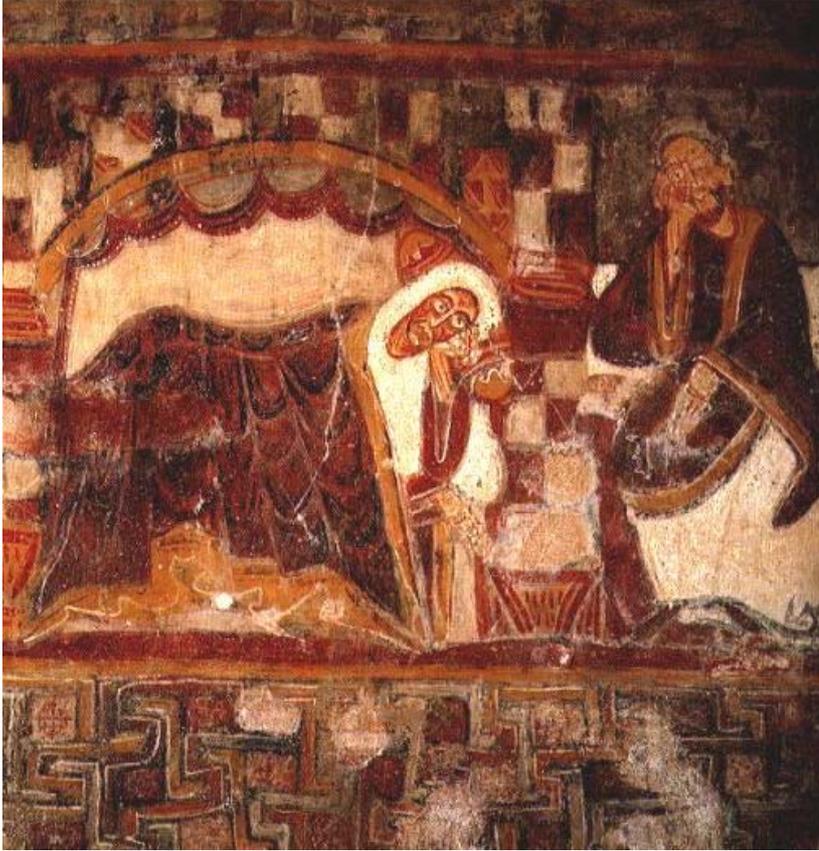
昼にしては、飲み過ぎなので、時間はあるし、車の中でカセットを聞きながら酔いをさます。今回は、五代夏子の演歌である。（去年は森昌子）

時間に合わせて、2時半頃**フノヤール**に再び着く。

教会の隣に受付のオフィスがあり、女性一人ですべてやっている。撮影禁止と言うことでカメラをそこに置き、オフィスに鍵をかけ、女性と一緒に隣の教会の鍵を開けて入る。この間に来たお客は、私の済むのを待っているしかない。

**教会 (Chapelle St-Martin-de Fenollar)** はプレロマネスクの配置をもっている。この教会（厳密には礼拝堂）

は、9世紀の創建で、12世紀の**壁画**が見事に残っている事で有名である。



(中略)

フノヤールの壁画の聖母マリアは、我々が見慣れている優しく、優雅なマリアではないんだ。あれは、つまり、あの地方で毎日毎日働いて、汗と脂にまみれて、まさしくあの農婦の顔なんですよ。そういう農婦がマリアにならなきゃ、やっぱり救いにならないわけだね。そういうことを痛感したんですよ。

(以下略)

尚、この全集は、良く纏まって居ること、カラー図版が素晴らしいことなどで、私の好きな全集だが、「ロマネスク」の発行が遅れていて、今回の旅行直前に発売を知ったのだった。それで帰国後、図書館に行ってみると到着新刊の棚にあったので借りてきて、本旅行記のまとめにも利用させて貰っている。

読み始めて、上記の巻頭対談のはじめの方にフノヤールがいきなり出てきたのを見たときは、年甲斐もなく嬉しくなってしまった。

今手元に、上記『キリストの誕生』のカラー図版が3種類ある。即ち上記全集、ゾディアック叢書(ルシヨン)、現地で求めた絵はがきである。そのいずれを見ても、現地で見た原色の激しさ、鮮やかさを充分には表現出来てはいない。

この壁画は、フノヤールの親方とその集団によって描かれたものである。この名前が示すようにここはこの親方の作品の代表例とされている。この親方の活動範囲はそれほど広くはない。ゾディアックによるとフノヤールの近く l'Ecluse-Haute、プラドの近く Riquer (小さな村でミシュラン20万分の1の地図にない。5万部の1には出ている)、Arles-sur-Tech 等に作品が残っているそうである。

一目見て、その色彩の鮮やかさに驚く。次にその絵の力強さに感心する。受胎告知、キリストの誕生(左図)、マギの礼拝と帰国などが描かれている。

ここでは帰国後、興味有る批評を見たのでその紹介で感想に替える。

世界美術大全集 第8巻 「ロマネスク」小学館 1996年4月初版発行に付いている「付録」の中の栗津則雄・長塚安司 巻頭対談「ロマネスクの魅力語る」の中の一節がそれである。

【栗津】(前略) その壁画はすばらしいものでした。特に『受胎告知』と『キリストの誕生』の部分がすごい。マリアの顔がすごいね。(笑) 目ん玉を見開いてキラキラ光らせて、とてもルネサンスなんかの優雅なマリアなんてものではない。マリアの枕もとでヨセフが「また一人分食い扶持が増えちゃった」という顔してね。(笑) あれが、実にリアルでおもしろいと思った。



だいぶ時間がたったので、Arles-sur-Tech に進むのはあきらめて戻る事にする。

D618 を 8 km 戻ると、サン・ジエニ・デ・フォンテーヌ (St-Genis-des-Fontaines) に着く。この教会も古く、ベネディクト派の修道院として、8 世紀の終わりに創建されている。ここもフランス革命以降苦難の道をたどり、1922-24 年には回廊が古美術商に売られ、ばらばらにされてしまった。(一部は残った)

1980 年代から修復が始まり現在に至っている。

まず、回廊に入る。元は 13 世紀のもの。完全に修復された回廊は実に美しい。ここの柱、柱頭

は色とりどり (白、黒、ピンク、縞模様など) の大理石を使っていてその色彩効果が見事である。殆どの柱頭は新しく作られたものであるが、古いものも 4 分の 1 ほど残っていて、その対比が長い歴史を感じさせる。

この教会の扉口の白大理石の「まぐさ石」(左図) は 1020 年に作られたもので、フランスロマネスク美術の最も古い表現の一つとされている。これには、アンダルシア地方やカタルーニャ地方のイスラムやモサベラ彫刻から学んだ技法が使われていて、ロマネスク彫刻の出発点の一つとなったのである。

中央の栄光のキリストの左右に天使と使徒たちを配置した構成は、サン・タンドレと非常に似ている。こちらの方が小さくてかわいい。

さらに エルヌ (Elne) に戻り、教会のそばに駐車する。

この教会の大聖堂の建設は 11 世紀に始まる。大体 14 世紀から 15 世紀の半ばまでに大部分が作られたらしい。

まず、回廊に入る。その装飾の過剰さに驚く。この回廊は、12~14 世紀にわたって作られており、そのためいろいろな要素が入っているのだ。

太い四角柱 1 本と柱 2 本の繰り返しでアーケードを構成している。柱は円いもの、多角形のもの、ねじり飴棒みたいなものなど多彩であり、またその柱の表面にも一面に植物文様などが付けられている。四角柱、柱の柱頭の彫刻もバラエティに富んでいる。素晴らしい回廊だが、ここまで来るとやや末期的墮落の匂いがする。

聖堂の中では、初めて「Croix des outrages」(「侮辱の十字架」とでも訳すのか?) を見た。ミシュラン・グリーン「ルシヨン平原」の項に、その異様な姿の挿し絵がある。大きな木の十字架の腕の上には、右手首などいろいろな物が載っている。又てっぺんには雄鶏が乗っているなど、何とも不思議な十字架である。一度実物を見たいと思っていたが、ここで逢う事が出来た。これは、キリスト受難劇の道具らしい。どのように使われるのか興味があるが、これ以上の情報を得ることは出来なかった。

ペルピニアンに戻る。時間が過ぎて、マジョルカ宮殿 (午後 5 時まで) には入れなかった。<i> に行き、<i> のオフィスのそばにある両替所で 500 \$ を fr に交換した。2425 fr (=4.85 fr/\$) と率は良い。

フランスの <i> の良いところは、大きな <i> のそばには殆ど両替所があり、良心的なレートで交換してくれる事である。この点、及び殆どの <i> 職員が英語がかなり出来ることなど、フランスと言う国のシステムの整備の程度は非常に高い。

私は、フランスとスペインしか、知らないが (米国には、仕事では何十回も行っているのだが、<i> 等に関心が無かったので全く情報を持っていない) スペインの状態は、フランスより一段低いと云わざるを得ない。

車を昨日の駐車場に入れる。今度は一人で旨く出来た。

昨日の受付嬢が洗濯物を届けてくれる。これで、帰国まですべて OK だ。

町に散歩に出て、教会 (Cathedral St-Jean) に入ってみる。

ホテルで夕食を摂る。少し食欲が無くなってきたのが気がかりだ。

## 5月4日(土)

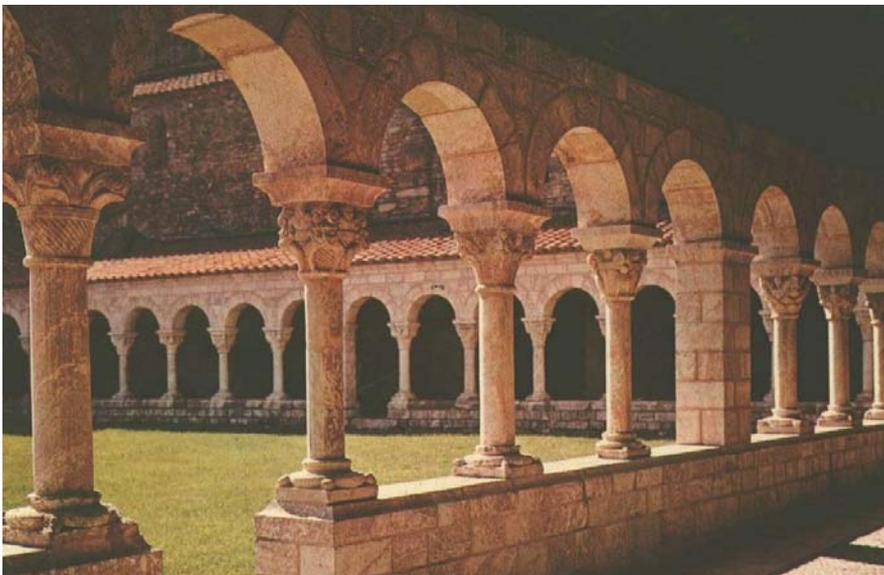
今日は、テ (Tet) 河にそって、セラボンヌ、キュクサ、カニグーは最低訪れたい。又カニグーは、車のアクセスが禁止されており、徒歩で登るか、又はジープによる輸送を頼む必要がある。疲れてきたので、出来だけ歩くのは減らしたいし、カニグーに午前中に行ければ行動の自由が広がるので、それには <i> でジープ業者を教えて貰う必要がある

と云うような事で、プラド (<i>) --> キュクサ --> カニグー --> セラボン --> モンルイ方面と云う計画を立て、ホテルを出る。今朝は2回目なので、駐車場からの出車も一人でできた。

N116 に入り、41 kmばかり西に進むと**プラド (Prades)** の町である。今朝も、ピレネーの山々は白雪をかぶり、輝いている。この町は、偉大なチェロ奏者・パブロ・カザルス (1876-1973) の亡命先として有名である。この地は日常会話がカタラン語であるから、カタルーニヤからの亡命者たちには、言葉の不自由もない絶好の落ち着き先であったろう。

<i> に行ってみるが開いていない。時間が早かったのかと思い、そこから車で10分もかからない**キュクサ修道院 (Abbaye de St-Michel-de-Cuxa)** に赴く。

ここは夏には、音楽フェスティバルで賑わう様である。



この教会 (挿) の歴史は、格別に古い。ここから程遠くない場所に840年頃建てたものは、878年にテ河の氾濫で破壊され、現在の地に移った。

その後繁栄の時代が続くが、特にオリバが1008年から改修に取り組み、聖堂を大きくした。オリバは、才能に溢れ、セルダーニュ伯の息子であった事も力したのだろう。カタルーニヤのモンセラート修道院を創建し、リポール、ヴィックの修道院をも統括し、次に行くことになるカニグー修道院の設立にも参画したのである。

しかし、フランス革命で、教会の財産は没収、僧は追放、修道院は略奪、破壊され

た。1919年以降修復の動きがあり、現在は、モンセラートからのベネディクト派の修道僧の小さな集団が住んで、1000年昔にキュクサで始まった修道院活動を続けている。

ここは名所になっていて、大きな観光バスが着いていた。その団体がどっと入っていった。受付嬢は、あの人たちとかち合わないよう、反対にこちら (地下礼拝堂: crypte) から回った方がよいですよとアドバイスしてくれる。暗い地下礼拝堂を通過して、外に出るとそこは回廊、明るい光にピンクの大理石のアーケードが輝いて見える。実に明るいすがすがしい雰囲気の回廊である。(上図)

この回廊の歴史も波瀾万丈である。作られたのは12世紀前半で、この近くヴィルフランシュの石切場から採ったピンクの大理石が材料である。

63の (円柱+柱頭)、8本の角柱と4隅からなっていた。

フランス革命では、回廊も破壊され、多くの柱頭が散逸した。1907年アメリカの彫刻家ジョージ・グレイ・バーナードがこの地に来て、32の (円柱+柱頭) を集めて持ち帰った。1926年、ニューヨークのメトロポリタン美術館がそれらを買取り、あらたにこの地から大理石を運んで柱頭を作り、ハドソン河添いの高台に回廊美術館を復元した。

これが刺激になったのだろう。フランスでも1952年から復元が始まった。27の昔の柱頭が使われている。

と言うわけで、旧状に復しているのは、南の回廊だけで、西が約3分の2、東が約3分の1、北に至っては、2本だけである。しかし、眺めから云うと一種の廃墟の美と開放感があってこの方が良いと云う気もする。（但しカニグーでも触れるが、そもそもは回廊と開放感とは異質のものなのである）

ここの柱頭彫刻は殆どが植物文様と動物文様で、ただ一人の職人が彫ったのだという。主題は完全に世俗的なものであり、宗教的主題が欠けている点と東洋的モチーフの存在が特徴である。アカンサスの葉飾り、動物たち、特にライオン、アジアの神話からとったもの等がそれである。

南の回廊から階段を少し登って教会内に入る。荒い石積みの壁面と堂内の暗さが古さを感じさせる。壁面は10世紀のものである。

教会で貰った英文のパンフレットによると、古いものでは、北の翼廊にあるロマネスクのマリアの像（13世紀）の記述があるのみである。植物文様の間から人面が覗いている昔の柱頭だったと思われる石を台座にして、ロマネスク様式の木彫りに彩色した「キリストを抱くマリア像」があった。

プラドの <i> も開いていなかった事もあって、ここで受付嬢に、カニグー行きのジープの件を尋ねたのが、彼女の親切には悪いのだが、これが結果的に時間のロスと午前のカニグー行きを駄目にしてしまった（もちろん私の語学力の乏しさが第一の原因）。彼女は、カニグーの麓カステル (Casteil) の村でホテルでジープを頼むことが出来るという。そしてこの教会の前の道をどんどん進めば、行けると途中の村々の名前まで、書いてくれた。ミシュランには、プラドの町、とヴェルネ・レ・バン (Vernet-les-Bains) でジープ輸送業者が頼めると書いてある。カステルは、さらにカニグーの教会に近く、地図の直線距離では教会から500m程度しか離れてない。これは良さそうだ。料金も安いかも知れないとも思ったが、不安もあり、もう一度プラドの <i> に引き返して、相談してみる事にした。しかし行ってみると <i> はまだ閉まっている。おかしいなとうろろうろしていると、通りがかりの女性が、何と「土曜は休みだ」と云う。どこにもそんな掲示は無い。

やむを得ず、カステルの村に行ってみる事にする。キュクサの彼女の教えとは違う広い道即ち、ヴィルフランシュ・ド・コンフランの城塞町で N116 から D116 に入り、ヴェルネ・レ・バンの温泉町を通り抜けてさらに山道を進むとカステルの村だ。暫く探し回った後、2星のホテルを見つける。そこで女将らしい女性に聞いてみると、ここにはそんなものはいないよ。ヴェルネ・レ・バンに行きなさいと云う。

ヴェルネ・レ・バンに戻ったが、どうやって業者を捜して良いのか解らない。大きな温泉療養所らしいものがあり、そこに入って行って尋ねてみる事にした。その受付に一人婦人客が居て、何か相談と予約をしているらしい。その終わりを待ったのだが、20分も待ったのだろうか？一向に終わる気配がない。痺れを切らして立ち去る事とした。

町中を走り回っていると、<i> がある事が解った。休みでも元々に行ってみると開いている。初めカニグーに行きたいと云うと、山登りと勘違いしたのか今年は雪が多くて、まだクローズだと言う。教会だと言うと「ああサン・マルチンか」と解る。ヴェルネ・レ・バンの市街地図と近くのジープ業者を紹介して貰う。

そんな事で、午前中のカニグー行きは駄目になってしまった。

ジープ業者（親父は70位か）は、自動車修理工場のついでにジープ輸送業もやっているらしい。カニグーは、10時、11時45分、14時半、15時半と時間を決めたガイド付き訪問しか認めていない。次は14時半で、14時ここから出発だ。75frの前払い。女主人らしい人に昼食の場所を紹介して貰う。

近くの Hotel Eden が良いと言うので、車を預かって貰い、赴く。このホテルのレストランはかなり大きく、客もだいぶ入っていた。



ジープは、かなり小型のもの後の荷台に「コ」の字に座席を作っている。

(左図、木立の陰に見えるのは修道院の鐘楼) 運転手は若い男。出発の時は私一人だったが、途中そばのホテルに寄ってピックアップ3人。これで後ろは一杯だ。カステルまで行くと、男(70がらみ)と赤ん坊を抱いた若い女(この二人の関係が良く解らない)に頼まれて、これも前に乗せる。何かここカステルで乗れる方法はある様である。大人7人と赤ん坊1人。こんなに乗せるのは、日本では許されない筈だがフランスではどうなっているのだろう。

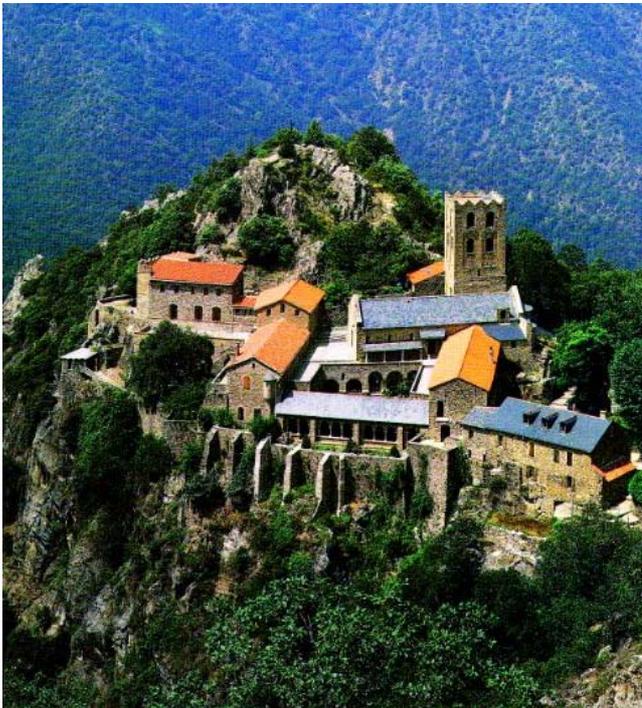
ここから坂道になる。これが実に厳しい道である。すれ違いなどは到底出来ない。カー

ブも一回で回れず、正面に突き当たるか、又は崖ぎりぎり迄車を進めて、ハンドルを切ってバック(この時も崖ぎりぎりが多い)を繰り返す。運転手の右手も隣の女性が邪魔になって窮屈そう。又この女が隣の運転手に良く話しかける。その神経がどうも解らない。誠に心臓に良くない旅だった。

なるほど之では、車の乗り入れ禁止は無理もないし、ジープも小型の必要が良く解る。

## 南仏・カタロニア紀行 (第7報)

敏翁



カニグーに着く。ジープは他に2台だけだった。歩いて登る人の方がやや多いのか。14時半の訪問客は、30人弱。

サンマルチン・デュ・カニグー修道院 (St-Martin-du-Canigou) は、高度1055mの岩の頂上に建っている。(上左図参照)

尚、カニグーの主峰 (Pic du Canigou 2784m) は、教会の東10kmの所に聳えている。

この教会は、11世紀の初め、オリバの父セルダーニュ・コンフラン伯ギィフレ・カブレタの意志によって建てられた。伯は後、修道士となり、遺言どおり死後はここに葬られた。しかし1782年頃放棄され、地方の住民の略奪により、特に柱頭は持ち去られ、数年の内に廃墟と化してしまった。

20世紀になって修復が始まった。現在は、女子修道院として活動している。

受付で、英文のパンフレットを貰う。若い、白衣の修道女一人が案内する。始めビデオ・ルームで紹介のビデオを見るが、フランス語でさっぱり解らない。

次に回廊に入る。やや変形の四辺形で10m x 14mである。柱も低い。普通は、中庭に面した柱に柱頭(上右図)があるのだが、ここは外に面した柱にある。この下は断崖で、向かいの断崖は遥か高く聳え、小さな滝が懸かっているなど、回廊、柱頭の借景になっている。素晴らしい。

しかしこれは本来のものではない。上記英文パンフレットによると、『回廊は、外界からの遮断を明示するよう設計される。従ってそこから外界が見えてはいけない。かつては、ここに図書館と診療所の建物の壁があった。』

今ある柱頭も、元は今はない「上の回廊」にあったもので、一旦盗まれて、個人の家などにあったものを買い取ったりして、並べたものらしい。

柱頭は、白と赤の大理石に彫られているが、主題はほとんど世俗的なものである。私は、動物文様などから顔を出している人か魔か、その表情と表現が面白かった。

教会内に入る。ここも荒い小割石を横に積んだ素朴な壁面を示している。柱の柱頭にある浅彫りのあっさりした模様も雰囲気マッチしている。身廊の椅子に掛けて二人の修道女が瞑想に入っていた。動かないので、人形かとも思ったが、後ろの方の椅子に掛けている修道女の横顔を暫く見ていると、動いたような気がした。

帰りのジープは、若い女は運転手(若くていい男だった)が気に入ったのか行きより頻繁に話しかけるし、運転手も横を向いて返事したりする。目の前は、断崖でぎりぎり車を止める事の繰り返し。思い出に残る経験をした。これに匹敵するのは、約20年前、騾馬に乗ってグランド・キャニオンの断崖を下った経験だけである。ジープは、囲いも幌も着いていない。多分この時少し風邪を引いたのだろう。



セラボンヌ (Serrabone) に向かう。ここは、プラドよりペルピニアンに近いのだが、18時まで開いているので後回しにしたのである。ヴィルフランシュ・ド・コンフランまで戻り、テ河に沿い N116 を21kmばかり走り、D618に入る。相当なジグザク道を9km走り、表示に従って本当の山坂道に入る。これは更に急カーブの連続であるがそれを4kmばかり走ると、やや開けた高台に出る。灌木の間からセラボンヌ修道院のくすんだ褐色の塔が見えてくる。

17時15分道に車を留めて、200mばかり歩いて教会に入る。この教会は11~12世紀のもの。この見物は、何と言ってもピンクの大理石のトリビ

ューンであろう。その彫りも正面 (Facade) の繊細さ、柱頭に現れる像の多様さと素晴らしいが、ここの特徴は、ピンク大理石の美しさである。一本の柱でも下から上に段々に赤くなっていくなど、その色彩の変化の面白さは天下一品である。

(左図)

もう18時近い。これから N116 を明るい内走り、適当なところで宿を見つけなければならない。又、プラド、ヴィルフランシュ・ド・コンフラン(城など見たいものもあるのだが時間が無かった)を通り抜ける。出来るだけ急ぎたいが、段々山道で急カーブが多くなる。又相当の登り坂で、小型車の悲しさ、アクセルを一杯に踏んでも30km/h程度しか出ないところもある。

と言う様な訳で、モン・ルイ (Mont-Louis)にさしかかる頃はあたりも大部薄暗く成ってきた。

ここは、高度1600mのところにある城塞都市である。この城塞の狭い門から古い町中に入ってホテルを探す。フランスには、Logis de France という協会(?)があり、それに参加しているホテルは、信頼が高い。日本で、フランス政府観光局から、フランス全国の Logis de France 参加のホテル・リストを貰っていた。

モン・ルイにもこのリストに乗っているホテルがあるので探す。しかしやっと探し出して見ると年休により休みと掲示してある。もう一軒そこから少し離れたところにホテルがあったが、どういう訳かそこも休みだった。

それでは、国道沿いに走ってホテルを探すしかないと腹を決めて、先ほどの門を出て、N116 を更に走り出す。するとすぐ国道沿いにネオンをピカピカさせているホテルがあった。あまり私の趣味には合わないが、そんな事を言っている状況ではないので、そこにした。

**Hotel Le Clos Cerdan (2星)** 「セルダーニュの葡萄畑」という意味か?) ホテルの窓からは夕暮れのピレネーが目の前一杯に白く霞んで見える。ホテルで夕食にする。結構客が居る。ワインは白、ルシヨンの AOC にする。しかし、食欲が全くない。メインにパエリヤを頼んだが、3分の1も食べられなかった。部屋に戻っても、著しい疲れで鼻水も出る。多分カニグーのジープで風に吹かれ風邪を引いたのかも知れない。お腹もごろごろ言っている。持参の薬を、全部飲む。風邪薬、胃腸薬、ビオフェルミン、クレオソート。これで、明日の朝の具合で、行き先を決めることにして早く寝る。

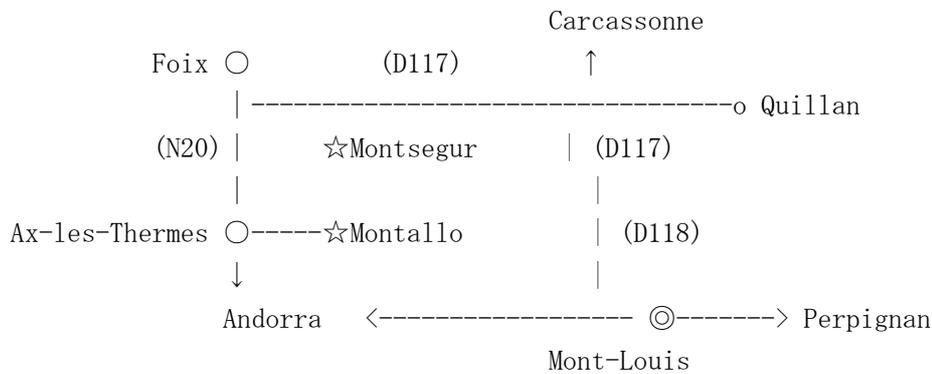
## Ⅷ. モンセギュール、モンタイユ、アクス・レ・テルム

5月5日(日)



朝起きると、窓から見えるピレネーは朝日に輝いている(上図)。天気も良さそうである。気分は大分良くなっていた。それで今日は、ロング・ドライブとモンセギュールの山登りにした。

本日、回る場所の関係位置の概略を次頁に示す。



モン・ルイより D118 を北上する。登り道を 7 km ほど進んだところが、キラン峠 (Col de la Quillane 1714m)、ここが大西洋と地中海の分水嶺。ここからオウド (Aude) 溪谷沿いに進むことになる。途中で何回も、急流をカヌーで下るのを見た。流れがやや穏やかになる広場に、ゴム・ボートなどを積んだ車が、十数台留まっており、若い男女が、ウェット・スーツに着替えるなど川下りの準備に余念がない情景も見た。

更に溪谷沿いに進み (D118 計 76km)、D117 に入ると 11 km でキラン (Quillan) の町である。そのまま D117 を西に進む。もうモンセギュール、「カタリの国」の表示が頻繁に出てくる。27 km ほどで、D9 に入り、13 km で モンセギュール (Montsegur) (下左図) の城の麓の駐車場に着く。



見上げるような急峻な岩山の上 (高度 1216 m) に、城は堂々と聳えている。ここは、名所であり、観光バスも留まっていた。

カタリ派については、第一報にその概略を記したが、ここでは、モンセギュールに焦点を絞って記す事にする。今度参考にする書籍は 原田武 「異端カタリと転生」 人文書院 1991 である。

1229 年、モーの協定 (Traite de Meaux) でアルビ十字軍は終わり、ラングドッグはフランス王の支配するところとなった。このモーの協約以後、カタリ派をめぐる情勢が厳しさを増した中で、信仰生活の中心で有り続けたのが、モンセギュールなのである。

ここはもともと、フォワ伯レモン・ド・ペレイユの所領であった。1204 年、カタリ派の申し入れで、廃墟に近かったこの城が信者の利用に供されたのだ。その後 1232 年城の再改築が進む。レモンは逡巡しながらも承諾を与えたという。

それから約 10 年、ここはカタリ派の信仰の中核となる。ラングドッグ各地から危険を冒してここを訪れた信者の数は、この時期総計千人を超えたと言われる。

勿論、体制側も事態を座視していたわけではないが、異端審問制度も効果が上がっているし、それほど大問題だとは考えていなかったようである。事態が急変したのは、1242 年 5 月の事件である。トゥルーズとカルカソンヌの間にある



町を出てすぐ D613 に入る。葛折の山道を登って行くと約 8 km でシウラ峠 (Col de Chioula 高度 1431m) に到着する。四方に視界が広がり、雄大な眺めである。しばし車を留めて眺望を楽しむ。

さらに 10 km ほど車を進め、史跡モンタイユの表示に従って田舎道に入り少し行くと

モンタイユ (Montaillo) の村 (標高 1300m) に入る。(前頁左図)

家の作りを一見ただけで、寒村であることがわかる。丘の上に小さな砦の遺跡(前頁右図)があった。これがカタリ派のものとされているが、何の表示も無い。遺跡の回りを散歩した後、村の小さな広場に車を留めて少し歩き回ったが、何かそれらしい掲示もないし、人影も無い。

モンタイユ村を訪ねた事だけに満足し、帰ることにした。

モンタイユが知られるようになったのは、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ「モンタイユ ピレネの村 1294 ~1324」原著は、1975年の発行。日本語訳は、井上幸治・渡邊昌美・波木居純一訳で刀水書房発行。

以下少し長くなるが、「モンタイユ」の序章の中から抜き出してみよう。

— . . . . . —

十四世紀、一人の人物が村人たち、それも一村落の全住民に口を開かせた。

問題の人物とはジャック・フルニエ。1317年から26年までパミエの司教を勤めた。この恰好で、異端狩りの情熱に溢れた高僧は、後年教皇に挙げられ、ベネディクトゥス12世〔在位1334-42年〕と称した。民俗誌家、それに警察官でもあって、司教時代にはフォア伯領内、特にアリエージュ上流地方の農民の言葉を聴き出す術を知っていた。拷問を用いることは稀であったものの、長時間にわたって事細かに訊問して、農民の間にカタリ派異端はいないか、あるいはカトリックの公式見解からほんの少しでも逸脱していることはないか、嗅ぎ出そうとした。

この尋問は、膨大なラテン語手稿本となって今に伝わっていて、近年ジャン・デュヴェルノアが全文を校訂刊行した。

もしジャック・フルニエが異端審問官の役目に専念するつもりだったら異端迫害以外のことは考えなかつたらうに、この証言はその枠をはるかに越えている。ジャン・デュヴェルノアの刊行した一卷本は、カタリ派追求以外に、事実上、日常生活、社会、家族、農民文化の諸問題にわたっている。

フルニエの出生は1280年代で、それ以上詳しいことはわからない。出生地はフォア伯領北部(パミエの北)、サヴェルダンである。確かなのはわれわれの主人公が比較的卑賤の出身だったということだ。教皇にまでなりながら、血統の引け目は生涯念頭を去らなかつた。しかし、この一族には彼以前にも目ざましい社会的栄達の例がある。彼の伯父アルノー・ノヴェルは、シトー会のフォンフロアド僧院長であった。この手本に勇気を得たフルニエも、若くしてシトー会士になる。しばらくの間、北へ「上って」パリ大学の学生、次いで博士になった。1311年、伯父の跡を襲ってフォンフロアド僧院長となり、17年にはパミエ司教となる。この頃その学殖と厳格さは広く知られていたが、新しい地位につくと、異端その他諸種の逸脱者の摘発者として名を挙げた。

その後、1326年、パミエの東、ミルポアの司教に任ぜられ、1327年枢機卿となり、三四年にはアヴィニョンの教皇に選ばれた。ベネディクトゥス十二世がその法号である。彼はいつもの遠慮で、謙遜していたものの、ひとたび三重冠を戴くや、ただちに尋常でない手腕を発揮した。まず閥族主義に反撃を加え、謹厳な修道僧として諸僧院の風紀肅正を試みた。不器用で武骨な知識人だったから、外交政策で成功したとはいいがたいが、教義の分野はもっとも得意とするところだった。長い一生の間、さまざまの思想家に対して、少しでもローマ正統教義から外れていると思えば、やや全体主義のきらいはあったものの、強力に論争を挑んだ。ヨアキム・デ・フィオーレ、エックハルト、オッカム等々鉅々たる思想家で、彼の槍先にかかった者は数えきれない。建設者としては、コンタ・ヴネサンの首都アヴィニョンで教皇宮殿の造営に着手し、シモーネ・マルティニを招いて、フレスコ壁画を完成させた。

1318年ジャック・フルニエは直属の「オフィス」、審問機関を設けることができた。

パミエの異端審問法廷は1318年から25年までに、370日間活動し、この間に578件の尋問が行われた。出頭した容疑者の尋問が418件、証人の尋問が160件である。これら数百回の開廷は98の起訴事案もしくは訴訟記録に関係している。最高の作業量を記録したのは1320年(106日)で、その後は次第に少なくなっている(25年は22日)。「オフィス」は大いパミエに常駐したが、司教の巡回につれてフォア伯領内の特定地点に移駐することもあった。

98件の書類は114名をおびえさせ、あるいは実際に巻き添えにした。アルビジョア派関係の異端が、この中の圧



(10月～5月が冬時間でこの様に短い、それ以外の季節は普通並である)。

去年、フイゲラスの<i>で貰った資料 “Discovering Romanesque art in Catalonia”

(Generalitat de Catalunya Departament de Comerç, Consum i Turisme) カタルーニヤ自治政府・商業、消費、観光局 発行 (この資料は今後本報でも何回も出てくる筈で、以下「資料DRC」と略記する)

によると、カタルーニヤには、ロマネスク美術を展示している代表的な美術館が以下の6館ある。

(原文表記がカタラン語である事に注意。)

- 1) バルセロナの「カタルーニヤ美術館」(Museu d'Art de Catalunya) (MAC と略記)
- \*2) ヘ罗纳の「教会美術館」(Museu Capitular de la Catedral)
- \*3) 「ヘ罗纳美術館」(Museu d'Art de Girona)
- 4) 「ウルヘルの司教区美術館」(Museu Diocesa d'Urgell) (MDU と略記)
- \*5) ソルソナの「県立司教区美術館」(Museu Diocesa i Comarcal)
- \*6) ビックの「司教美術館」(Museu Arqueologic-Artistic Episcopal)

以上の中、\*印の付いた2, 3, 5, 6は去年訪問している。今年は1 (=バルセロナ) は勿論、4 (=ウルヘル) も見逃したくないのである。

N20 はアクス・レ・テルムの町を離れると登り坂の連続、あたりは段々荒涼として来、その内残雪が道に近づいて来る。国境フランス側の検問は意外に厳しい。パスポートだけでなく、しきりに従事している職業を尋ねられる。もうリタイヤして無職だと言っても許してくれない。仕方がないので、名刺を見せる。「東?セ\*」の顧問の名刺だ。彼らも東?の名前を知っているらしい。やっと通してくれる。今回もと居た東?のお世話になったのはこれだけであった。(前回、スペインでは、マドリッドの関係者に大変世話になった)

さらに登ったアンバリラ峠 (Port d'Envalira 標高 2407m) は一面の銀世界。ここはピレネー山脈のなかでも最も高い峠の一つであり、ここも地中海 (セグレ河の上流) と大西洋 (アリエージュ河) の分水嶺である。ここで小休止。ここからは下りである。

アンドラ (Andorra) は、中世から共同主権により統治されてきた独立の公国である。13世紀以来、セオ・デ・ウルヘル司教と、フォワ伯 (この権利は 1589 年フランス王、やがてフランス大統領に引き継がれた) に仕えたのである。この共同主権国の権限は、1993 年の新憲法で大幅に縮小され、名目的になっている。



高度が高く、春もまだ浅いせいと、曇り空の為か、色彩の無い風景が続く。国道添いのサン・ジョアン・デ・カセリエス (Sant Joan de Caselles) のそばに車を留める。3層の鐘楼を持つ教会は、アンドラ・ロマネスク建築の好例とされる。中にはいろいろあるらしいのだが、教会は閉まっている。そばの国道は、ダンプが通ったりしてあまり雰囲気は良くない。

いくつかの教会はスキップして、アンドラを代表するサン・ミケル・デンゴラステル (Sant Miquel d'Engolasters) (左図)を訪れ事にする。

この教会はアンドラの首都アンドラ・ラ・ベリヤ (Andorra la Vella) に入る少し手前で、左の脇道に入り、どんどん坂道を登っていった牧草地に建っている。

四角でスマートなロマネスクの鐘楼が高く建っている。しかし、教会の横は自動車道だし、裏には何かのサービスに使うのか白いテント

が張っており、中にテーブルなどが置いてある。又すぐ近くの小高い処には、粗末な作りだが大きいカフェが店を開いている。もっとも、観光立国のアンドラだからこれで稼がなければならないのは良く解る。(まだ時間が早いのと、季節が悪いのか客はいなかったが)

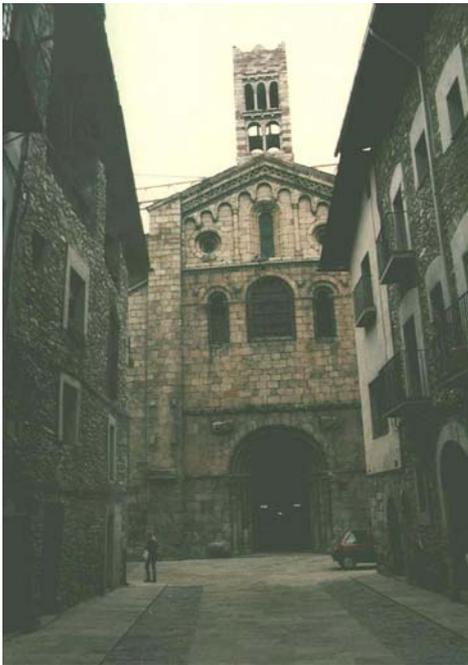
というような訳で、絵はがきや、本にある様に雑物が写っていない写真を撮れるポイントは極めて限られる事が解った。山あいにひっそりと建つサン・ミケル教会というアンドラのイメージは、実像とはほど遠い。

男が一人居たので、記念写真を撮って貰う。男は教会内の良いものは、バルセロナ(カタルーニヤ美術館 <MAC> の事)にあるよと教えてくれる。

アンドラの見物はこの位にして、アンドラ・ラ・ベリャの町の銀行で、fr をスペインのペセタ (p t s) に交換する。1400 fr が 34034 pts、24.31 pts/fr であった。

アンドラからスペインへの出国は簡単だった。国道は、スペインに入ると N145 と名前が変わる。

約9 kmでセオ・デ・ウルヘル (Seo de Urgel) の町に入る。11時15分。



先ず教会のそばにある <i> に行く。今までの <i> と感じが非常に違う。日本の交番に当たるところが、ついでに <i> をやっている感じである。若い女性の制服を着たお巡りさん(?)が、きびきびと仕事をしていた。市街地図を貰い、パドール、美術館の位置を確認する。彼女は、盛んにセグレ公園を勧める。ここは1992年のオリンピックで、カヌーのスラロームが行われた処である。私は、ロマネスク専門だと言うと、教会、美術館の開館時間、料金などを綺麗に色刷りした一枚の紙をくれた。

一寸時間があるので、教会 (Catedral de Santa Maria) (上左図)を訪れる。この大聖堂は、11~12世紀に建立されたもので、イタリアのロンバルディアの影響が強く表れているといわれる。西の正面(ファサード)は、簡素である。内部は、身廊の天井は高い。内陣奥にマリア像、翼廊にある2つの礼拝堂には、各々聖人達(名前は?)の像があるが装飾過剰ではなく、厳粛な宗教的雰囲気を保っている。客は私一人であった。

12時近くになり、隣接している司教区美術館 (Museo Diocesa)に赴く。ところが12時を5分過ぎても、開かない。2人連れの客が現れたが、ああこれは駄目だと帰っていった。心配になり、格子の間から中を覗くと、回廊の大工事中らしい。美術館と回廊はセットになって見られる事になっているのだ。

工事中の男に声をかけると、手を横に振っている。駄目という事らしい。

心配になって、<i> に行って(徒歩約3分)尋ねる。婦人警察官(?)は、奥の方にしたが、心配するな、その内開く。と驚いた気配はない。『そうだ、ここはスペインなのだ。気を長く持とう』と自分に言い聞かせ、美術館

に戻る。12, 3分過ぎに、中年の女性が現れて、外から鍵を開ける。

入場料には、pts と fr 両方が表示して有る。ウルヘルでは f r が使えそうだ。回廊は、工事中で入れない。先ほどの男の手の表現はこの事だったのだ。

ここで、一番有名なのは、彩色挿し絵が見事な**ベアトウス (Beatus) 本(前頁右図)**である。2階から展示があるのだが、その初めの所に展示してあった。

ベアトウス本とは、8世紀にリエバナ(スペイン・大西洋岸カンタブリア地方)の修道士ベアトによって起草された「黙示録注解」に挿絵、装飾文字を加えたもので、筆写により広がり、以後数世紀に渡ってキリスト教世界に大きな影響を与えた。その影響は、政治、軍事行動にまで及ぶ大きなものだったのだが、美術に限って言えば、例えば、エミール・マール「ヨーロッパのキリスト教美術」(上)岩波文庫によると、モワサックのタンパンの壮大な図像は、サン・スベール(ピレネー山脈西部のフランス側にあり、ここの修道院で一写本が作られた)の「黙示録」(パリ国立図書館蔵)の挿し絵が手本になったとある。

完全な写本は、世界に20有ると言われているが(ここで貰ったパンフレットによる)、ここのも名高いのである。ただガラス・ケースの中に入っていて見開き2頁しか見られない(当然だが)。



地方の教会から持ってきた壁画(その大々的な展示は、カタルーニャ美術館のものが有名だが)もいくつかあり、又**聖母子像**も数多く展示してある(上左図)。マリアの素朴な表情が良い。

**Abella de la Conca にあつた祭壇画**(14世紀)も精密な描写で且つ美しい(上右図)。ここは、明後日訪れる予定の教会である。

2階から、回廊修復の様子を見下ろすことが出来る。回廊の天井、敷石まではがした大工事であった。

美術館を見るだけで1時間近くかかってしまった。回廊も開いていたなら時間が足りない筈である。どうもここは、6~9月に来るところの様である。ベアトウス本の図版付き解説本でも有ればと思い、受付のあたりを見たが無いらしい。複製でも作れば、高くても(「金持ちの日本人」などには)売れるのではないかと思うのだが。絵はがきもその関係は3種類しか無い。それらと上記祭壇画などの絵はがきを求める。

余って持て余していた f r のコインが少し減った。結局、本日の訪問者は私一人であった。

そこからすぐのところにあるパラドールに行き、チェック・イン。この地下駐車場は、エレベータで客室階に直結しており、便利に出来ている。駐車料 1 5 0 0 p t s。

ミニバーでビールを飲み、町に散歩に出る。<i> に行き、本屋を教えて貰う。丁度パトロールに出る男女 2 人組の警察官が居て、本屋の前まで連れて行ってくれる。しかしあまり良い本は無かった。

教会の前まで戻ってくると、人が続々集まってきている。何だろうと見ていると、教会の周りが車で一杯になる。教会の鐘が 2 種類の普通よりは小さな沈痛にも聞こえる音を約 2 秒間隔で鳴らしている。やがて、黒塗りの長い車が教会のファサードの前に留まる。車の後ろから花輪を乗せた棺を運び出す。やっと、葬式であることが解った。牧師が現れて、親族に挨拶、棺と一緒に教会の中に入って行く。皆も入る。やがて牧師の話が始まり、拡声器で外にも聞こえる。私も中に入って暫く見ていた。広い教会の中が一杯である。入口近くに、はがき大の紙が置いてあったので、一枚頂き、戻ってから見てみると、カタラン語なので殆ど訳せないが、

中央に大きく 「Ma TERESA xxx xxx」 とあり、次の行に「は神のみもとで休息に入った」と書いてあるらしい。もっともスペイン語からの類推で訳 (?) しているので正確さは保証の限りではない。その上の 4 行と下の 4 行は訳せない。最後に彼女は、ウルヘルに 1 9 6 8 年 1 0 月 1 5 日生まれ、一昨日亡くなったとあった。2 0 歳台の若い女性だったのだ。

夕食は、スペインらしく、兎と巻き貝のニンニクとオリーブ煮とした。なかなか美味であった。レストランでサービスの男も女もまるでフラメンコの踊り衣装の様な格好できびきびと動いていた。その動きのちょっとした節々にフラメンコの踊りの匂いがした。

尚、カタルーニヤ人は、アンダルシア、フラメンコは嫌いなはずである。ここは国営なので、そんな壁を気にせずにやっているのか？又は、私の勘違いで、あの衣装はフラメンコとは関係が無いのか？

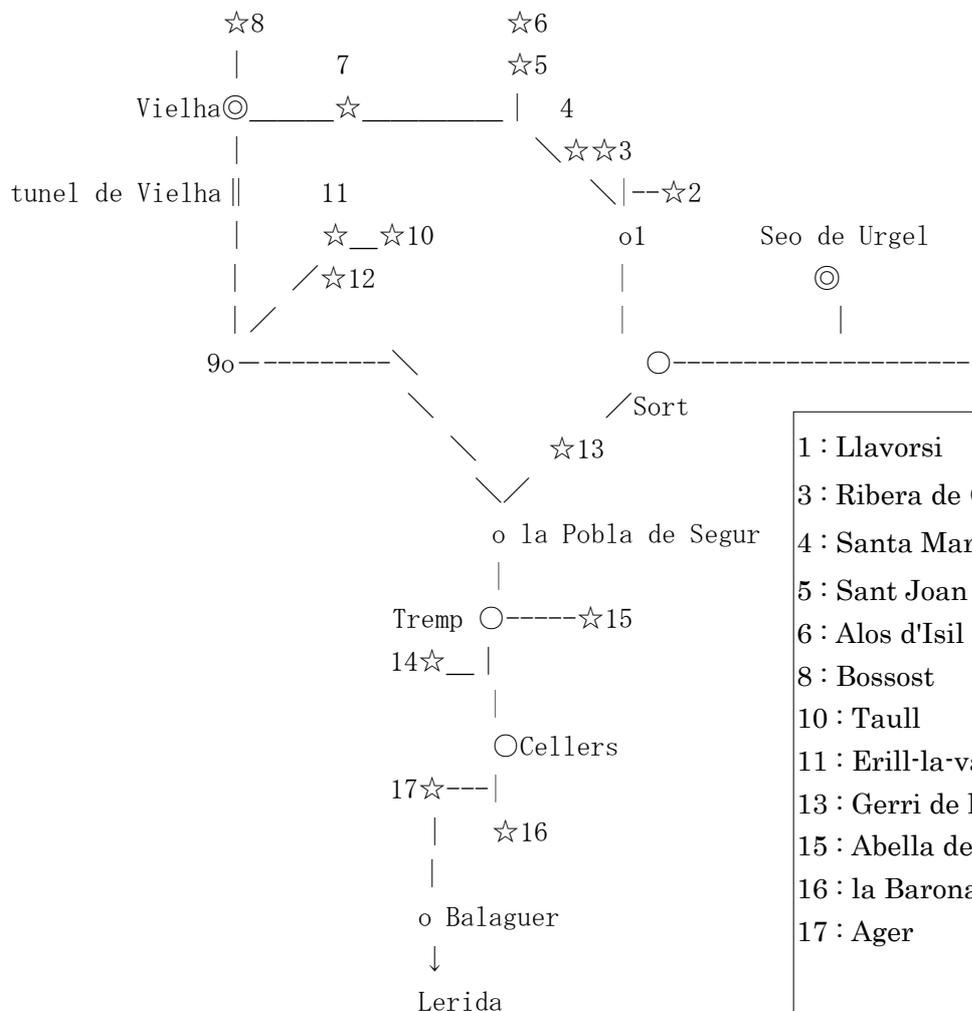
## X I . カタルーニヤ・ロマネスク ( 1 )

### 11.1 ノゲラ・パリャレサ溪谷上流、アラン谷

#### 5 月 7 日 ( 火 )

今日から明後日の午前中は、「資料 DRC」(\*)のルート 2 を参考にカタルーニヤのロマネスクの美を訪れたい。その概略図を次図に示す。

\* : "Discovering Romanesque art in Catalonia"



「資料DRC」では、ルート2で訪れるべき建物として、37カ所(数え方によっては、もっと多くなる)をあげているが、今回私が訪れたのは、その内19カ所(これも数え方で若干多くなる)と約半分である。

このあたりは、地形が複雑で溪谷添いに村々が点在していて、隣の溪谷とは咲いている花の色合いも違う。ここで簡単に整理してみよう。

- スペインの大河の一つエブロ河(タラゴナの南で地中海に注ぐ)の大きな支流セグレ河は、ピレネー北麓(フランス)に発し、セオ・デ・ウルヘルを通り流れ下って、レリダの下流でエブロ河に合流する。
- このセグレ河にレリダの少し上流で、流れ込むのが、ノゲラ・リバゴルサナ(Noguera Ribagorçana)河である。これに上記略図で9(ポント・デ・スエルト)付近で流れ込む一つの支流(ボイ谷: Vall de Boi)に沿って、10(タウル), 11, 12がある。
- 又、このセグレ河に更に上流で流れ込むのが、ノゲラ・パリヤレサ(Noguera Pallaresa)河である。これを遡ると、バラグェル、16、セリエルス、トレンプ、13、ソルトがあり、さらに上流に、4, 5, 6がある。又この流れの小さな二つの別の支流添いに2, 3がある。
- 上図で、7, 8, ビエラのある地域は、アラン谷(Vall d'Aran)と呼ばれる地域でピレネーの主脈の北斜面に位置する。この地域を流れるガロナ(Garona)河は、ガロンヌ(Garonne)河の上流で、トゥルーズを通り、ボルドー付近で、大西洋に流れこむ。

本日の宿泊は、ビエラ(Vielha)のパラドール(予約済み)である。ウルヘルのパラドールで、アラン谷への行き方を確認する。バル・ダランに行きたいのだがと言っても通じない。一寸して「ああ、バリ・ダランか」と解って貰う。一般にはカタラン語ではLLの発音は、イとなる。バイ・ダランと発音していたのかも知れない。

出発する頃から、雨が強くなって来る。ソルトへ抜けるN260は、山道で、カント峠(1725m)を越える道である。

霧が深く、ひどいところでは10m先が見えない。そんな山道が、約50kmも続き、ソルトに着いたときは、もう目と神経が疲れてしまった。小休止を兼ね、ソルトの〈i〉を訪ねる。

その若い女性は、ロマネスクには余り関心が無く、このあたりには、良いものはないわよと素っ気ない。タウルあたりが最高だという。そして素晴らしいのはリュスイ (Llessui ウィンター・スポーツで有名?) と言う。それでも私がロマネスクに熱心と見て、ここの南にあるゲリ (Gerri de la Sal のこと) は素晴らしいと言ってくれる。本日は、ここから北に向かう計画である。明日時間の余裕があれば回る計画の中に入れる事にした。



ここから、C147 を北上(12km)、Llavorsi(上図 1)で、L504 に入る。この道はすぐ、分岐し、さらに枝道になるL510に入る。周りは杏(?)の花盛りである。約8 kmほど行ったところが、アリンス (Alins)の村である。

「資料DRC」によると、「典型的なピレネーの村で、多くの小さなロマネスクの教会があるが、その殆どは、改造されているか、又は劣悪な条件に置かれている」とある。

村に入るとすぐ、村にしては立派な教会があった(上左図)。暫く眺めて居たが、これが、改造に相当する者なのだろうと、更に走ると、ちょっとした高台に廃墟になっている教会(上右図)を見つけた。名前は解らない。周りは高い岩山に囲まれ、その上の方は霧の中である。林の木々は若葉が輝き、鳥はさえずり杏の花も盛りである。下を小川(ノゲラ・パリャレサ河の支流)が流れ、その周りには馬が放牧されていた。そのような風景の中に教会の廃墟もあり、景色、雰囲気は最高であった。

分岐点まで戻り、L504 を北上する。一つ谷が違っただけなのに、色彩の感じの違いを感じることが出来る。何か少し色彩が暗いのだ。 約5 km程行くと、道の左手に教会があった。

リベラ・デ・カルドスのサンタ・マリア教会 (Iglesia de Santa Maria de Ribera de Cardos)である。(以後、Iglesia de <の教会>の表記を省略する)「資料DRC」によると、「12世紀のものだが、改造されている。扉口、バラ窓、3重の鐘楼などボイ谷 (Vall de Boi 明日行くタウルなど)のものに類似している」とある。扉口の飾りなどは年月を感じ昔のままなのだろう。 教会の裏手は、墓地になっていて、花などが飾られていた。

C147 まで戻り、それを北上する。18 kmばかり行って、Esterrí d'Aneu の町に入る。ピレネーの5万分の1の地図によると、教会は町の手前2 kmほどで、C147 からは少し離れたところにある。(ミシュランの地図<スペインは40万分の1>には、この教会は載っていない)

4, 5人連れの若者をつかまえて教会への道を尋ねる。ちょっと仲間で相談していたが、一人が教えてくれる。早口でよく解らない。しかし左を「ガウシュ」と言っていたのだからスペイン語ではない。ガウシュ=左はフランス語なのだが、全体はそれともちょっと違う気がした(確かではない)、カタラン語で左は何と言うのだろうか? それでも何とか解るのが不思議である。どうやら

サンタ・マリア・ダニュー教会 (Santa Maria d'Aneu)に到着する事が出来た。ここは、ノゲラ・パリャレサ河に出来た細長い湖の北側に広がる小さな平原の真ん中に建っている小さな教会である。隣に2, 3軒家がある他は周りは一面の草原である。

「資料DRC」によると、「11世紀のものだが、改造されている。壁画はMACにある」とある。(MACの項参照) 教会は、あまり手入れが良くないのか風情が無い。閉まっているが、扉口の小さな穴から中を覗くと、中も荒れていて何もない様であった。

## 南仏・カタロニア紀行 (第9報)

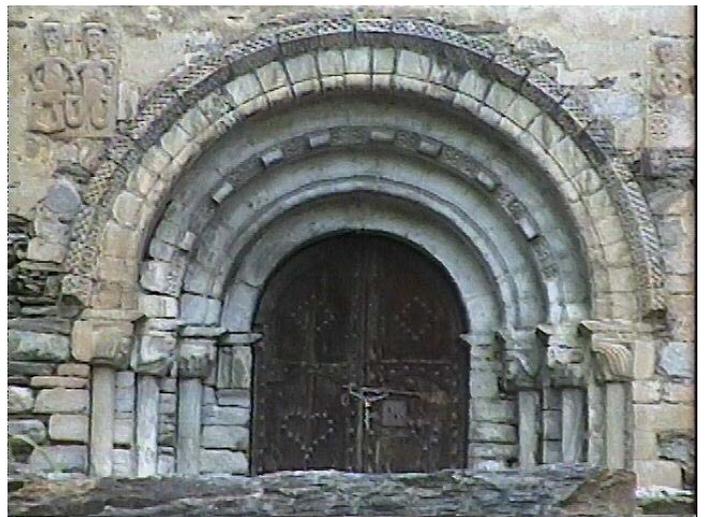
敏翁



C147に戻り、町を通り抜け更に北上する。ノグラ・パリャレサ河の渓谷は深くなり、その断崖を進む。10 kmほどで、イシル (Isil) の村に着く。溪流は、部落とほぼ同じレベルを白波を立てて流れている。その傍らにサン・ホアン・ディシル教会 (Sant Joan d'Isil) (上左図)がある。

教会の南側はかなり広い墓地になっていて、綺麗に花が飾ってある。そこに入ると教会の、扉口、軒下のロンバルト帯、その下に付いている人や動物の顔、又扉口の直上、ロンバルト帯の中に割り込んでいる楽園追放後の「アダムとイブ」の薄浮き彫り (low relief) (上右図)等が良く観察できる。

教会のすぐ横を流れる溪流の白波とその響き、墓地の白い墓石と飾られた花、ロマネスクの飾りがしっかり残っている教会、本日これまで回ってきた中で一番印象に残る風景であった。



この道を更に3 kmほど北上すると、アロス・ディシルの教会 (Sant Llisser d'Alos d'Isil) (上左図)に着く。

この教会は、溪流から少し離れた高台にある。教会の鐘楼の裏には、雪が残っている山々が被さる様に見える。教会から溪流までの緩い傾斜地は、一面の菜の花畑である。溪流の水音は一段と騒がしい。(次頁図) 教会は低い塀で囲まれて居るのだが、その門の扉が閉まっていた。やむを得ず、塀越しに教会の扉口を観察する。

ここにも、サン・ホアンで述べたのとよく似たアダムとイブの薄浮き彫り(前頁右図)があり、このものの方が、コントラストがはっきり残っている。

多分ここから出たと思われる見事な祭壇前飾り (frontal) が、MAC にある。

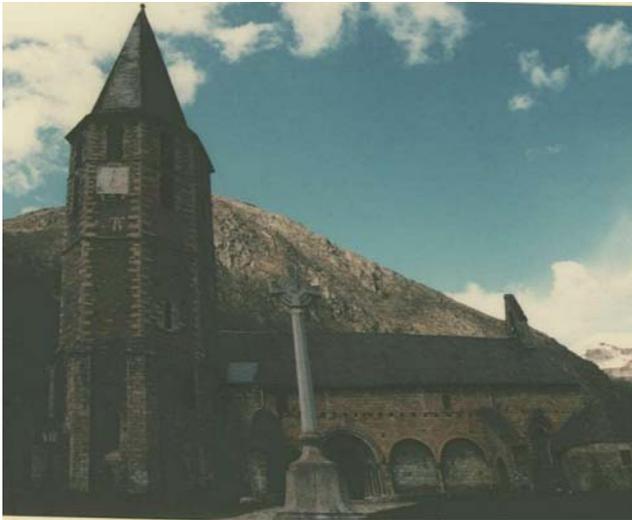


ここから C147 を戻り、途中でバイパスを使って、C142 に入り、西に進む。段々高度が高くなっていく。ボナイグア峠 (Puerto de la Bonaigua 2072m) は道の回りに相当の雪が残っていた。ここは4月に成らないと開通しないのだ。

ここから下っていくと、アラン谷 (Vall d'Aran) である。

この地方は、交通の不便さ (ボナイグア峠開通 : 1925、明日通るビエラ・トンネル開通 : 1948年) から、固有のアラン語と独自の伝統を持っている。

サラルドゥの教会 (Sant Andreu de Salardu) を訪ねる。この教会(12~13世紀)は高い鐘楼(15世紀)を持ち、村にしては立派な構造を持っている。(下左図)



教会は開いているが、客は誰も居ない。例の三脚とニコンを持ち込む。壁画(上右図)が沢山ある。それを中心に撮りまくったが、うっかりして、ここで有名な12世紀の木製のキリスト像を見落としてしまったのが残念だった。(無かった様な気もする。) 壁画は、新しいものなのか、どの解説書にも触れられていない。

ここから、アラン谷の中心都市ビエラの間、いくつか良いロマネスク教会があるのだが、疲れがひどく、ビエラのパラドールに直行する事にする。

パラドールは、町から離れ、N230 をビエラ・トンネルの方向に2 kmほど行った高台にある。構内に広い駐車場を持ち、無料である。部屋で、ミニバーのコーラを飲み、少し休む。窓からの眺望は素晴らしい。

多少元気が出てきたので、ビエラ (Vielha) の町に出て、教会のそばに車を留める。

<i> もそばにある。窓口の女性はアラン谷民族博物館訪問を勧めしてくれる。



教会 (Sant Miquel de Vielha) は12～13世紀に建てられたロマネスク・ゴシック混合形式のもの。ここも町中なのに客は私一人である。又三脚とニコン。中にあるもので、名高いものは、ミグ・アランのキリストの胸像 (Cristo de Mijaran) (左図) である。これは、12世紀のキリストの十字架降下像の一部で、かつて今は廃墟になってしまったミグ・アラン教会にあつたものである。その目をつぶった面長な顔は、深く物思いに沈んでいるようだ。そばに元の状態の復元図 (相当大きなものだったらしい) がある。

又、内陣にある祭壇画 (木製彩色、15世紀) も落ち着いた色で、雰囲気にもマッチしている。

次に、川向こうのアラン谷民族博物館に行く。ここも客は私一人。

ここのおばさんは、親切で、殆ど聞き取れないのにつきっきりで説明してくれる。

ここでは、小学校に入るとアラン語、カタラン語、カスティーリャ語 (=標準スペイン語) を習うのだそ

うだ。カタラン語と周辺の言語の関係を解説したVTRを見せてくれる。

ほとんど解らなかつたが、<i> で貰った資料によると、アラン語は、ガスコーニュ語の変形で、又カタラン語にも似ている所があるのだそうで、アラン人 (Aranese) は、困難無しに上記3言語とフランス語を切り替えて話せるらしい。

この博物館には、アラン谷の人工衛星からの写真から始まって、地理、歴史、言語、民俗に関する資料が豊富に展示してあった。併し館内表示、パンフレットも英語はいっさい利用できない。

パドールで夕食。ワインはスペインの赤。一口呑んだ感じが、フランス南部の AOC グレードと比べて「あかぬけ」ない感じである。しかし、これは3口目位からは解らなくなる。メインは、子牛のステーキ。これはよかつた。

## 5月8日 (水)

### 11.2 ボソス、ボイ谷(タウル)、ノゲラ・パリャレサ河中流

午前4時頃目が覚め、ミニバーから小瓶のビールを取り出し、コップに注ぐ。泡が出ないのがおかしいなと感じつつ一口呑んで驚いた。ただの水なのだ。誰かビールを呑んだ後、水を入れて勘定を誤魔化したのだろう。しかしもっと悪い悪戯の可能性もあり、心配になってくる。

今日の計画の整理などで時間を過ごし、レセプションの業務開始一番に文句を言いに行く。窓口の40歳位の女性は、平然として「払わなくていいわよ」と言うだけである。お互いの英会話力ではこれ以上折衝もしにくい。癪にさわったので、前日呑んだコーラの代金も申告せずに精算する。さっきの女性が、ミニバーはと聞くので、「さっき言ったろ!」と言い放ってやった。

支払いも、カード読取機の故障、プリンタの故障と手間取る。手元控えも出てこない。コピーで良いかと聞かれてので、OKすると、何と A4 の紙の片隅に小さくコピーされたものを渡すのである。何かは抜けている。

一つ勉強に成った事は、ミニバーの瓶ものは、シールの無いものは注意が必要と云う事である。そう言えば、全

部記憶しているわけではないが、フランスの瓶ものは、大体シールがあったような気がする。

今晚は宿泊の予約は無い。明日の晩以降、タラゴナ、それ以降バルセロナに2泊は予約してある。その後帰国だ。今日は見たいところが多いのだが、時間を見ながら訪問し、バラゲルのあたりまで行けると良いのだが。



先ず、N230 をフランス国境の方向へ16 kmほど北進すると、ボソスの村に着く。国境まではあと

10 kmだ。この町の教会 (Era Assumpcion de Maria de Bossost) のそばに駐車する。

この教会(12世紀)は、マリア被昇天に捧げられたもので、アラン谷の宗教建築の最も良い例である。鐘楼もアラン谷で最も古いものとされている。南扉口には、キリストをXとPで表した簡素なタンパン(左図)がある。

ゾディアックによると、この様な象徴性がアラン谷のロマネスクの基本であり、昨日のサラドゥのキリスト(うっかり見逃したが)、やビエラのキリストは、他から来た親方の仕事と思われる

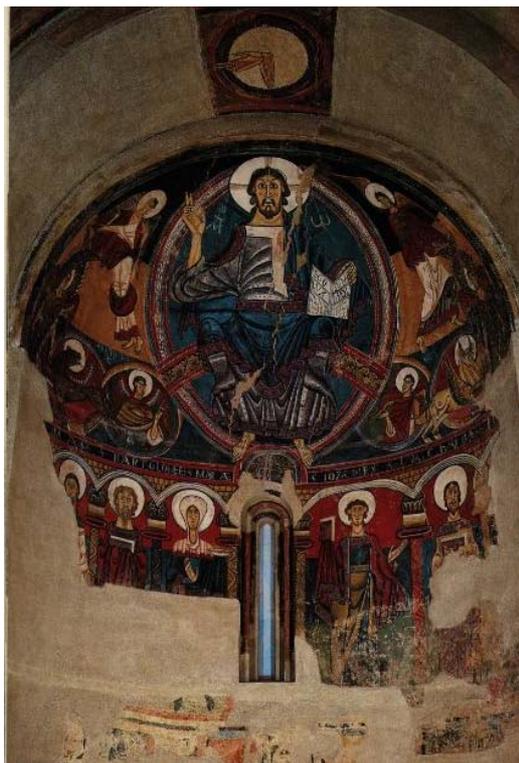
としている。

ここも、客は私一人である。ここは、オリンパス・μでフラッシュ撮影する。栄光のキリスト、十字架上のキリスト、「マリアとキリスト」2像などはなかなか良いものに見えたが、解説書には記述が無い。

今来た道に戻り、パラドールの脇を通り抜けて南進すると、やがてビエラ・トンネルに至る。沢山のトンネルがあるが、一番長いのが、5 kmある。

### タウル

ビエラから40 kmの Pont de Suert の少し手前で左折し、ボイ谷(Vall de Boi)に向かう。その一番奥のタウル(Tauil)迄約20 kmを一気にドライブし、サン・クリメント教会(Sant Climent)の脇に駐車する。



周りの木々はやっと芽が吹き出してきたところで、もう少し緑が濃くなった時が最高の様な気がする。  
(「資料 DRC」表紙のカラー図版は、新緑のサン・クリメントで、その美しさが私を「ルート2」に引きつける最初の誘因となった(上左図))

この教会(1123年奉献)は、6階の鐘楼の美しさと、中の壁画(同じく1123年、MACにある)、特に「栄光のキリスト」(上右図:MACにあるもの)の力強さで有名である。

本物には、明後日にバルセロナでお目にかかる予定だが、此处にも復元されていると知り、それも見たい。しかし、教会は閉まっていた。見たい人は、xxxxxへ電話してほしいとの張り紙が貼ってあった。

(ミシュランによると、7月~9月は普通に開いているらしい)

教会の脇のカフェに行って、その女性に片言のスペイン語で頼み込み、鍵番の人に電話をかけてもらう。「セニョーラがもうすぐ来るよ」と云われて、電話代+チップを渡し、教会の入口で10分も待たろうか、待ちきれずにさっきの女性に確認するが、「もうちょっと待って」と云われる。

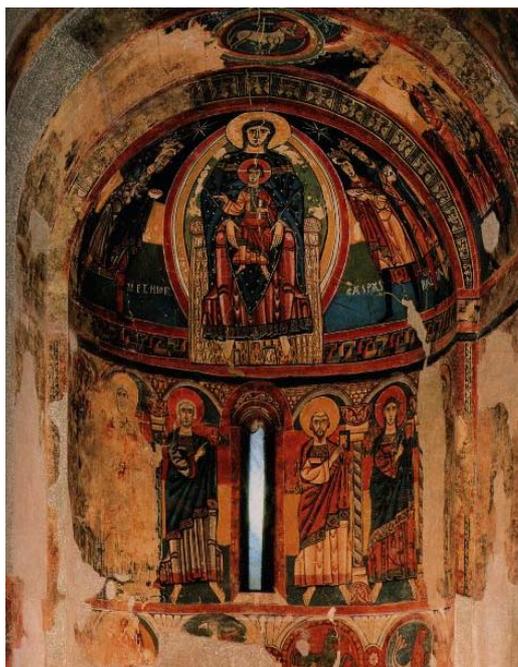
どうしてもせっかちな日本人から抜け出せない。

それから、5分位たって、上品な60台の女性が鍵を持って現れた。

内陣の「栄光のキリスト」とその周辺、下部の模写による復元がある。MACには、上部に有名な「神の右手」とか、さらにその上に黙示録の7つの目を持つ子羊とかがあるのだが、それらは模写されていない。

側廊に、いろいろなものが置いてある。大きくて立派なものとしては、祭壇飾り(多分バロック?)があった。彼女に許可を貰ってVTR撮影する。

彼女に感謝の意味を含めて、「ボイ谷のロマネスクと国立公園」と云う小冊子(48頁 1000pts)を購入した。



この教会は、村はずれにあり、より高いところに集落がある。その中にタウルのもう一つの傑作、サンタ・マリア教会(Santa Maria)がある。

サン・クリメントからも、その鐘楼が見える。サンタ・マリアから30mばかりの処に駐車する。教会の周りは大工事中。これは教会とは直接関係は無いらしく、集落の再整備なのか?

この教会も1123年に奉献されている。

ここの教会は開いていた。訪問者は私一人。ここも内陣だけ模写復元されていた(本物はMACにある)。この壁画(上左図)は、公現祭(キリストが東方三博士<Magi>に神性を現した日を祝う祭日、1月6日)を表している。中央にはキリストを抱いた「荘厳の聖母」が鎮座し、周りにマギたちが立っている図である。フラッシュ・撮影する。

この教会のある高台から見下ろすサン・クリメントの鐘楼を含む景色もなかなか良い。(上右図)

サン・クリメントのそばを通過して戻ったのだが、彼女は扉を開けて訪問者を待っているようだった。本日何人くるのだろうか？

来た道をもう少し戻った所に、ボイの小さな村と**教会 (Sant Joan de Boi)**がある。ボイ谷の名はここから採ったのだが、小さな教会で、且つ窪地の様なところに建っているため、眺めがあまり良くない。ただ横にある墓地は非常に広がったのが印象的だった。教会は閉まっていた。

この壁画も MAC にある。「聖ステファンの石打ち」(1100年頃)の画のダイナミックな表現は有名である。

更に来た道をもどり、エリル・ラ・バル村の**教会 (Santa Eulalia d'Erill-la-Vall)**に寄ってみる。ここは、教会の大改修工事中だった。屋根も全面的な改修中で、真新しい木口の軒が見え、屋根のスレートの張り替えに3人かかっていた。又教会の内部も工事人が入っていて、覗いてみたがセメント、石の粉まみれになっていた。教会の軒下なども、彫刻のある石は古いものを生かしていたが、殆どは真っ白な新しい石で敷き詰める作業中だった。修復後はどんな姿になるのだろうか？

この有名な彫刻「十字架降下」は、現在 MAC とビックの「司教美術館」に分離されて保存されている。

これで、ボイ谷は終わりにして、N230に戻り、Pont de Suert を少し過ぎたところで、N260に入る。途中、ペルベス峠 (Coll de Perves 1325m)は眺めが良い。40kmばかり進んだところが、la Pobla de Segur の町である。この町はかなり大きな町で、非常に美しく装飾された町役場があり、<i>もそこにあるのだが、休み時間だった。

ここから N260 はノゲラ・パリュレサ河沿いに北上していて、28kmでソルトに至る。その途中、ここから16kmのところに、昨日ソルトの <i>の女性が勧めた**ゲリ**があるのだ。



日差しが強く、非常に暑くなってきた。ゲリへ行く道の途中で一休みする。子羊の骨付き肉の焼き肉とサラダとビールとコーヒーで、1250pts。

**教会 (Santa Maria de Gerri de la Sal)**は、河の対岸にある。橋のたもとに駐車し、橋を渡り、ポプラ並木の中を教会に向かう。この教会は大きい。1149年に奉献されており、その後改造されている。建物の石は時の流れとともにさまざまに、変色、崩れを見せるなど古色が付き、誠に趣がある。**(左図)**

前を流れるノゲラ・パリュレサ河もここまで来ると白波は立っていないが、まだ相当の急流で且つ水量も多くなり、水音は上流で聞いたのとさして変わらない。

教会は閉まっていたが、南側の墓地に入ってみた。この土地は裕福なのだろう。何軒かの家は、思い思いに大きな美しい石造の納骨堂(?)を墓地の中に設けていた。

又、墓地の中に、黒い十字架に針金細工のキリストが架かっているアブストラクト風な像が建っていた。

古色のある教会、白く大きい納骨堂、モダンなキリスト像、その対照が面白い。

la Pobla de Segurに戻り、C147を15kmほど南下するとトレンプ (Trempe)の町である。トレンプはこの「地域」(Pallars Jussa)最大の町である。

尚この「地域」(タカルーニヤは40以上の「地域」に別れている)は日本の郡にでもあたるのか？。アラン谷もこのような「地域」の一つであるらしい。ボイ谷を含む「地域」はAlta Ribagorcaと呼ばれ、最大の町はPont de Suertらしい。又、ソルトを含むゲリ、アリンス、イシル等はPallars Sobiraと呼ばれる「地域」に属している。Pallarsは、郡とか何かを意味するのだと想像出来るのだが、カタラン語なので解らない。この分割が私たち観光客から見ると細かすぎ、セクショナリズムに陥っているのではないかと思われる節がある。

ちょっと脱線気味だが、トレンプの町の話に戻る。<i> でホテルを紹介して貰おうと思ったのだが、休み時間だった。比較的近くにあるムル (Mur)に行って又ここに戻ることにした。

トレンプの町を出て C147 を 8 km 程南下、表示に従って山道に入る。ムルは、この入り口から直線距離では大したことは無いのだが、谷の向こう側にあり、大回りでアクセスするのに 15 分以上かかった。高台の上に城 (11 世紀) の遺跡がある。これはカタルーニヤのロマネスク・非宗教建築の傑作とされている。中に入って見た。古いのに石組みなどはさほど崩れずに良く残っている。(改修されているのか?)

100m ばかり離れたところには、教会 (Santa Maria de Mur 11 世紀) がある。その周りは高い塀で囲まれていて、門はしまっている。教会の上部と鐘楼が見えるだけだった。

ここの多くの壁画は、ボストンの美術館と MAC にある。

トレンプの <i> に戻る。先ずこの「地域」(Pallars Jussa) のパンフレットを貰い、次にホテルを紹介して貰う。ここから南約 11 km のセリエルス (Cellers) に 2 つホテル (いずれも 2 星) があり、そこは湖畔で景色も良いと勧めてくれる。次に、アベリャ・デ・ラ・

コンカ (Abella de la conca) への行き方を聞く。ここの女性 (30 歳台) は元気が良い。てきぱき応答してから、あんたは日本人かと聞く。そうだと云うと、「どうも日本人の英語は聞き難い」とぬかす。ちょっと失礼な女だと思ったが、後で考えてみると、私のヒヤリングのミスで「どうも日本人は解りにくい」と言ったのかもしれない。いずれにしても、教会の鍵番の男に「日本人が行くよ」とでも電話連絡していた可能性が大いにある。

トレンプから C1412 を東進、19 km のところにあるイソナを通り抜け、表示に従って田舎道に入る。そこから貯水湖をまわり、山道を進むと、岩山の斜面に教会 (Sant Esteve d'Abella de la Conca) の鐘楼が見えてくる。(上図。矢印が鐘楼)

その風情が何とも言えず、美しい。

今回、「資料 DRC」のルート 2 の中で、「資料 DRC」中の写真から評価した風景の良さで付けたランキングのベスト 3 は、次の 3 つである。

- 1 タウルのサン・クリメント
- 2 ここ アベリャ・デラ・コンカ
- 3 明日行く予定の ラ・バロニア・デ・サン・オイスメ

それで、タウルは別としても、これらには是非行きたいと思っていたのだ。

教会の近く、行き止まりまで車を入れると、60 がらみの背の低い小難しそうな顔つきの色眼鏡の男が現れ、車の留まる場所を指示する。次に男は、鍵を持って教会に案内してくれる。どうも私を待っていた様な気がした。それで <i> の女性からの電話連絡を想像してみたのである。

山の斜面の小さな平地に建つ小さな教会である。「資料 DRC」にも建てられた時期については、何の記述も無い。中は、誠に簡素で、内陣に小さなマリア像と小さな十字架上のキリスト像が飾ってあるのみであった。

教会を出るとき、彼の手に 500 pts を握らせる。突然、にこやかな顔になった男は、帰りにそっと手の平を



開いて、確認していた。

「ウルヘルの司教区美術館」の立派な祭壇画（14世紀）はこのものである。ただ祭壇画が立派すぎて本当にこのものか、多少心配が残る。

帰りはトレンプまで行き、そこで C147 に入り南へ 11 km、この道路沿いに **Hotel El Terrades**（2星）があり、ここにする。

ここは、ノゲラ・パリャレサ河をせき止めて作ったセリエルス湖の湖畔にあるリゾート・ホテルの様なものである。ホテルの窓からは、視野いっぱいに湖がひろがり、降り始めた雨に湖面が細かく、震えていた。

ホテルで夕食。メインは鴨料理、赤ワインは、リオハ（Rioja）である。

いずれも muy bien (= very good) であった。

## 南仏・カタロニア紀行（第10報）

敏翁

5月9日（木）

### 11.3 ノゲラ・パリャレサ河下流、レリダ、ルート3

上記の「ルート3」とは、「資料DRC」のルート3の事であり、後に詳しく説明する。



ホテルから C147 を少し南下すると、セリエルス湖は終わり、ダム、水力発電所がある。さらに 4 km ほど進むと、深い谷の底が川幅が広がって湖の様になっている。（この十数 km 先でセグレ河と合流する）

湾曲した湖の水面の向こう岸の高台の上に、高い円塔が朝日に輝いて見えてくる。

La Baronia de Sant Oisme の古城の塔である。

(左図)

城までは車道らしい道は無いのだが、強引に車を塔の麓まで乗り入れる。城は修復の大工事中で、建築道具、コンクリート・ミキサー等が

散在し、足の踏み場も無いと云った様子であった。その脇に小さな小さな教会 (Sant Bartomeu 小鐘楼付き) が建っていた。

ここは、湖を含めた遠景を眺めて楽しむ場所である。

この湖の上流、始めの所まで戻り、橋を渡り、L904 の田舎道に入る。しばらく湖の対岸を走るが、さっきの古城の塔が、見え隠れするのが楽しい。

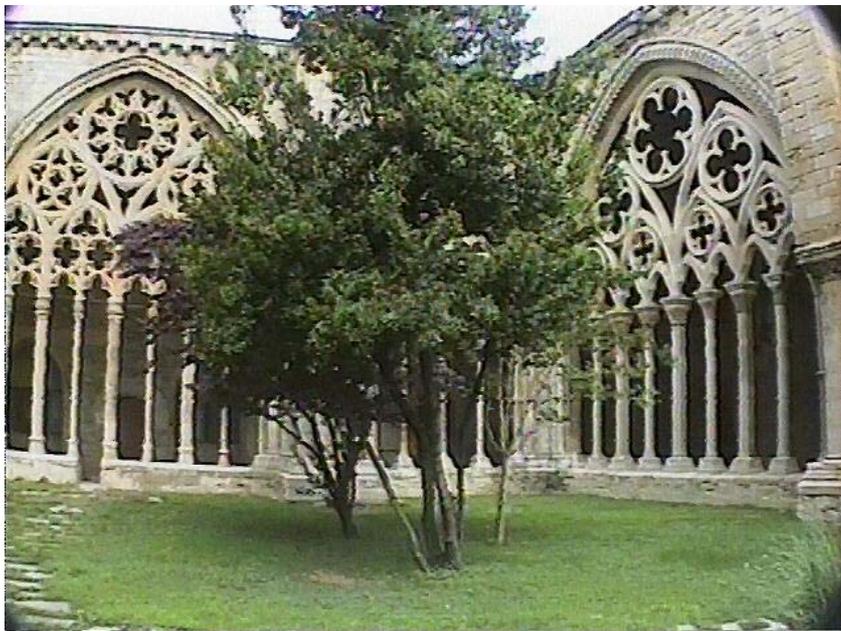
やがて、広い平原の中を走るが、道の両側は、赤い罌粟(?)の花でいっぱいである。押し花用に1,2本手折った。7,8 km 走ると道の行く先の丘の上に、城塞都市アヘル (Ager)が見えてくる。ひときわ高く聳えているのは、教会の鐘楼であろう。町に入り、教会に近づいたと思われる所に駐車し、迷路の様な道を登っていく。すると教会のそばの小さな広場に出た。そこに犬がいて吠えたり大迷惑した。教会はここも大修理中で鐘楼には工事用の櫓が架けてあった。この教会 (Sant Pere d'Ager)の壁画も MAC にある。

帰り道は、さっきの犬が道の真ん中に頑張っていて通してくれず、回り道をする。

ここからは、一気に L904 を南下、35 km ほどで バラゲル (Balaguel) につく。  
この教会の遺跡 (Santa Maria de les Franqueses 12-13 世紀) は、丘の上に見えているのだが、アクセス出来ない。何回かトライした後、進入禁止の細い道に入って強引にアクセスを試みたのだが、周りが高い塀で囲まれていて結局諦める。帰ろうとすると、進入禁止の入口の所に梯子を置いて何かやっている。暫く待っていると、気が済んだのか、「あかんべ」をしながら、進入禁止の標識を指さして、お前の目は見えないのかと言いながらも、通してくれた。「あかんべ」は、注意してよく見ろと言う意味のジェスチャーとして、こちらでは一般的な様で、実はその後もう一度やられている。

ここから レリダ (Lerida) までは、28 km である。レリダは、カスティーリャ語であり、カタラン語では、リエイダ (Lleida) である。ここは、人口約12万人、西カタルーニャの大都市である。

丘の上の 旧大聖堂 (Seu Vella : カタラン語) の外壁のそばに駐車する。そこから聖堂入口まで300mはあろうか。広大な敷地である。この町は古くから要塞で、カエサル軍とポンペイウス軍がここで対戦したと云う歴史もある。聖堂は、13世紀にイスラム寺院の跡地に建造されたものである。



聖堂内部は広くて明るい。内陣前いっぱい小学生が広がって大合唱中であつた。この若い清らかな歌声が、穹窿に響くのを聞いていると、スペインのカトリックは、しばらくは健在だろうという予感がする。

教会内の柱頭には、実に多様な人物像が巧みに彫刻されている。小さな礼拝堂 (Sant Tomas Chapel) には、13世紀の壁画が綺麗に残っている。

回廊は、完全にゴシックである (13~15世紀)。  
その大窓の大きさ、飾り格子の多様性と繊細な美しさには驚いた。(上図)

南廊下の外側は、開かれていて、町を見下ろす素晴らしい展望台になっている。

これは、カニグーの所で述べた様に、回廊の本義には悖るものだが、やはりこの方が人間性には合っているように思う。

## ⅩⅡ. カタルーニャ・ロマネスク (2)

これから明日の午前中迄は、「資料 DRC」のルート3を参考に回ってみたいと思う。ルート3は、時間の関係と、疲労も溜まっているので、重点をカタルーニャ地方のシトー派の「三位一体」をなすと言われる、ポブレ、サンタス・クレウス、バルボナに置き、あと2,3カ所回りたいと思う。

(実際は、「三位一体」の他はカラフェルしか回れなかった。)  
その関係位置を次頁に示す。

Valbona de les Monges

☆

(Lerida) <--

Poblet ☆

☆ Santes Creus

Calafell

Tarragona ◎ ----- ☆ ----- > Barcelona

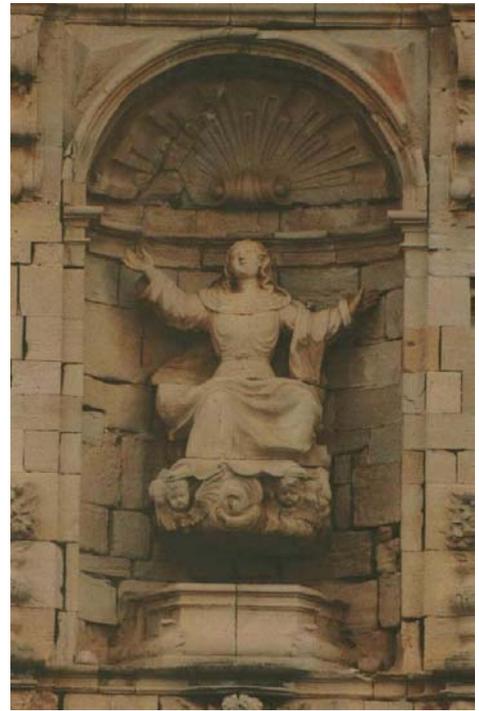
南西 <-----> 北東

地中海 Costa Dorada

「資料 DRC」では、ルート 3 で訪れるべき建物として、18カ所（数え方によっては、もっと多くなる）をあげているが、今回私が訪れたのは、その内 5カ所に過ぎなかった。しかし、「資料 DRC」はこのルートの特徴として、シトー派の修道院と騎士団寺院を挙げる事が出来るとしているの、その前者は十分見たことになると思っている。

カタルーニヤには、古くから隠修士の僧院があり、11世紀にはオリバによってモンセラ修道院（ベネディクト派）が創建されていた。12世紀中頃、カタルーニヤのイスラム勢力からの奪取が完全になり、「新カタルーニヤ」（バルセロナから南へ伸びた地域でタラゴナの周辺や更に南のトルトサ<1148年奪取>やレリダ<1149年奪取>を含む）と名付けられた地域も定着した。丁度その頃、シトー派は、急成長期に入り、発展の新天地を求めていたのである。これが、旧カタルーニヤに多くのベネディクト派の修道院があり、新カタルーニヤにシトー派の修道院とテンプル騎士団のような新しい軍事的教団が広がった主な理由である。シトー派の大立者・聖ベルナルがテンプル騎士団に強力な援助を与えた事は良く知られている。

### ポブレ修道院



レリダ町を出、N240 をタラゴナへ向かって走る。50 kmばかりの所で標示に従って左折すれば、ポブレ修道院 (Monestir de Pblet) は近い。

外側の門を入った所に駐車する。広場にはカフェテリアなどがあり、ここかしこに20～30人の訪問者が午後の訪問開始（午後3時）を待っていた。その奥にある次の門の脇に窓口がある。

その奥が、又広場になっていて、正面に見えるバロック様式の華やかな正面（旧扉口）、その後ろに聳える多数の鐘楼、頂塔（lantern: 英語）など実に豪華絢爛たる構えで人を待ち受けている。この修道院は、ヨーロッパに現

存するシトウ派修道院の中で最大規模のものだと言われているだけの事はある。 (前頁図)

この修道院は、カタルーニャ地方を、モロー人から奪い返した Raymond Berenguer IV が、修道院を創設し、1150年フォンフロアドから12名のシトウ派修道僧を招いた時に始まる。

歴代のアラゴン王はこの修道院を庇護し、国王たちの霊廟とした。

我々は、旧扉口の左にある城塞の様な門構えの入口から入る。ここはガイド付き訪問に成っている。中年男の案内者は、説明をスペイン語、フランス語、ドイツ語で繰り返す。英語は出来ないのかと聞くと、出来ないと言う。それでも気にして居ると見え、たまに「これはキッチン」とか極く短い言葉をかけてくれた。あとで、他の訪問者の質問に英語の要求は少ないのだ、ちゃんと統計は取ってあるのだと答えているようだった(大体意味が解った)。

初めに奥行き50mもあろうかという地下のワイン貯蔵所の大きさに驚いた。

回廊(12~13世紀)も大きくて(40m x 35m)、窓飾り、柱頭はレリダほどの華やかさは無いが、見事で且つ気品がある。中庭に突き出しているシトウ派らしい洗面所も豪華な作りである。

教会内に入って驚くのは、歴代のアラゴン国王とその王妃の遺骸が収められた雪花石膏の墓(その正面に彼<女>らの像が浮き出している) (右図) がいくつも頭上3mばかりの処に横たわっている事である。こんな光景は初めて見た。



主祭壇の祭壇衝立(retablo:スペイン語)は、16世紀の壮大な彫刻作品で内陣全体を天井付近まで埋め尽くしている。

ここも、ステンド・グラスはフォンフロアドほどではないが(それほど新しくは無いのだろう)、やはり聖ベルナルの考えから見ると美しすぎると思う。

見学の終わりは、中に設けた博物館的な部屋で、この歴史、修復の様子などの展示がある。それを見ると、ここも1835年以降一旦廃墟になっており、そのときの惨状はひどいもので、相当な修復の末、やっと現状があるのだと云う事が良く解る。

終わり頃、案内の男が、良い英語の解説書を見つけたと言って、広げると41 x 77cmになるパンフレット(カラー一冊多数入り)、題して「The Cistercian monasteries in Catalonia Poblet, Santes Creus and Vallbona」をくれた。親切な男だ。これは、大いに参考になった。

本日は、「三位一体」のもう一つを回って、タラゴナに入る事にする。少し迷ったが、サンタス・クレウスより多少近いバルボナにする。

### バルボナ女子修道院

一旦 N240 に戻り、タラゴナ方向へ6kmばかり行ったところで、C240 に左折する。10kmほど行ったところで、標示に従って田舎道に入り、大凡10km位進むとバルボナ (Vallbona de les Monges)の村である。 女子修道院 (Monestir de Santa Maria de Vallbona)は、村の狭い路地の奥にあった。

ここは、1157年に設立され、シトウ派女子修道院となり、現在も約30名の修道女が集団生活を送っている。此処まで来ると、急に訪問者の数が減り、私が案内所に着いたとき、一組の夫婦が帰るところであった。後は私が入って暫くして1名、私が車に戻った時に一台の車(これも一組の夫婦)が到着と云った調子であった。

案内所で、英語のパンフレットを尋ねたが、無いという。

先ほどポブレで貰った資料を持って一人でぶらぶら見て回る。

回廊は、ポブレより古色が付いて趣がある。それはここが、廃墟になったことが無い為であろう。廃墟を大幅改修すると、どうしても古色を残すのが難しいのであろう。

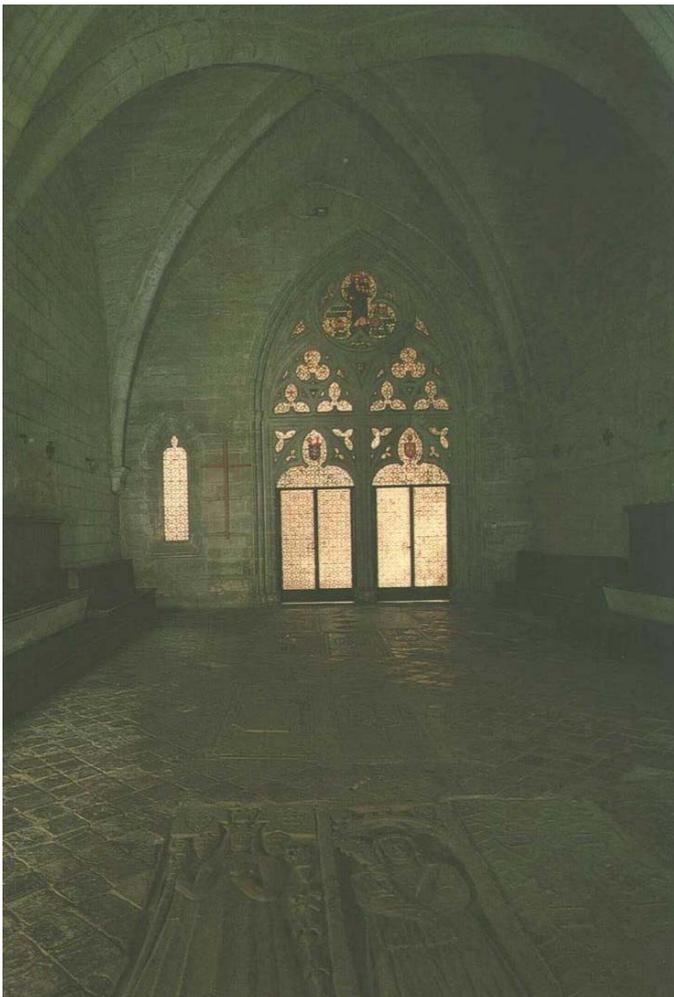
又これには、次のような事も関連があると思う。それはこの間、教育TVで放送していたが、修復の考え方で、日本では古色を極力残す事を重要視するのに対し、ヨーロッパでは制作時に戻す事を重要視するという違いがあるらしい。

そしてこの回廊も、バラエティに富んでいる。南側(12-13世紀)はロマネスクで、柱頭は簡素である。東側(13世紀)もロマネスクだが、柱頭の装飾化は進んでいる。北側は完全なゴシックでアーケードは多様な窓飾りで装飾されている。西側は、15世紀の作だが、ロマネスクの模倣である。

南側回廊りの外に連なる扉の一つを開けてみたら、そこは老修道女の生活の場であり、あわてて扉を閉めた。次に回廊の南東の隅にある階段を登りかけたら、今度は中年の修道女につかまって、出口はあっちよと云われた。観光場所の極く間近で修道生活が行われているのだ。

教会の中は、実に簡素である。ここで初めてシトー派らしい(私が勝手にそう思っているだけかも知れないが)シンプルなステンド・グラスに出会う。

**参事会室 (chapterhouse)** : 英語) は14世紀・ゴシック形式のもので、落ち着いた雰囲気である。その中で回廊に繋がる扉口のステンド・グラスだけが、全体としてはシトウ派らしい細かい薄茶色の模様で構成されているのだが、一部にわずかに色ガラス(キリストを抱いたマリア像など)を用いていて、この古色に満ち満ちた修道院の中で、此处だけに僅かに鮮やかな色が存在する事のインパクトは、目を洗うばかりである。



(左図)

帰りに、窓口にいた男は、ポブレで貰ったものと違う英語の解説パンフレットを探してくれていて手渡してくれる。

私が、ポブレ、フォンフロアッドと見てきたが、それらのステンド・グラスはシトー派本来のものではない。ここで初めて本来のものに出会った気がする若干お世辞を含めて言うと、彼はにこにこしながらも、若干困った様な表情をしていた。

ここで貰った資料(拡げると48.5 x 60 cm)は、体裁は全く異なるのだが、中の文章は全く同じものであり、写真も殆ど同じもの(大きさ、レイアウトは全く違う)だった。違いはポブレのものでは、パンフレットに占めるバルボナの面積が、他の2つに比べて狭いのに、ここで貰ったものは3者を同じ面積で扱っている点(文章は同じ)だけだった。

### タナゴナ

これで本日の訪問は終わりにして、タラゴナのホテルに向かうことにする。

バルボナより来た道に戻り、N240に入り、21kmで**タナゴナ (Tarragona)**の町に入る。<i> がなかなか見つからない。その内、ホテル群と云う標示を見つける。Rambla Nova 通りで、ホテルが並んでいる。しかし3回ほど窓の外をゆっくり見ながら(時々後ろで警報を鳴らされながら) 走ったが、見つからない。道は混んでいて道ばたは駐車一杯である。やむを得ず地下駐車場に車を入れて、徒歩で

ゆっくり探そうとその入口に近づいた処にたまたまパトロール中の警察官が居たので、ウィンドウを開け、大声でホテルの名前を云うと、彼は英語が達者で、行き方を要領良く教えてくれた。



**Hotel Imperial Tarago**（4星）で、Rambla Villa（旧ランブラ）の海岸沿いの「高級ホテル」である。先ほどの通りの二つ先の通りであった。

ホテルの前が小さな広場になっていて、駐車が一杯だが、どうやらもぐりこませる事が出来た。こういう時はサブ・コンパクト車は便利だ。

ホテルの窓からの眺めは、眼下には大きなローマ時代の遺跡（円形闘技場）（右上図）があり、その先には地中海が広がっており、目を左に点ざると丘の上にカテドラルなどが見え（左上図）、素晴らしい。

ホテルで夕食にしたが、4星にしてはお粗末だった。魚のスープ（Sope de Pescado）は塩辛過ぎるし、ポークカツは塩味しかない。ワインも頼むと銘柄も聞かず、タラゴナ産の地酒を持ってくる始末。

もともと、値段は安い。夕食全部で2450ptsにしかならなかった。

このホテルの性格が今一つ解らない。

## 5月10日（金）

タラゴナは、古代の遺跡の豊富な処である。教会の開く（10時）前に、一名「悪魔の橋」と呼ばれるローマ時代の水道橋を訪ねようとした。ミシュラン・グリーン・ガイドに依ると、ランブラ・ノバから町を出て4kmで見えてくるとある。簡単に行けると思ったのが大間違い。何回トライしてもそれらしい処に行けない。その内自分の場所が解らなくなり、結局諦めて市内に戻った。教会のそばは、旧市街で道は迷路の様になっており、適当な処に駐車して、道を聞きながら教会（Catedral）にたどり着く。

このカテドラルは、ローマ時代の遺跡の上に建てられた。その一部は回廊の一部に見ることが出来る。教会は1331年に奉献されている。

教会内は暗い。ここの内陣には、立派で大きなリタブルがあるのだが、工事中で、トラックが入り、荷物の揚げ降ろし中なのかアイドリング中。リタブルの前にも櫓を立てて工事の音もやかましい。

翼廊よりファサードよりの身廊、側廊の殆どの柱に、計18枚の「つづれ織り」（17世紀）が架かっている。世俗的な絵柄が多く、面白い。

側廊の奥や翼廊などには、多数の礼拝堂群があり、制作年代（14～19世紀）により、ゴシックから

バロックと各様式の展開を見ることが出来る。

回廊（12世紀の終わりから13世紀の初め）は大きい（45m 角）。建築の基本はゴシックだが、彫刻にはロマネスクの伝統も残っており、又アーチの丸窓の模様などには、イスラムの影響も見られる。



付属の司教区美術館を見る。展示品も多く、立派な美術館である。

私が、一番面白いと思ったのは、ここにも多くの聖母子像（13～14世紀）があるが、その中にある2体のキリストに乳を与えているマリア像である。（見るのはここが始めてである）いずれもマリアは豊満な乳房（そこだけ衣服に穴が開いている）をキリストの口に含ませていた。(左図)

### サントス・クレウス修道院

ここまで時間に取すぎてしまったためと、この町の迷路を走って目標を探す自信が無くなったため、タラゴナ探索は諦め、サントス・クレウスに向かう事にした。

昨日通った N240 を 21 km ほど戻り、C246 に入る。それを 7 km ほど走り T213 と云う田舎道を 7 km ばかり走るとサントス・クレウスである。

堀の外に駐車、小雨が降ってきたので傘を持って門（バロック）に入る。そこからは、細長い石畳の広場になっていて、両側は商店街になっているが、その高さも統一され、その奥にある教会の建物と、色調までもマッチしている。と云うのもこれらは昔は、修道院の一部だったのだ。

商店街の奥に見える教会は、大きな細長いステンド・グラス窓を持ち、上に銃眼を備えた西正面の他は、殆ど見えず、ポブレの華やかさとは全く違う印象を与える。

西正面を左に回り込んだ所に入口がある。ここでは、この歴史、見学巡などを要領良く纏めた英文の資料を貰ったので、それに従って回った。

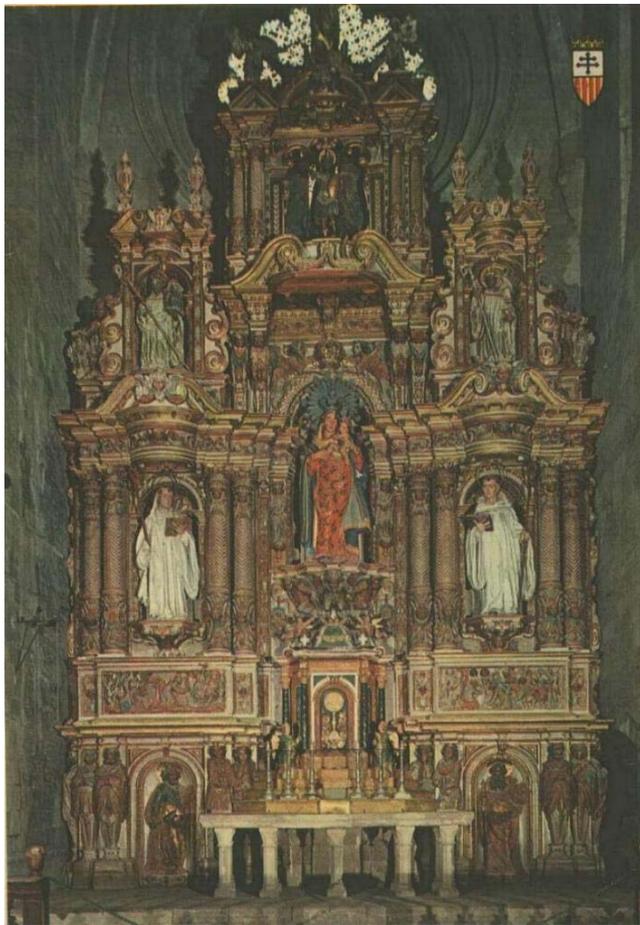
この修道院 (Monestir de Santes Creus)は、ポブレに少し遅れて建てられた。但し、ここで貰った資料には、修道院の設立は、ポブレより早いと書いてある（早いと云っても1年位、且つ初めは場所も違う）。

ここも歴代アラゴン王から寵愛を受けた（ポブレほど強くは無い）。それで、何人かの王と一族の墓がここにある。小学生の一団が入っていて賑やかである。

教会（1174年着工）内に入る。ここも西正面のステンド・グラス、後陣のばら窓が美しすぎる。

内陣の祭壇飾りは立派で、ばら窓の一部を隠すほど大きい。(次頁図)

「古い回廊」は、かなり大きなものであり、周りを何の飾りも無い石組みのアーケードで囲まれていて、中庭に植えてある数本の糸杉とともに、落ち着いた簡素な美しさを見せている。これは、今回の旅行の範囲で言えば、エルネ（ロマネスク）、レリダ（ゴシック）の技巧の極致とも言えるものの全く反対の極にあるものだと言えよう。



雨は、ますます激しくなってきた、小学生は、外に出られず、窓口のそばで雨宿りしていた。商店街は殆ど人影も無い。

## 南仏・カタロニア紀行 (第11報・完)

敏翁

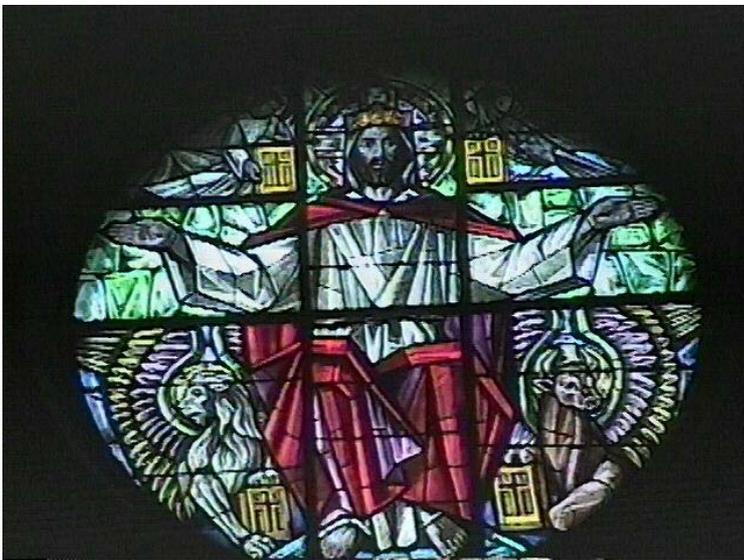
ここから、簡単に行けそうな黄金海岸 (Costa dorada) 沿いにあるカラフェルに向かう。それには、C246 に戻り、そのまま東進(24km)すれば良い。教会 (Santa Creu de Calafell) の前の広場に駐車する。雨は上がっていた。

この教会 (11世紀) は、古い城の構内にあるとの事だが、周りに城の痕跡は殆ど残っていない。教会の壁は相当古そうだが、鐘楼、扉口の上の MARIA 像、さらにその上にあるステンド・グラスの丸窓は、新しいものらしい。

丁度、教会の前に町役場があり、<i> もその中にあるらしいので、入って行く。この <i> も警察と兼ねているらしい。そこに居た、若い (20歳代前半) 警官2人連れに、片言のスペイン語で、「この教会の中を見ることが出来るか?」と尋ねてみる。 彼らは、初めは「ミサの時間でないと開かない」とか何とか言っていたが、粘っているとその内、町内の地図を示

して「鍵はこの家のセニョールが持っている」と言ってくれる。そこで、私はスペイン語はほんの少し (poco poco) しか話せないので、私の代わりに電話してほしい (後半は、身振り手振り) と頼むと、電話番号を調べて (なかなか見つからなかった) 電話してくれた。

5分ほどで、中年の男が鍵を持って現れた。警察官とは、Muchas gracias を繰り返して、握手して別れる。



教会の中は、全く新しくなっていた。祭壇の中央の祭壇飾りがステンド・グラスで出来ている。十字架上のキリストの下に立つ女性が二人 (MARIA とマグダラの MARIA か?) という構図である。

正面 (=入口) の丸窓は、栄光のキリストが丸窓一杯に ステンド・グラス で描かれている。(左図)

その他壁側には、キリストや MARIA の像がいくつかあり、みんな新しいが仕上げの丁寧なものだった。きっとこの町は、裕福なのだろう。

古い教会の現代対応の一つの極端なあり方を見せて貰ったと言う意味で、有意義であった。

Beautiful と言っても解らない様なので、muy bien を連発。(もっと旨い言い方があるのだろうが)

帰りに、男に 500 p t s を握らせようとするが、彼は絶対に (賽銭だと言っても) 受け取らなかった。

又、Muchas gracias と握手で別れた。

これでは、警官と男の親切に対して気が済まない、この町にほんの少しでも何かしてやりたいと思い、そばのバルで、ビール、ハム入りボガディジョ (=長いパンに挟んだサンドイッチ)、カフェ・コン・レチェ (=カフェ・オーレ) のランチを摂った。わずか 550 p t s だったが。

<i> で、警官に次の訪問先、Olerdola (眺めの良いところらしい) の行き方を聞いていたのだが、聞いていた標示を見ないうちにバルセロナ近くまで来てしまった。面倒になって、そのままバルセロナの町に入った。

### XIII. バルセロナ、帰国

今回のホテルは、ランブラにある。調べで、昨年留まったホテルのほぼ真向かいにあることが解っている。

ランブラは、真ん中にある大きな遊歩道の両側を一方交通の細い道が走っている構造になっているため、向かいと言っても、アクセスの仕方は全くちがう。 昨年は、ホテルを探すのに夜中に2時間以上もかかったが、今回は、土地勘が有り、一発でホテルに到着できた。

Hotel Meridien Barcelona (4星)。去年のホテルは3星。

このホテルの駐車システムは、4星だけあって良くできている。玄関の前に乗り捨て、キィをボーイに渡すと、車ナンバーを記入したカードをくれる。車は彼が駐車場に入れてくれる。利用したい時は、地下の駐車場に行き、管理人にカードを示せば、キィを渡してくれる。 次に利用して、帰着した時は、ただキィを渡すだけで良い。便利だが、駐車料1日2000ptsと高い。

ホテルレセプションで市街地図を貰う。見るとカタルーニヤ美術館がちゃんと示されていた。去年は、地図からも消えていたのだった。 先ず、ミニバーでコーラを呑みながら値段を見ると他より高すぎる。

|               | このホテル    | 一般ホテル |
|---------------|----------|-------|
| コーラ小瓶 (200cc) | 380(PTS) | 150   |
| ミネラル水 (250cc) | 250      | ?     |

バルセロナの物価が異常なのだろう。

町に散歩に出る。ランブラは、賑やかで、楽しい雰囲気満ちている。遊歩道の両側のカラフルな花屋の花々、土産物屋の小鳥のさえずり、辻音楽士、曲芸、パントマイムなどの大道芸人。人々はそれを楽しんだり、土産物屋をひやかしたりしながら、遊歩道を横いっぱいになって行き来している。

その雑踏の中に入り、小鳥のさえずりを聞いている内に去年の思い出が蘇った。

ランブラの土産物屋の絵はがきは高い。表に出ているのは一枚 75PTS もする。普通は 25PTS、上等の印刷で 50PTS なのだが。 ランブラの端、カタルーニヤ広場では、インカ系の音楽隊が、物悲しさのある音色で合奏中であつた。彼らが吹き込んだテープを売るのが目的の様だ。

「歩き方」に出ているバルセロナで一番安いらしいスーパーマーケット「シマゴ」(Simago)が、ホテルのすぐそばにあるので、入ってみる。確かに安い。ミネラル水、ペプシコーラ、缶ビールを買って、ミニバーの中に押し込む。

|                | シマゴ     | 単位体積当たりの価格比(シマゴ/ホテル) |
|----------------|---------|----------------------|
| コーラ(330cc)     | 39(PTS) | ~1/10                |
| ミネラル水(1.5リットル) | 29      | ~1/50                |
| 缶ビール(350cc)    | 89      | --                   |

明日は、暑くなりそうだ。このミネラル水を車に積んでドライブしよう。

ホテルで夕食を摂る。サラダとステーキとロゼ・ワイン。食事は比較的安い。

### 5月11日(土)

#### カタルーニヤ美術館

先ず、カタルーニヤ美術館 (Museo Nacional d'Art de Catalunya)に向かう。今まで本報では、ここを MAC と略記してきたが、厳密には MNAC と記すべきなのであろう。国立となったのは、1990年らしい。

ホテルの駐車場を出てランブラ(一方交通)を進むと、海岸近くのコロンブス記念塔に至る。そこで右折、「モ

ンジュイック1」の方向へ進む。（「モンジュイック2」は海岸方向）暫く行くとスペイン広場、このロータリーを回ってモンジュイックの丘に登るのには一寸コツが要る。2回ほど失敗してそのコツをのみこんだ。その後は、この付近も去年徒歩で歩き回った経験があるので、簡単に美術館に到達できた。美術館の入口のそばに広い駐車場がある。

開場（10時）を大勢の人が待っている。奈良から来られたという私と同年輩のご夫妻と話をする。他にも若い日本人のカップルを見かけた。

今まで、多くの美術館を訪れたが、中は相当暗いし、フラッシュと三脚は禁止されているので、主としてVTRで記録を撮って来た。しかし、後で見ると撮影したものが何か解らなくなることがしばしばだった。

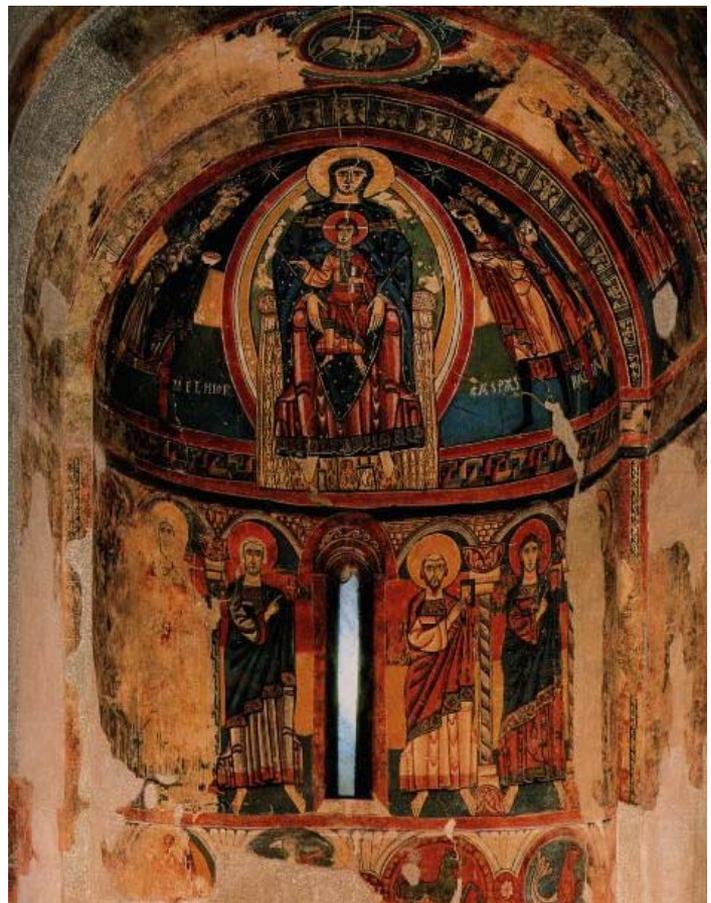
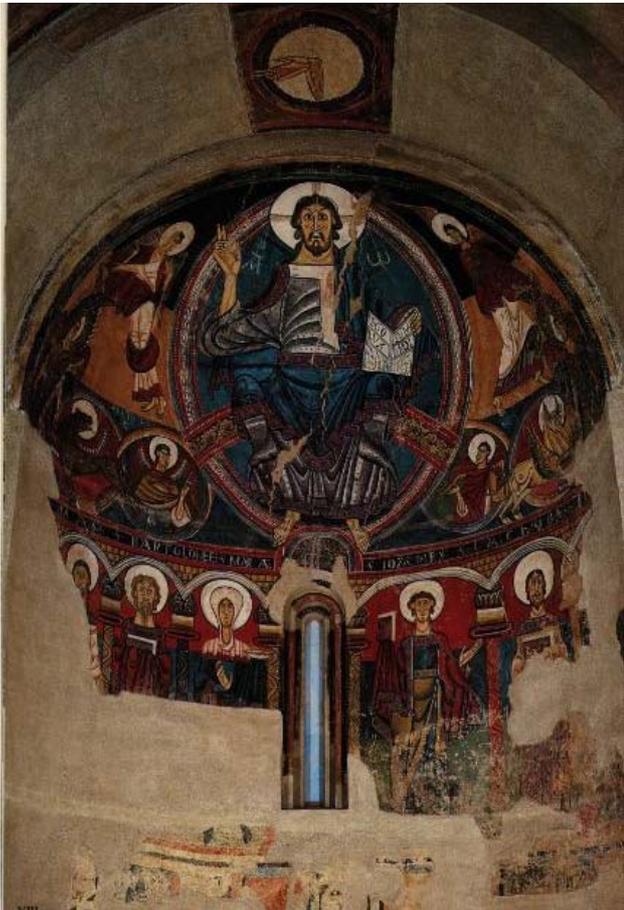
今回は全展示品の詳細なリストの付いた**パンフレット（英文）**が入手（100pts）出来たので、それに順番号を付け、所々に特徴についてのメモも書き込みながら、殆ど全部の撮影をすることとした。そのつもりでも抜けは出たが。

この美術館の内容は、12～13世紀に、カタルーニヤ、特にピレネーの谷間の教会に花開いたロマネスクの美を、壁画などは現場の状態のまま、展示したものである。

その中身は素晴らしく、私も十分満足したが、その内容を文章で簡潔・的確に表現するのは、私の能力を超えている。

良い解説書としては例えば、ゾディアック叢書の Catalogne Romane（私のは、カルカソヌの本屋で求めたもの）には、多数のカラー図版と解説（但しフランス語）がある。

この中から二点ほど掲載させて頂く事にする。



左上図は、タウルのサン・クリメント教会にあった「栄光のキリスト」で、カタルーニヤは勿論の事、ヨーロッパのロマネスク美術の代表作である。（高さは7.7mある。タウルのところでも紹介している。）

右上図は、同じくタウルのサンタ・マリア教会にあった「荘厳の歳暮」である。（高さは6.6mある。この図もタウルのところでも紹介している。）

展示の具体的状況は、次に紹介する「別の文書」でご覧になる事が出来ます。

この旅行記では、別の文書(html)で上記**パンフレット（英文）**とVTR画像から落とした静止画像を使ってカタルーニヤ美術館の紹介を試みる事にした。ビデオ撮影の為画像の質は極めて悪いが多少とも雰囲気伝える事が出来

れば幸いである。

**ここをクリックすればカタルーニア美術館に飛ぶ事が出来ます。**

ここでは、ここの展示内容と、今回及び昨年のスペイン旅行（ここの展示の中にはカタルーニヤ以外のものも若干含まれている）との関係について帰国後整理してみたので、それを記す事にしたい。

|                            |      |
|----------------------------|------|
| 1. 全「展示項目」(*)の数            | 152  |
| 2. その内、出所がはっきりしている展示項目の数   | 96   |
| 3. 今回の旅行(**)で、訪れた場所の展示項目の数 | 21   |
| 4. 去年の旅行で、訪れた場所の展示項目の数     | 9    |
| 5. (3)/(2)                 | 22 % |
| 6. ((3)+(4))/(2)           | 31 % |

\* : 「展示項目」は更に細かく分類されている場合もある。例えばコイン等。コインの場合は、大体出所は はっきりしていない。

\*\* : 今回の旅行とは、具体的に5月6日のアンドラ（第8報 X）から5月9日午前中のアヘル（第10報）迄である。

上記5. の22%や6. の31%は、私なりに努力した割に低い割合に思えたので、上記「リスト」記載の出所と「資料DRC」に載っている場所、教会の全リスト（約160カ所）を見比べて調べて見た。（抜けがあるかもしれない）

その結果は、「資料DRC」が訪問するに足るとしていて、未だ私が訪問していない所はわずか7カ所に過ぎない事が解った。村の名前までは合っているが、教会の名が違うものもかなりある。これらの教会は多分、崩壊してしまっている可能性が高いのではなかろうか。  $(30 + 7) / 96 = 39 \%$

以上より、MAC の出所をすべて訪れようとする試みは、私の様な異国の素人には限界があり、40% 当たりが上限だろう。

ロマネスクの美を堪能して、ロマネスク展示室を出る。そばの係員にゴシックの場所を尋ねる。ゴシックの展示は、今年末からだと言われる。（後で見ると、貰ったパンフレットにもちゃんとそう書いてある。）

来週、バロックの特別展示があると言われるが、それはどうしようもない。

来年あたりもう一度、ここに来られると良いのだが。

これで、念願の MAC は見た。後は適当に回ろうと思い、先ずグエル公園に行ってみることにした。

サグラダ・ファミリアの横を通り、近づく道は、曲がりくねっていて、且つ、進入禁止の小径が多い。それらしい標示は何もない。解らなくなるとは車を止め通りがかりの人に何回尋ねたろう。しかし結局、何回試みても到達出来なかった。ここは、私程度の実力の人間には、車でアクセスは無理らしい。

車をホテルに置いて、地下鉄又はタクシーで行くべきだったと後悔する。

やむを得ず、車を大聖堂近くの地下駐車場に入れる。有料らしく、出る時の事が心配だが、その時はその時処理しようとして割り切る。

大聖堂のそばにある**フレデリック・マレス美術館 (Museo Frederic Mares)**を訪ねる。ここは、彫刻家のマレス(1893-1991)から市への寄贈で出来た美術館で、建物は元のバルセロナ伯の屋敷である。

ここは、撮影を一切禁止していて、所持品はロッカーに収めて見学するシステムになっている。全体は大きく2つに別れていて、一つは「彫刻の部」であり、他の一つは「センチメンタル美術館」と名付けられている。

「彫刻の部」は、紀元前、ローマ時代、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロック、19世紀と膨大なコレクションである。彼の収集癖は徹底していて、普通は避ける様なものまでも集めている。例えば、キリストの割

礼の場面の彫刻などもある。展示では彼の局部は見えないような配置に置いてあった。

又、キリストを抱いたマリアもその着せ替え人形が沢山作られたのだろうか、18～19世紀の生々しい裸の人形の収集があった。

「センチメンタル美術館」になると、彼の収集癖は、病的なほど迄もの凄い。女性の扇子、日傘、時計類、パイプ、煙草入れ、等々。そのどれ一つとっても生やさしい収集量ではないのだ。少し食傷気味になる。

まだ午後2時だ。時間があるので、そばのレストランで一休みする。軽食の積もりだったが、結構本格的なレストランでメイン・ディッシュもとる羽目になり一寸食べ過ぎた。

**大聖堂**の開く時間、午後4時を待ってそこに赴く。。

大聖堂の西正面の前は広い広場になっている。そこからは十分引きをとって見る全体は、堂々としている。建物の落成は、1450年、西正面（ファサード）と尖塔は19世紀のものである。

教会内部に入る。相当な人混みである。回廊内庭に鷺鳥が飼われているのは珍しい。聖堂本体には、入れない。午後5時から開くと書いてあった（ミシュランと違う）。本体の外にある礼拝堂などを見た後、約400mばかり離れたところにある **サンタ・マリア・デル・マル教会 (Santa Maria del Mar)** に行ってみる。

この教会は、近年修復されたが、カタルーニヤ・ゴシック建築としては、最もうつくしいものの一つとされている。天井は高く、中は明るい。祭壇もキリストを抱いたマリアの白い像が立っているだけの誠にすっきりした構成になっている。

丁度結婚式の最中だった。牧師の声が朗々と穹窿に響いている。新婦の年格好は、白衣で解らないが、新郎の頭の後ろの薄さだけが、いやに気になった。

そのそばにある **ピカソ美術館** にも入ってみた。

世界に、ピカソ（1881-1973）のコレクションを持つ美術館は100を超えてあるそうだが、「ピカソ美術館」と名乗っているのは、ここと、パリと、アンティープの3つだけである。

ここの特徴は、彼の子供の時のデッサンから、「青の時代(1901-1904)」、「薔薇色の時代(1904-1906)」頃までに展示の重点がある事である。その後キュービズム(1908-1915)に飛躍(有名なアヴィニョンの娘たちは1907)するのだが、キュービズム初期の展示は極めて少ないようだった。勿論キュービズム以降の作品も置いてある。

彼の若いときの絵を順に見ていけば、キュービズムへの繋がりが解るかもしれないと思いついていったが、そこには全くの断絶があり、繋がりをみることは出来なかった。

こんな事は常識らしい。帰国後、図書館でマリ＝ロール・ベルナダック／ポール・デュ・ブーシェ「ピカソ」創元社で、彼の言葉「私の作品は破壊の集積だ」を知った。

大聖堂に再び行き、本体内部に入る。もの凄い人混みである。祭壇の前は信者が灯した蠟燭で一杯になっている。身廊の両側に設けられた礼拝堂の数の多さとその豪華さには驚かされる。

地下駐車場に戻り、車を出す。出口のところで、ゲートが閉まっていて、何やら操作（コインを入れるとか）が必要らしい。どうしたら良いのか尋ねようと、ハンドブレーキをかけて車から出ようとする、どうした訳かゲートが開いた。訳が解らないままゲートを出た。

ホテルに戻る。夜は大雨になる。昼に食べ過ぎたせいか食欲が殆ど無い。

スペイン最後の夜を残念だが、軽食にする。昨日も行った「シマゴ」にバルがあり、そこでサンドイッチ、ビール、カフェ・オーレにした。540pts。

ホテルで、今日 MAC で撮った VTR を見ていると、抜けている所や、疑問の所が出て来た。明日もう一度、空港に行く途中で訪ねる事にした。

又「歩き方」を見ていたら、サンタ・マリア・デル・ピ教会（ホテルから歩いて5分）の横の広場（同名）で、日曜11時から、絵画の青空市場が開かれるらしい事が解った。これも行ってみたい。

5月12日(日)

最後の日である。10時頃、ボーイに荷物を車に積むことを依頼、チェックアウト。VTR だけもって散歩に出る。今日は天気は良さそうである。ランブラの店は、テントを上げる等準備中。花屋は店先一杯に色とりどりの花を広げている。近くの教会(名前?)に入ってみる。ミサの最中であつたが、都会の中でも名前の知られていない教会は、参加者は10名程度であつた。

サンタ・マリア・デル・ピ教会 (Santa Maria del Pi)の前の広場には、市が立っていて、大勢の人ばかりである。スペインらしく、所々に植えられたオレンジの木が緑の葉の間から大きな実を見せている。

教会扉口の真ん前には、蝋燭売りが出ている繁盛しているようだ。信者はここで求めて、お供えするのだ。

教会の横(同名の広場はここ)では、絵画の市場の為の白い架台が沢山並べられていた。

この教会は、14世紀のカタルーニヤ・ゴシック様式を保っている。教会の中は、信者で一杯である。祭壇の前には、数え切れないほどの色とりどりのガラス・カバーに入った蝋燭が灯されていて、祭壇のマリア像を照らしている。マリアは華やかな衣装を着けてすくと立っていた。

ここの身廊に並んだ礼拝堂も立派である。



11時近くになると、横の広場に画商が店を揚げ始めた。(上左図)

しばらく眺めた後、昨日訪れたサンタ・マリア・デル・マル教会をその横の路地から眺めた風景の油絵が気に入り、1割ほど値引いてもらって購入した。11000pts。

ホテルに戻り、昨日とほぼ同じルート(昨日グエル公園を目指して無茶区茶に走り回った中で、スペイン広場迄行かないで済む道を発見した)で、カタルーニヤ美術館に赴く。もう一度ゆっくり見直したり、昨日抜けたところのVTR撮影をしたりした。

美術館の販売部に、キリストを抱いたマリア像のコピーがあつた。これも気に入り求めた。7900pts。

美術館は高台にあり、その玄関前からの眺めは、今日は天気も良いせいで、実にさわやかだ。

サグラダ・ファミリアの特徴ある尖塔もくっきりと見えた。(右上図)

これで、今回の「南仏・カタロニア・ドライブ旅行」は完了した。

後は、バルセロナ空港に行き、レンタカーを返し、チェック・インすればすべてOKだ。(エール・フランス航空、バルセロナ発16:20。パリで乗り換え。

成田着13日の14:25 去年のイベリア航空より大部能率が良い)

今回も、フランス及びスペインの大勢の人々の暖かい援助のお陰で、私の一人旅を無事完了する事が出来た。  
そのすべての人々に深く感謝したい。

**Merci beaucoup & Muchas gracias.**

『完』